
科学少女プリティミュー

秋月あきら（ししゃもにゃん）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

科学少女プリティミュー

【Nコード】

N9758D

【作者名】

秋月あきら（ししゃもにゃん）

【あらすじ】

街を守るため、突如現れた謎のヒロイン　プリティミュー！ゴスロリ姿のコスチューム、その実体は……バイトで雇われた女子高生！？変人科学者アインの趣味のため、ミュは科学少女に変身して、今日も悪の秘密結社ジョーカーと戦うのだ。マジカルハンマーフィギュアチェンジ！ゆけ、負けるな科学少女プリティミュー！！
1話完結系7話まで完結済み

第1話「蜘蛛男だよプリティミュー！」

なんだ、なんだ、なんだーっ？

空の彼方に躍る影！

白衣を着こなした眼鏡少年は高精度スコープから目を離し、背の高い草むらに潜んでいる制服姿の少女に顔を向けた。

「バイト君、さっそく仕事だよ」

「任せておいて……なんていうわけ、ないでしょ！」

「ノリツッコミができる余裕があるのなら平気さ」

名前すら覚えられてないバイト君　ミユは雇い主の自称天才科学者アインを睨みつけた。

自分よりも年下の少年にこき使われる原因はこれだ。

ミユの腕にはめられたブレスレットに輝く赤い光。これが宝石だったらしいのだが、起爆装置のライトだから、どーにもこーにも雇用主に逆らえない。

このライトが早く点滅したら危険信号。

点滅が止まったらドーンと一発、真っ赤なお花が咲いてしまう。

その後は美男美女が手招きする花畑に直行便だ。とてもじゃないけど笑えない。

郊外に存在する草ボーボボーの池。そこに二人は潜んでいる。目的は狩りだ。

白衣と制服の二人組みが狩るのは鳥ではない。空を見ているが鳥ではない。とにかく鶏でもない。

再びスコープを覗いていたアインがゆっくりカウントをはじめ。

「五〇〇メートル……四〇〇……三〇〇、準備はいいかい？」

「てゅーかよくない、ダメ、むしろムリ」

ミユが装備しているアイテムは虫取り網。ちょっぴり改造が施してあって、ボタンひとつで網に電流が流れる仕掛けになっている。

一方、アインは白衣のポケットに手を突っ込んで突っ立てるだけ。

労働する気ゼロ。そのためのミュダ。

「バイト君、出勤だよ！」

さっきまでアインがスコープで観察していた物体はすぐそこまで迫っていた。

目で確認できるその物体はブーメランみたいに回転するカメラだ。いや、カメラ？

甲羅に一眼レフのカメラレンズを乗せたカメラ。

カメラとカメラの合体生物 巨大珍獣カメラだ！

回転しながら池に着水したカメラの全長は五メートル以上。

虫取り網より大きいジャン！

ミュの顔は痙攣していた。

「だからムリ。だってこの網でどうやって捕獲しろっていの！」

「そこはバイト君の努力でカバーしてくれたまえ」

「努力でカバーできる問題じゃない！」

「さあさあ、早く捕獲に向かわないと起爆スイッチを手動モードで爆発させるよ」

人を人だと思っていないアインの発言。

爆死で儚く死ぬか、カメラと戦って戦死するか……。

どっちも嫌だ！

だが、ミュは虫取り網を高く構えて池に向かって走る。

「電流で気絶させれば勝てる……かも」

ヤケクソで突っ走るミュにアインは軽く手を振り、爽やかな笑顔で勇者を見送った。結果にはそれほど興味がないので、すぐにアインの視線はミュから外される。

「さて、ワトソン君に電話でもかけるかな」

アインが背負っていたランドセルが駆動音を響かせ、稼動したギミックからヘッドセットが飛び出してアインの頭に装着された。

ヘッドセットに付属したマイクにアインが話しかける。

「ワトソン君、頼んで置いた例のブツは手に入ったかい？」

《それがにゃ……あれでにゃ……そうなんだにゃ》

ヘッドホンの奥から聴こえてきたのは幼い少年の声だった。しかも、なにか言葉に詰まった感じがした。

「どうしたんだいワトソン君。課程はいいから、結論を話しておくれよ」

《シヨップに行ったにや……》

「結論を言わない理由はただ一つ。キミの言わんとしていることは理解したよ……この役立たずっ！」

アインの叱咤が飛んだのと同時に、ミュが宙を飛んでいた。「助けてーっ！」

「電話中だからムリな相談だね」

アインの眼鏡レンズは放物線を描くミュを捕らえている。

あっ、落ちた。

どこかで生々しい落下音が聴こえてきた。

そんな状況でもアインは動じなかった。

「あの高さから計算して、良くて重症、悪くて即死かな」

なんてことを呑気な口調で言い、もうかしちゃって……なミュを放置すると、池で海水浴するカメラに視線を向けた。

「バイト君も死んじゃったし、どうやって捕獲するかな？」

まだミュは死んでない……たぶん。

《どうしたにや？》

まだワトソンとの通話は通じているらしい。

「それがだねワトソン君。バイト君が高度十五メートルから落下してね、カメラの捕獲はできないし大変なんだよ」

《ミュさんが落下にや！？》

「そんなことはたいした問題ではないよ。それよりもボクって肉体労働苦手だろ。だから今回の捕獲はあきらめることにするよ」

ランドセルのサイドのフックに掛けてあった手榴弾を手に取り、ピンを抜いてカメラに向かって投げた！

池が水しぶきを上げて大爆発。

ついでにカメラも大爆発。

ボルトがクルクル回って飛んできて、アインの足元に落下した。「ふむ、捕獲には失敗したけど、破壊には成功したね。さてと、バイト君の様子でも見に行くかな」

軽い足取りでアインが向かった草むらで、ミュがうつ伏せに倒れていた。右脚が明後日の方向に曲がっているのがチャームポイントだ。

「ワトソン君、聴いているかい？」

《にゃに？》

「緊急搬送と手術の準備を頼むよ」

《わかったにゃ》

数分後、アインはこの場でヘリを出迎えたのだった。

ネットで見つけた求人広告をプリントアウトし、それを片手にミュはビル郡が見下ろす街を散策していた。

魔導と科学の融合で生まれた魔導炉により、膨大なエネルギーが二十四時間、止まることなくエネルギーが帝都エデンに供給される。この街に昼も夜もない。

昼は繁華街。

夜は暗黒街。

陽が昇っている昼でも、帝都一の繁華街であるハウジユ区は危険に満ち溢れている。

リニアモーターカーが停車するギガステーションがあることから、都外からの観光客の多いこの街だが、一步裏路地に足を踏み入れれば命の保障はない。観光客の女性が行方不明になるニュースなんて珍しくもないのだ。

ミュは裏路地の入り組んだ路を歩いていた。

空を見上げると、ビルとビルの間を繋ぐように、右往左往に伸びるパイプ管が目に入る。都市から供給されるエネルギーを盗むためのものだ。

細い路地を奥へ奥へと進むと、金属の扉がミュの行く手を阻んだ。

扉にはプレートもなにもついておらず、その先になにがあるか示すものはなにもない。透視能力があればきっと中を視ることができ。が、ミュにそんなエスパー能力は当然なかった。

「本当にここかな……」

不安を呟きながらミュは辺りを見回した。

バイトの求人広告を見つけ、考えなしにぶっ飛んできた。

が、今に思ってみれば怪しすぎる。

この陰湿な空気を孕んだ裏路地。

汚れた地面に雑菌細菌がどれほどいるか、考えただけで身体が痒くなる。こんな環境を好き好むのは昆虫戦士Gだ。

「こんな場所に月給一〇〇万のバイトなんてあるわけないじゃん」と言いつつも、ミュの指はインターフォンを押していた。一〇〇万円の恐ろしい魔力だ。

小型ディスプレイにノイズが映り、スピーカーから音声だけが聞こえてきた。

《訪問販売ならお断りだにゃ》

「そうじゃなくて……」

《宗教の勧誘なら、おいらの飼い主は科学狂だにゃ》

「バイトの募集してましたよね？」

《にゃんにゃん、よくきたにゃー。どうぞ中に入るにゃ》

金属の扉が横にスライドし、開いた扉の先に立っていたのは猫だった。

「アインが待つてるにゃ」

「はあ？」

猫がしゃべってる。

きつと高性能ネコ型ロボットに違いない！

ミュはしゃがみ込み、猫のヒゲを摘んで左右に引っ張った。

「かわいいー。よくできてるロボット」

「にゃーっ、痛いにゃー、やめるにゃーっ……」

「ロボットなのに痛いのか？」

「おいらは生身だにゃ！」

「はっ？」

自分を生身だと思い込んでるロボット？

妄想！

幻想！

幻聴？

「ワトソン君、ボクの眼鏡を知らないかい？」

その声は廊下の奥から聴こえてきた。

猫のワトソンはミュに背を向け、首だけを動かして振り返った。

「アインが呼んでるにゃ、あんたも一緒に来るにゃ」

「う、うん」

ワトソンの足取りは速く、ミュは大股で後を追う。

金属の壁が左右を囲み、歩きたびに足音が大きく響き渡る。

「ワトソン君つてば、早くボクの眼鏡探してよ」

また廊下の奥から声がした。

廊下を抜けて部屋にたどり着くと、白い物体が床で平泳ぎをしていた。

「ボクの眼鏡が迷子だよ」

白衣を着た少年が床を這っている。どうやら眼鏡を探しているらしいが、眼鏡ならそこにあるジャン！

思わずミュはツッコミを入れてしまった。

「頭の上に乗ってる眼鏡じゃないの？」

眼を丸くした少年が顔を上げる。

「えっ？ ホントだ、こんなところに眼鏡があるなんて計算外だったね」

頭に乗っていた眼鏡を掛け直し、少年は立ち上がってミュに歩み寄った。

「キミ、ボクの眼鏡を探し当てるなんて只者じゃないね。ボクの名前はアイン・シュタインベルグ」

握手を求めてきたアインの手を握ったミュ。白い手袋の下にある

アインの手が金属のように硬い。義手なのだろうか？

と、そのとき！

腕が伸びた、縮んだ、取れた！？

「うわっ！」

ミュは取れたアインの手を掴んだまま後ろに尻餅をついてしまった。白いパンティがチラリン！

尻餅を付いたミュを満足そうに笑ってアインが見下ろしている。

「本物の手はこっちだよ」

取れたはずの手はちゃんとついていていた。軽く手を振って見せている。

すぐ横で小さなため息を聴こえた。

「アインはイタズラ好きなんだにゃ」

それは尻餅をついたミュの傍らにいたワトソンだった。

からかわれたことを知ったミュは怒ってマジックハンドを投げ捨てた。

マジックハンドがクルクル回転しながら宙を飛ぶ。それを見たア

インが叫んだ。

「危ない！」

なにが！？

「ボクのフィギュアがっ！」

えっ？

アインがマジックハンドをダイビングキャッチ！

「危なかったあ」

冷や汗を額から流すアインの真後ろには、フィギュアが飾られた棚が置いてあった。そのフィギュアの数は一〇〇体を越えている。

美少女モノのフィギュアに混じって、グロテスクなモンスターのフィギュアも多い。

ミュがボソツと呟く。

「……オタク」

「ボクが思うに、その言いようには偏見が感じられるよ」

すでにソフアーで寛いでいたアインが人差し指を振った。

「キミが生まれるずいぶん前にね、日本には秋葉原というオタクの聖地があったんだよ。東京が死都になってしまっただけからは、秋葉原の文化はホウジユ区のお隣のシユウヨウウ区に流れ込んできたわけさ。シユウヨウウ区のおタク市場が年間何億あるか知ってるかい？」

「ごめん、歴史も経済も得意じゃない」

「キミ、学校の勉強もできないだろ。でもね、科学はちゃんと勉強しなきゃダメだよ。科学は男のロマンだからね！」

そこにワトソンのツツコミが炸裂。

「この子メスだにゃ」

「……………」

アイン沈黙。

フリーズした頭脳を高速回転させアイン復活。

「つまりボクの言いたかったことは、科学は男女を問わずロマンなんだよ。そうさ、科学は宇宙と書いてソラと読むんだよ、わかるかい？ それはいいとして、キミ、ボクになんの用だい？」

切り替え早っ！

すっかりアインの独断場で目的を忘れるとこだった。

「バイトの広告を見て来たんだけど、月収一〇〇万って本当？」

ミュが尋ねるとアインはソフアーから飛び降り、笑顔でミュの両肩に力強く手を乗せた。

「キミが一番最初に来たからキミを採用するよ。ボクはなんでも一番が好きなんだ」

「採用？ 本当に？ 一〇〇万円？」

「もちろん月収一〇〇万円さ」

「よしっ、あたしの名前はミュです」

「名前は名乗らなくていいよ。ボクさ、人の名前を覚えるのが苦手だね。二次元キャラなら覚えられるんだけど」

すんなり採用になってしまった。けれど、ミュは一〇〇万円に釣られてやって来たので、バイトの内容をまだ知らなかったのだ。

「それであたしはなにをすればいいの？」

「ボクの助手に決まってるじゃないか。あとホームズの餌やりも頼むよ」

「助手に餌やり……ホームズ？」

「そこにいるだろ」

「そこ、そこ、そこ？」

「フィギュアの棚？」

「フラスコに挿された蒼い薔薇？」

「アインの指さしているのはフラスコの中で泳いでいる赤い金魚だった。フラスコの口より金魚のほうが大きい。小さいうちから中で育てられたのだろうか？」

「フラスコの金魚をぼんやり見つめるミュの腕が掴まれた。違う、プレスレットをはめられた。」

「なにこれ？」

「プレスレットをミュにはめたアインは爽やかに笑っていた。」

「プレスレット型起爆装置に決まってるじゃないか。ボクに逆らったりするとドーンだよ」

「はっ？」

「さてと、巨大珍獣カメラを捕獲に行くよ」

「はっ？」

「ボクの作った合成生物が逃げ出しちゃってさ。大暴れなんかされたらボクが帝都警察に捕まっちゃうだろ。その前に捕獲に行かなきゃいけないんだよ」

「ちよつと待つてー！」

「待てない」

「即答だった。」

「ミュは思わず言葉につまってしまった。自分の置かれた状況が把握できない。」

「プレスレット型起爆装置？」

「逆らったらドーン？」

つまり爆発？

すなわち爆死！？

「あたしこのバイトやめる！」

「だーめ」

イタズラにアインは唇の前で人差し指を立て、笑いながら白衣を翻して背を向けた。そして、思い出したように急に振り返った。

「そうだ、ワトソン君。ボクの探してたあの限定フィギュアがいつもの店で緊急入荷したらしい。キミの命をかけて入手してきてくれたまえ。じゃ、バイト君、カメラの捕獲に行くよ」

逆らったらドーン。

ホントかウソかわからないけれど、ミュは逆らうことができなかった。

そして。

「きゃーっ！」

ミュは自分の叫び声で目を覚ました。

ここはどこ、私はだーれ？

「あたしはミュ……だけど、ここは？」

冷たい手術台の上に寝かされていたミュ。

上体を起こして横を振り向くと、そこには眼鏡少年のアインが立っていた。

「やあ、おはよう」

「お、おはよう……じゃなくてここどこ？」

「手術室だよ」

それにしては手術には無関係そうな、ボルトやらトンカチやら配線コードとか、そんなもんが台の上に置いてある。

巨大珍獣カメラの捕獲に行ったところまで、ミュの記憶は途切れずに続いていた。しかし、カメラに破れかぶれで突っ込んだあたりから、記憶が断片的になってしまっている。

生まれてはじめてミュは空を飛んだ。

そして、堕ちた。
それで、死んだ？

意識はあるし、目の前にはアインが立っている。どうやら死んではいないらしい。

脚も腕も、体のどこを見回しても無傷だ。奇跡だ。ミラクルだ。腕についていたブレスレット型起爆装置もなくなってる。

「起爆装置はずしてくれたんだ」

これで爆死の恐怖から開放された　　と思いきや。

「起爆装置は体内に埋め込んでおいたよ」

「はっ？」

「ついでにキミの身体をサイボーグ化しておいたよ」

「はっ？」

意味不明だ。言葉の意味は理解できるが、とにかくアインの発言は意味不明だ。

「キミの命を救うにはサイボーグ化するしかなかったんだよ」

「人間に戻して！」

「それはムリな相談だね。でも平気さ、ほら」

とアインの手がミュの胸を鷲掴みモミモミした。

思考がうまく作動せずミュの顔が引きつったまま止まる。

「な……なにしてんの？」

「特殊樹脂を使っているから本物のさわり心地と変わらないよ。オイルを循環させているから、人肌も再現されている。つまりね、外観が人間そのものなんだよ！」

「……あっそう」

ロケットパンチ！

ミュの超合金パンチがアインに炸裂。

顔をヒットされたアインがぶっ飛んだ。

床に片膝を付き、頬を押さえたアインが涙目を浮かべている。

「殴ったな、ワトソン君にしか殴られたことないのに！」

アインの鼻から鼻血がツーツと垂れた。

傷を負ったアインに謝ることもせず、ミュは頭を抱えてしゃがみ込んでいた。

「本当にサイボーグになっちゃったの……ありえない、ありえない……」

「ありえるさ、ボクは不可能を可能にする男だよ。サイボーグになったキミは一〇万馬力だよ、人なんて軽々しく殴るものじゃない」

「証拠は？ あたしがサイボーグになった証拠」

ビシツと立ち上がったミュがアインに詰め寄った。

腕組みをしたアインは『うくん』と唸り、頭で電球をひらめかせ手を叩いた。

「そうだ、レントゲン写真を撮ろう。ここはね、もともとアングラな無免許医師の病院だったのさ。今はボクの棲み家だけどね」

そのために、手術室のような施設があるのだ。

アインに連れられミュは廊下を進み、手際よくレントゲンを取り終え、元待合室のリビングでミュが待っていると、レントゲン写真を片手にアインが戻ってきた。

「キミのボディが高性能すぎて上手に写らなかったよ」

「いいから早く見せて」

受け取ったレントゲン写真を天井の蛍光灯に透かす。そこに写ったのはミュの身体の輪郭には間違いないのだが、内部がまったく写ってない。そこには『極秘』と書かれ内部が写ってないのだ。

「なにこれ？」

「キミのボディには最新技術が詰め込まれているからね、極秘なんだよ」

「はっ？」

「うちにあるレントゲン程度じゃ写らないさ」

「だってあたしの身体を改造したのあなたでしょ？」

「資本提供が帝都政府だからなあ」

「はっ？」

ダメだ、会話がかみ合わない。ミュのわからないことが多い。

ソファーに丸くなって座っていたワトソンはテレビを見ていた。

「アイン見てにゃ。ホウジユ区のおフィス街で怪人がだつてにゃ」

「ふむ、ついにバイト君が活躍するときがきたね！」

アインに唐突な振りをされたミュは眼を丸くする。

「意味わかんない、意味わかんない」

「バイト君、キミはね正義の味方なんだよ。悪の軍団ジョーカーと戦うヒーローなんだ。キミの名前なんだっけ？」

「ミュ」

「それじゃあ名前は鉄人μ號で決定ね」

ネーミングセンスが微妙。

うんともすんと言わないミュの前でアインは悩み、ポンと手を叩いた。

「科学少女プリティミュでいいよ。ボディスーツを着て、いざ出動するよ」

展開がとんとん拍子で速すぎる。標準スペックのミュの脳ミソでは処理落ちしてしまう。

考える隙も与えず、アインはミュをボディスーツに着替えさせてしまった。この手際の良さなら、きつと衣料関係のショップの店員になっても成功間違いなしだ！

別室でボディスーツに着替え、姿を現したミュは不思議そうな顔をしている。

「これってボディスーツというか、ドレス……俗に言うゴスロリ」

「違うよ、白ロリだよ」

アインや愛好者にすれば違うかもしれないが、一般人にとってはゴスロリでしかない。

ボディスーツと言われて着替えさせられたのは、白を基調にしたロリータファッション。スカートの裾が膝から高い位置にある。

「こんなので動いたらパンツ見えるじゃん！」

ミュのツツコミは的を射ていた。

「それはだねバイト君、動きやすさとかかわいらしさを追求した結果

さ。嫌ならスパッツを購入することを推奨するね。しかしながら、今はそんな時間はないから、いざ出動！」

ピツとなにやらアインが壁に取り付けられていた赤いボタンを押すと？

「きゃっ!？」

悲鳴をあげたミュが突然足元に開いた穴に落ちた!？

ミュの身体がチューブ状の滑り台を降りていく。ウォータースライダーと構造はそっくりだ。

滑り台の急斜面は90度に変わり、ストーンと落ちたと思ったら、息つく暇もなくミュの身体にはシートベルトが自動装着され、気づいたときには身体が急上昇していた。

秒読み、5秒前、4、3、2、1 ゼロ!

開いたマンホールからミュの身体が天高く打ち上げられた。人間ロケット発射!

ぴゅーん!

真昼の星になったミュはビルよりも高く飛んでいた。

そして、落ちていた。

地面に向かって落下するミュ。

嗚呼、ハウジュ区のおフィス街が見えてくる。てゅーか、近づいてくる。

ここままだゃ潰れたトマトになること間違いなし。

しかし、ミュは成す術なしでアスファルトに大激突したのだった。

謎の物体エックスが地面に激突し、ビビって怪人は大暴れをすることをやめてしまった。

地面にできた小さなクレーターから人影が立ち上がった。

「マジ死ぬかと思った!」

ミュは顔面蒼白になりながら、2本足で立ち上がりイキテル実感をしていた。

このときミュは周りの状況を把握していなかった。もちろん目

の前に怪人がいることも気づいていない。

「おい、キサマ何者だ！」

乱暴に呼ばれ、ミユはハツとして目の前の怪人に気づいた。赤と青を基調にしたボディースーツに頭まですっぽりと隠す怪人。なんとその怪人には手が6本あったのだ。

いや、そんなことよりも、ミユの視線は怪人の股間に……。

「横 ん……じゃなくって、あたしはか……科学少女……プリ……ミユ……」

言い返すミユの視線は怪人の股間をいつたりきたり。

「よく聞こえんなな？」

「うるさい、この横ち 男！」

「よ、横 ん男だとおおお！ オレは秘密結社ジョーカーの怪人蜘蛛男だっ！」

しかし、ミユの視線は蜘蛛男の股間に注目されてしまっていた。

横ち の形がぴっちりもっこりくつきり 男としては恥ずかしい形状だ。

ち このポジション 略してチンポジをボディースーツを着るときに確認してなかったのだろう。

怪人にはよく、変身怪人ゼツ ン星人や三面怪人ダ など、名前の上に 怪人と付くもののだが、蜘蛛男は『横 ん怪人蜘蛛男』で決定だ！

そう思うと、こんな怪人怖くない！

が、ミユの脳裏に過ぎる考え。

ここであたしになにをしろと？

突然、悪の軍団ジョーカーと戦うヒーローだと言われ、女だからヒーローじゃなくてヒロインだよ……みたいなことは置いて、気づいたら変な服を着て怪人を目の前にしてしまっている。

しかも突然、ミユの脳内に響く声。

《聞こえるかいミユ》

幻聴！？

ついにミュは頭が可笑しくなってしまったのだろうか……。
違った。

《ボクの声が聴こえてるかい？》

それはアインの声だった。

「聴こえる……聴こえるけど、どこから？」

《そういう察しの悪い発言はやめてもらいたいね。キミの脳に通信機を埋め込んであるに決まってるじゃないか》

「決まってるじゃない！」

叫ぶミュを周りから見たら、独り言で突然叫んだイカれた女だ。

ミュが通信を行なっていることは周りにはわからない。

《ところでバイト君、キミは危機的な状況に追い詰められていることに気づいているのかい？》

「えっ？」

気づいたら、ミュは蜘蛛の糸で簀巻きにされていた。つまり、身体がグルグル巻き。

ミュ的にピンチ！

傍から見てもピンチ！

チンピだ！

つまりミュはピンチだが、蜘蛛男はピンチの逆のチャンスだ。

簀巻きにされたミュは手も足も出ない。そんなミュに蜘蛛男が詰め寄ってくる。

「ククク、手も足も出ないようだな」

「横ち のクセに、さっさと解いてよ！」

「横 ン横ち って言っていて恥ずかしくないのか？」

「横 ンしてるあんたが恥ずかしい」

蜘蛛男的大衝撃！ とか漢文風に書いてみたりしちゃったりしてとにかく蜘蛛男はミュの言葉の暴力で大ダメージを受けたのだ。

そんなシヨック状態の蜘蛛男から逃走を図るべく、ミュはぴよんぴよん跳ねて背を向けた。

気づけばミュたちを取り囲んでいる人とか人とか人とか。

うわお！？

報道のカメラまであるじゃん！

ここで冷静になってみよう。

変な衣装を着させられ、カメラでテレビ放映されている。

「……友達とか親とかに見られたらヤバイ」

そもそも蜘蛛男なんかと戦う理由もない。

いや、とつてもある。

《バイト君、遊んでいないでさっさと蜘蛛男を退治するんだ。起爆

装置のスイッチ押しよ？》

脅しだ。明らか脅しだ。脅迫だ！

ぴよんぴよんと跳ねながらミユは向きを変えて蜘蛛男と向き合った。

蜘蛛男はまだショックを受けて手を地面について頂垂れている。

横ちは直したくても直せない。こんな公衆の面前でちこをいじるわけにもいかない。

こうなったら吹っ切るしかない。

蜘蛛男もミユもだ。

向かい合う蜘蛛男とミユ。

簀巻きのまま、どうやって戦えと？

ミユは独り言のようにアインと通信をする。

「グルグル巻きにされてピンチなんだけど、どーにかならない？」

《そうだね、あと3分ほどでワトソン君が助けに行くよ》

「3分も待てない！」

傍から見たら独り言のミユに蜘蛛男が不信感を抱く。

「おまえ、さつきから誰と話しているんだ？」

「あたしを改造したインチキ科学者」

《バイト君、起爆装置を爆発させるよ？》

雇い主の脅しでミユは言い直す。

「今あたしが言ったことは聞かなかったことにして。あたしを科学少女プリティミューに改造したちよー天才科学者アイン様」

《そして、キミは悪の軍団ジョーカーを倒すために立ち上がったヒーローだと、その蜘蛛男君に説明してあげたまえ》
アインの腹話術人形になってミユはしゃべる。

「そして、あたしは悪の軍団ジョーカーを倒すために立ち上がったりなんかしちやったりして……」

「我らがジョーカーに歯向かうとは馬鹿な女だ！」

ミユに牙を剥く蜘蛛男。

簀巻きのみゅぴんち！

このまま横　ん蜘蛛男に襲われてしまふのかっ！？

逃げても爆死。

逃げなくても蜘蛛男の餌食。

どっちもイヤだ。

もう駄目だとミユが強く目をつぶったとき、空からは一筋の光が飛来していた。

キラリーン

マスクの奥で眼を剥いた蜘蛛男に物体エックスが激突した。

「あべばっ！」

よくわからん奇声を聞いたミユが強くつぶっていた目をあけると、そこにはなんと泡を吹いて倒れる蜘蛛男の姿が　しかも痙攣して横　んまでピクピクしてるぞ！

瀕死で倒れる蜘蛛男の傍らには、三毛猫のワトソン君の姿があった。蜘蛛男は飛来してきたワトソン君の石頭にKOされたのだ。てゆーか、ワトソン君は無傷だ。

「助けに来たにや」

とワトソン君はネコ型ロボットのな、そんな手でどうして道具が器用に使えるの的に、スプレー缶からシュツシュとミユに霧状エックスを吹きかけたのだった。

するとミユの身体をグルングルンと巻いていた蜘蛛糸が、ジュワジュワと溶解して消えてしまったではないか！

わおおミラクル!!

説明しよう。実はこのアイテムはアインの発明した 雲溶かスプレー だったのだ。本来は 雲固めスプレー で固めた雲を元に戻すために使用するものだ。ダジャレかつ!

蜘蛛の糸から開放されたミュにアインから通信が入る。

《バイト君、蜘蛛男が弱っている今がチャンスだ!》

「チャンスって武器もないし」

手ぶらのミュにワトソン君がなにかを投げ渡した。

「受け取るにゃー!」

「受け取るってなに!？」

反射神経でミュが受け取ったのはピコピコハンマーだった。つまり玩具のハンマー。殴るとピコピコ音が鳴るハンマー。

《バイト君、それで弱っている怪人を叩くんだ》

「叩けて……えいつ!」

ミュは弱っている蜘蛛男を非情にもピコピコハンマーでぶん殴った。

ピコピコピコと小鳥が鳴くようにハンマーが音を立てる。蜘蛛男にはほとんどノーダメージだ。それどころか気絶していた蜘蛛男が目を覚ましてしまった。

起き上がった蜘蛛男が6本の手を広げてミュに襲いかかってくる。変質者まがいだ。

「よくもやってくれたな!」

「あたしなにもしてないし!」

必死で円を描きながら逃げるミュを蜘蛛男が追いかける。その場でグルグル追いかけてこしているところが緊迫感ゼロだ。アニメ以外でこんな光景なかなか見れない。

しかし、ミュは必死だ!

「助けてえ!」

《バイト君、マジカルハンマーを使うんだ!》

「使ったじゃん、使ったけど無意味だったじゃん!」

《それはキミの使用方法が悪かったに決まってるじゃないか》
使用方法なんて説明うけていない。

《バイト君、今からボクが……あつ、アニメの時間だ。それではバ
イト君、健闘を祈る》

ブチツと一方的に通信が切られた。

ミユの命よりもアニメが優先されたのだ。

「ありえないーい！」

叫ぶミユ。このときアインにたいする確実な殺意が沸いた。

蜘蛛男との追いかっこをいつまでも続けるわけにはいかない。

手元にある武器はマジカルハンマーという役立たずのアイテム。

どうするミユ！？

そんなミユの視界に入る三毛猫ワトソン。

「助けて！」

猫の手も借りたい状況。

ワトソン君は地面に紙を広げて、そこに書かれた文字や図説を読
んでいた。

「マジカルハンマーの説明書を読んてるから、ちよつと待つにゃ」
そんな余裕ミユにない。

「ちよつとつて何時何分何十秒、地球が何回回ったらー！」

焦るミユに追い討ちをかけるように、蜘蛛男の手から糸がシュッ
と飛ばされた。しかも6本同時だ。

飛んで跳ねて飛び込み前転して蜘蛛の糸を避けるミユのスカート
が乱れ、チラリン、チラリン、チラリン

事件を中継しているテレビカメラがパンチラを捕らえる！

野次馬のヲタクがコスプレ美少女ミユのパンチラを激写！

きつと今日中に科学少女プリティミユのサイトが立ち上げられ
るだろう。

説明書を読み終えたワトソン君が顔をあげる。

「ミユ！ おいらのいうとおりにするにゃー！」

いうとおりにも、ミユが蜘蛛の糸から逃げるのに必死だった。

パンチラなんて気にしない、気にしてられない。

それに加え、改造手術の際にBカップからDカップにバストアップされたために、乳が暴れる乱れる悲鳴をあげる！

サービスショット満載のミュが聞いてようと聞いてなかるうと、ワトソン君がマジカルハンマーの使い方の説明をはじめ。

「まずは萌えメーターをあげるにや。萌えメーターを上げれば上げるほど、必殺技の成功率があがるにや」

「萌えメーターってなにっ！」

ミュはちゃんと説明を聞いていたらしい。

「胸についてるハートがいつぱいになればいいにや」

ワトソン君に言われミュは自分の胸元を見た。するとそこにはハート型のアクセサリーがついていた。そのハートは5分の1程度がピンク色に輝いている。つまり輝きが一杯になったらメーターが満タんに貯まった証拠ということだろう。

ワトソン君が説明を続ける。

「萌えメーターが一定量貯まったら、『マジカルハンマー・フィギュアチェンジ！』って唱えながら敵をぶん殴るにや」

どんな必殺技が展開されるのか、よくわからない。果たして本当にそんなので怪人を倒すことができるのか？

しかし、ミュに得策があわるだけでもなく、ワトソン君のいうとおりにするしかない。

逃げ回っていたミュが足を止めて振り返る。

立ち向かえミュ！

マジカルハンマーを天高く振り上げてミュが叫ぶ。

「マジカルハンマー・フィギュアチェンジ！」

ミュが振り回したマジカルハンマーは見事に空振り。しかし、空振った反動で360度回転して、奇跡的にマジカルハンマーが見事に蜘蛛男のおでこにヒット！

「あべばっ！」

奇声をあげた蜘蛛男の身体が見る見るうちに縮んでいく。いった

いなにが起こっているのか？

そして、蜘蛛男は15センチほどまで縮み、まるでそれはフィギュアのようになってしまったのだ。

蜘蛛男フィギュアをさっさと回収するワトソン君。

「フィギュアも手に入ったし、アインのところに戻るにや」

あつけない。あつけなさすぎる。途中の苦勞がバカらしく思える。蜘蛛男を退治したミュの周りに、報道陣やカメラ小僧たちが急に集まってきた。

「あなたはいつたい何者なんですかっ！」

浴びせられる質問にミュは戸惑いながら、小声でボソリと呟く。

「科学少女……プリティミュ」

これを合図にもっともつと人と人がミュに押し寄せてきて、質問が雪崩のようにミュを襲った。

「なぜあなたは怪人と戦うのですか！」

「今日の下着は何色お？」

「そのコスチュームは手作りですか！」

「初体験はいつう？」

「いつたいあなたの正体は！」

それに紛れてミュのお尻をタッチする痴漢まで現れた。

怪人なんかと戦うよりも身の危険を感じたミュが逃走する。

「あたし忙しいんで、さよなら！」

ミュ爆走逃走激走　コケた。

スカート巻き上げ、アスファルトに正面衝突。パンチラショットをまたカメラに撮られてしまった。

立ち上がったミュは顔を真っ赤にしたまま逃げた。

そして、これを気に夕方のニュースや翌日の新聞に『あの少女はいつたい誰だ！』と見出しを飾ることになったのだった。掲載写真がパンチラショットなのは言うまでもない。

アインの研究所に帰ってきたミュは速攻でアインの姿を探した。

「アインどこにいるの!」

殺意を含んだ声音だ。

アインは無機質なリビングでテレビを観賞していた。もちろんアニメだ。

テレビの前に立ちほだかるミュ。

「あなたね、あたしが苦勞してるときになんでアニメなんか見てるわけ!」

「ちょっと邪魔だよ、今いいところなんだから」

首を伸ばしてミュの後ろの画面を見ようとするアイン。だが、テレビ電源はミュの手によって遮断されてしまった。

「ぐああああああつ!」

叫ぶアイン。

途中でアニメを消されるなんてアニメ好きには屈辱だ。

狂気に駆られたアインが白衣のポケットからコントローラを取り出した。

ヤバイ、もしかや起爆スイッチ!?

ピッとアインがコントローラのスイッチを押すと、急にミュは顔を苦痛に歪めて腹を押さえて床に沈んだ。

「……つな」

ミュの腹を襲う鈍痛。

眼鏡の奥のでアインの瞳が輝く。

「ボクも悪魔じゃないからね、いきなり起爆スイッチを押したりはないさ。ただ、ボクに逆らうと痛い目を見るよ」

アインの持っているスイッチを押すと、ミュは激しい腹痛に襲われてしまうのだ。

「こ、この……悪魔……」

ミュは床に伏して上目遣いでアインを睨む。だが、もう身体も動かずアインを殴る余裕もない。

そんなミュに救いの手が伸びる。

「ミュがかわいそうだにゃ」

ワトソン君だった。

「アニメはどーせDVDで録画してるにや」

「それは違うよワトソン君。オンタイムで見ることの意味があるんだよ」

「ミュのおかげで新しいフィギュアも手に入ったし、許してあげるにや」

「仕方ないなあ」

アインはスイッチを切り、ワトソン君からフィギュアを受け取った。あの蜘蛛男フィギュアだ。

フィギュアの並べられた棚に蜘蛛男フィギュアを加える。

「カメラの捕獲には失敗しちゃったからね」

残念そうに呟くアイン。

そう、実はミュが改造人間になるきっかけになったカメラ捕獲は、カメラをフィギュアにするというアインの趣味が招いた結果だったのだ。

ミュが聞いたらまた怒り出しそうだが、ミュは激しい鈍痛に耐えかねて気を失っていた。

秘密結社ジョーカーの秘密基地。

通信装置の前に跪く人影。

「ゲル大佐、ただいま帝都支部に到着いたしました」

威風堂々とした女性の声が基地内に響き渡った。

それに答えるように通信装置から威厳を持った男の声が聴こえた。相手の顔はシルエットになっていてわからない。

「どこの誰ともわからぬ小娘にやれるとは、蜘蛛男は我がジョーカーの恥である」

「アタクシが帝都支部を任されたからには、一日も早く帝都をジョーカーの手中に入れて見せましょう」

「それが言葉だけにならぬよう精進するのだな」

「まずは手始めにプリティミューの首を持ち帰ってみせましょう」

「ふははははは、任せたぞゲル大佐！」
「御意」

通信を終えて立ち上がったゲル大佐の姿は半裸だった。黒い皮のベレー帽を被り、上半身はサスペンダーで乳首を辛うじて隠すのみ
すごいコスプレだ！

いや、エロイ。

成果の上がない帝都支部に中東から派遣されてきたゲル大佐。
名前はゲルだが、見た目は大人の色気がムンムンだ。

ルージユを吊り上げながら、ゲル大佐が腰から鞭を抜いた。

「嬢王様とお呼び！」

バシンと鞭が床の上で踊った。

鞭を鳴らしたゲル大佐の前にはボディスーツを着た戦闘員たちが
整列している。右から赤、青、黄、緑、黒の順番だ。

ゲル大佐が鞭を鳴らした。

「貴様ら服装がたるんでいるぞ！」

ぴっちりボディスーツのどこがたるんでいるのかひと目ではわからない。

動揺する戦闘員にゲル大佐の鞭が炸裂した。

「キーツ！」

奇声をあげて倒れる戦闘員の腹にゲル大佐のハイヒールの踵がね
じ込まれる。

「ち この位置がたるんでいるぞ！」

恥ずかしげもなくち こというゲル大佐の表情は真剣そのものだ。
ゲル大佐が話を続ける。

「蜘蛛男は横 なんだった。そういう気のたるみが敗北に繋がったの
だ。以降横 んをした者は、その場でアタシが死刑を下す、いいな
っ！」

一括されて戦闘員達はひと目も気にせず、股をまさぐってチンポ
ジを直す。

震え上がる戦闘員達を影から笑う者がいた。

「ケケケツ、ゲル大佐殿、そんなに戦闘員達を苛めるのがお好きですか？」

声を主を探そうとゲル大佐が辺りを見回す。

「誰だ！」

「わたくしめでございます」

天井から羽を広げて降りてくる黒い影。

それを見取ったゲル大佐は誰だか悟った。

「蝙蝠伯爵か」

「左様でございます、ゾル大佐殿」

ゲル大佐の目の前に現れたのは蒼白い顔をした中腰の老人。タキシードを着こなした背中には漆黒の翼が生えている。吸血怪人蝙蝠伯爵だ。

蝙蝠伯爵はゲル大佐の顔を見ながら不気味な笑みを浮かべた。

「プリティミューの首を取る役目、わたくしめにお任せいただけないでしょうか？」

「首を取る自身があるのか？」

「いえいえ、若い乙女の生き血は極上の味。プリティミューの生き血を味わってみたいのです、ケケケツ」

「ふふっ、おもしろい。よかろう、プリティミューはおまえに任せただぞ 蝙蝠伯爵！」

「お任せを」

霧のように蝙蝠伯爵は姿を消した。

戦闘員たちも姿を消し、ゲル大佐の鞭が甲高く鳴いた。

「プリティミュー、アタシをがっかりさせるなよ……おほほほ、おほほほっ！」

静まり返った基地内にゲル大佐の笑い声が木霊した。

ついに本格的な帝都制圧に乗り出した秘密結社ジョーカー。

帝都支部に派遣されたゲル大佐の命により、吸血怪人蝙蝠伯爵の魔の手が科学少女プリティミューに迫る。

戦いの渦に巻き込まれたミユの運命はいかに！

第2話「蝙蝠伯爵だよプリティミュー！」

帝都の夜に潜む悪。

仕事帰りのOLに忍び寄る影。

痴漢でも通り魔でもない。

キャンピングカーみたいなシルエットが近づき……通り過ぎた。

思わせぶりかよ！

あっ、バックで戻って来た。

戻って来た車のドアが開かれ、OLはあっという間に車内に引きずり込まれてしまった。

「きゃ~~~~っ！」

OLの叫びが車の中に木霊した。耳がキンキンして、耳鳴りになってしまう。大変だ。

違う、車の中に連れ込まれたことが大変だ。

OLをさらった相手はきつと変態だ。

なぜって！

白衣に聴診器装備。

お医者さんごっこ！？

やっぱり変態だ。

白衣の上で蒼白い老人の顔が嗤っている。

「ケケケツ、美味そうな娘だ」

老人の口から長く伸びた歯が覗いている。

まさか、その歯で女性の首元を……。

ブスツと！

OLの首筋にぶつとい注射針が刺さった。

歯は見せかけかよ、思わせぶりかよ、期待はずれかよ！

注射器が女性の血を吸っていく？

もともと注射器の中は真っ赤な液体で満たされていた。

血を抜いているのではなく、謎の液体を注入しているのだ。

いったいなにをされているのか？

OLの意識は闇の底に落ちた。

そして、老人の笑い声が木霊する。

「ケケケツ……ゲホゲホツ！」

笑いすぎて咳き込んだ。

お爺ちゃんムリしないでね

一瞬、意識が堕ちかけたOLは目を覚まし、老人が咳き込んでいる間に逃げた。

車を飛び出し、人通りの多い繁華街に逃げる途中で、また意識が遠のく。

そして、今度こそ本当にOLは気を失ってしまった。

地面に倒れるOLに忍び寄る男の影。

ミニマム学院女子中等部2年 ミユ。

ひよんな出来事からサイボーグにされて10万馬力。バスタはBからDにアップしてラッキーと思いきや、実は合成樹脂の作り物。

そんでもってなぜか怪人と戦うハメに……。

帝都の平和を守るため、それゆけ科学少女プリティミュー！

なんていうのは嘘っぱちで、実は変人科学者アイン・シユタインベルクの趣味、フィギュア集めがメインだったりする。

改造されても、怪人と戦うハメになっても、やっぱり学校には行かなきゃいけない。

でも、ごく普通の学生生活は営めそうになかった。

体育でバレーをやったら、殺人サーブで本当に殺人をしかけ、女子生徒をひとり病院送りに……。

友達の肩を軽く叩いたつもりが、肩が外れて脱臼で病院送りに……。

もう嫌だと逃げ出せば、早く走りすぎてコンクリの壁を突き破る。器物損壊で逮捕されると思いきや、偶然にも誰にも見られず、壁に空いた穴は巨大モグラがやったと話丸く収まった。

そんな問題累積のミュ。

しかし！！

本当の問題はアレだった。

怪人横ち 男 もとい、怪人蜘蛛男と謎の美少女との戦い。もちろん謎の少女とはなにを隠そう、パンツ隠さず顔隠さずのミュだった。

プリティミューとして戦ったミュの姿が、数分後にはネットでバラ撒かれ、数時間後にはハウジュ区のローカルニュースでテレビ進出を果たし、翌日には科学少女プリティミューフアンクラブが発足した。

学校で否普通に過していたミュだが、病院送り事件を起こしたことに関わりなく、なぜか周りの視線が熱かったり寒かったりする。その理由はなぜってこともなく、プリティミュー＝ミュの公式が、生徒たちの間で伝染していたからだ。

プリティミューのパンチラ写真や映像が、そこら中に出回っているせいか、それとも『えっ、ミュちゃんてゴスロリの趣味があったの！？』という嫌煙か、誰も直接ミュにプリティミューの正体について訊かなかった。

訊きたいのに訊かないという、周りの雰囲気を感じるミュは、そんな態度するくらいなら訊いてくれモジモジ気分。蛇の生殺しのようなものだ。

そんな感じで学校での一日が終わろうとしていた。

教室をさっさと出て帰宅をしようとするミュ。

このままでは友達をなくしてしまう クラス全員病院送りにして、学級崩壊。

どーに対策を練らなきゃいけない。なので今日はこれ以上怪我人を出す前に帰宅。

しようかと思ってる矢先、ミュとは色違いの制服を着た女子生徒が廊下を爆走してくるではないか！？

この状況でミュが確認できる事項は、制服の色から判断して、走

つてくる相手は一個下の1年生だということだ。それ以上の情報は皆無。けれど、なぜかミュは逃げた。

改造人間にされても、やっぱり人間いざというときの第六感。ビビツと危険を感知したミュは逃亡した。まだ悪いこともしていけど逃亡。器物損壊をモグラのせいした罪もあるけど、1日で友達を二人も病院送りにしたけど、とりあえず走ってくる女の子には悪いことをしていない。

と、思う。

「待ってくださいゼンパイ！」

後ろから聞こえる声にミュは耳を塞いだ。

聴こえない聴こえない、きつと幻聴。

改造されて聴力が良くなっていたとしても、聴こえない聴こえない。

人間思い込みが大切だ。

「きゃあっ！」

後ろから悲鳴が聴こえ、思わずミュは足を止めた。

振り返るとアノ女子生徒が大の字になってコケていた。スカートがめくれて、パンツ丸出しだ。

もうすぐミュは下駄箱を出ることができる。アノ女子生徒がコケている今が、振り切って逃げ切るチャンスだ。

ミュの良心VS悪心！！

ズッコケタ女の子を放っておけない。という良心。

ズッコケタのは自業自得のおつちよこちよいだ、そんなドジ置き去りにして逃げちまえ。という悪心。

二つの心の狭間でミュは動けなくなってしまった。

そんな葛藤している間にミュの背後に忍び寄る謎の影！

「ゼンパイ！」

元気ハツラツな声の主は、コケていたはずの女子生徒！？

女子生徒は眼鏡の奥の瞳をキラキラ輝かせている。

しまった、葛藤している間に復活してしまったらしい。

純粋な人間のころから脚の早かったミュだが、改造後の今ならまだ逃げる余地はある。

けれど、これだけの至近距離に迫られた今では『センプайって自分のことだったの？ てつきり別の人を呼んでるのかと思っちゃったテヘツ』という言い訳もできない。

無理やり逃げて感じ悪い人と思われたくない。

なのでミュ・スマイル炸裂！

「どうしたの、あたしになにか用？」

と白々しく訊いてみるテスト。

「センプайの正体って科学少女プリティミューですよっ！」

縮髪強制にも優るとも劣らないストレートだった。

今まで周りは訊きたくても訊かなかったのに、なんて清々しいクエスチョン。

思わずミュも『うん（音符マーク重要）』と答えそうになったが、ゴクンと言葉を呑み込んだ。

「だ、誰それ？」

知らないフリをしてみるテスト。

「わたし今写真持ってます」

女子生徒がポケットから取り出した写真は紛れもなくプリティミュー。ネットで複製に複製を重ねられているパンチラ激写シーンだ。写真を前にしても、まだ認められない。

「世界には自分に似た人が三人いるとかいないとかいうけど、その写真の人あたしにソックリ。でもあたしのほうが髪の毛がちょっと長いかな」

「同じ髪型に見えますけど？」

「1センチ、0.5センチ……1ミリくらいあたしの方が長いかな……あはっ」

苦しすぎて窒息しそうになる言い訳だ。

眼鏡の奥でミュを見つめる瞳は疑い一色。

「センプайがプリティミューですよねえ？」

「だ、だとしたら……?」

「わたしファンなんです!」

「はあ?」

ファンとのファーストインパクト。

昨日まで普通の中学生だったのに、人生180度回転。顔の見えないファンが、あとどれくらい、いることやらわからない。

このままでは、突然知らない人にプレゼントを押し付けられたり、後ろを振り返ったらストーカーに追っかけされそうだ。

やっぱり認めちゃいけない。

「だからあたしプリティミューとかじゃないし、今日はじめて名前聞いたし……」

「やっぱり正義の味方は自分の正体を明かしちゃいけないんですね!」

「えっと……そうじゃなくて……」

「でも絶対にわたしがセンパイがプリティミューだって証拠を見つけてみせます!」

「あはは……そう」

マズイ展開だ。下駄箱にミュの乾いた笑いが響き渡った。

コッソリ靴を履いて、コッソリ後ろにミュは下がる。

「あたし急に急用があるような気がしてきちゃった。またね!」
できれば『また』はないで欲しい。

ミュは逃げた。

その背中に声がかかる。

「わたしの名前メグっていいですよ!」
眼鏡少女メグ。

記念すべきプリティミューの追っかけ第1号だ。

てゆか、ストーカー第1号!?

後ろから付けてきてるし!

下校するミュの後をストーカーキングするメグ。電信柱の影に隠れているが、ストーカーキングする前から気付かれていますので、今さら隠れ

てもバレバレだ。にも関わらずメグは私立探偵気分で隠れたつもりになっている。

どうしちゃうミュ!

どうやってメグを撒く!

人間以上のスピードで走れるミュだけど、そんなスピードで走るわけにもいかない。そんなの自分は人間じゃアリマセンと言ってるようなもの。

「……カミサマ助けて」

なんとなく祈ってみる。ミュは無宗教だが、きつと心の広いカミサマなら助けてくれるだろう。

そんなミュに救いの手が!

白いワゴンがミュの真横に止まり、開いたドアから巨大マジックハンドが伸びた!

そして、ミュは救いのマジックハンドによって、車内に引きずり込まれてしまった。これって救いなのか?

救いの手というより、魔の手かもしれない……。

車内でミュを待ち受けていたのは、光り輝く巨大な瞳。

その正体は!

白衣の眼鏡少年。背負ったランドセルから伸びたマジックハンドがミュを捉えている。こんなギミックを使うミュの知り合いはひとりしかない。

自称天才科学者のアインだ。

「やあ、バイト君」

未だに名前を覚えてもらっていない。

てゆーか、町中で突然車の中に連れ込まれるのは人攫いだ。

そんなことより、車を運転してるのネコだし!!

アインの助手のワトソン君だ。もちろん、『ワトソン』が苗字で『君』が名前だ……んなことはない。

最近は何でも運転できると告知を打つ車のCMもあるが、ネコが車を運転するのは想定外だ。

てゆーか、ワトソン君人語話すし！

「ミュさんこんちわにゃー」

「こんにちわとかそんな問題じゃなくて、どーしてあたしさらわれ
てるワケ!？」

アインの眼鏡がキラリーンと光る。

「説明しよう。新たな怪人が現れたらしい。ぜひともボクのコレク
ションに加えたいね」

「ハア？」

嫌悪感全快モードのミュにすかさずアインが呟く。

「ドーンと行くよ」

ミュ封じ&言うことを聞かせる呪文だ。

体内に爆弾を埋め込まれたミュは、アインの意志でドーンと逝っ
てしまう。

しかし、ミュにも考えがある。

「やれるもんならやってみなさいよ、こんな場所で爆破したらあな
たも巻き添えなんだから！」

「……バイト君、頭よかつたんだね」

うはっ、絶対バカにしてる。言い方がバカにしてる。

年下なのにバカにされてる！

ちなみに年下と言うのは憶測。見た目的にはガキンチョだが、実
年齢はまだ聞いていない。親しき仲にも礼儀ありってやるだね（言
葉の使い所を間違ってる&まだそんなに親しくない）。

バカにしている証拠にアインはすでに切り返しを考えていた。

「しかしね、バイト君。ボクに起爆スイッチを押させないためには、
キミが常にボクの近くにすることが最低条件になるよ。さて、それ
では今回の任務について話そうかな」

もう前の話おわりですか？

切り替え早すぎですよアインさん。

完全にミュ無視の方向性でアインは話し続ける。

「もちろんバイト君も知っていることとは思うけど、夜間に独り歩

きをしている女性が、車に連れ込まれ血を抜かれるという事件が多発している」

「……知らないし」

「その犯人がジョーカーの怪人らしいんだ」

またミュの発言はムシである。

ミュが知つてようが、知らなかつてもいいのだ。どっちにしても話はミュを置いて進み続ける。

車の運転を続けていたワトソン君が、車を停めて振り向いた。

「ついたにゃ」

どこに？

ミュは窓ガラス越しに外の景色を眺めた。

十字のマークを掲げる白い建物。

ミュはいつの間にかホウジユ区からカミハラ区に移動し、帝都随一の大病院に来ていたのだ。

病院の名前は帝都病院。政府公認の病院のクセして、腕さえあれば無免許でも雇うとんでもない病院だ。

「で、ここになんの用？」

と、尋ねるミュにアインは微笑んだ。

「着いて来ればわかるさ、ここに被害者が入院してるんだ」

ワゴンを降りて歩き出すアインのあとをミュは急いで追っかけた。

病院ロビーについたアインは辺りを見回す。白衣を着ているが医者ではない。ランドセルを背負った医者なんかいますか！

帝都にならいるかもしれないけど。

「あつちだね」

と、前置いてアインはスタスタと歩きはじめた。

どこに行くかわからないままついていくミュ。ちなみにワトソン君は車でお留守番。お留守番もできるなんて、エライネコだね！

アインたちがたどり着いたのは、一般病棟ではなくだいぶ奥まった隔離病棟。

IDなどが無いと入れない場所なのに、アインはIDカードを差し込み、静脈認証まで済ませて先に進む。

アインって何者なの？

なんて疑問がミュの脳内に浮かぶ。

白い扉が左右に開け、患者のいる個室に入った。

部屋は一般病棟の個室と変わらず、窓から景色も望める。比較的軽く、逃亡の心配のない患者が入られる場所だろう。

逃亡の心配がないというのは確かだろう。

ミュは日当たり良好な窓辺に立つ患者を見て息を呑んだ。

植えられてる！

まるで患者は植木のように鉢植えに足を突っ込んでるのだ。

しかも体調が優れないのか、顔色が悪い。そう、まるで葉緑体で色づいているみたいに、草色をしている。

ま、まさか！

「植物人間！？」

芸人みたいに声を張るミュ。

ミュの勘は正しいかもしれない。

なぜならば、鉢植えに植えられた女性の指先から、実がなっている。赤くて瑞々しいトマトがなっているじゃありませんか！

トマトマンだ。女性なのでトマトウーマンだ。トマトはフルーツだ！

アインは意識がないトマトウーマンの傍に行つて、トマト（仮）を指さした。

「コレ、なにに見えるかい？」

「トマトでしょ？」

「見た目はね」

「見た目はって……？」

「中身は血だよ、血」

グ、グロイ！

瑞々しいトマトの中には女性の血がいっぱい詰まってるのだ。

とつてもグロイよトマトさん。

真面目モードでアインはミュを見つめる。

「これはジョーカーの仕業なんだ」

「なんでこんなヒドイことを……」

「彼ら怪人はみなキメラ生物なんだ」

「キメラ生物？」

「遺伝子操作をされた合成生物さ。今回もその実験の一環かもしれない」

全世界できつと猛威を振るつてると思う秘密結社ジョーカー。まだまだ謎だらけの組織だが、なぜアインは奴等と戦っているのか、やっぱりフィギュア集め？

「というわけでバイト君、いざ出動だよ」

また唐突な出動命令だ。

「はあ？」

「はあじゃなくて、ハイだろ。とにかく出動だよバイト君。今回の任務はこのクランケをこんな姿にした怪人をフィギュア化することだよ」

「はあ？」

「そうだ、今日は良いアイテムを持ってきたあげたんだ。ちょっとキミのケータイ貸してよ」

「はあ？」

「早くケータイ貸してよ。まさかケータイ持ってないとか言う原始時代的なことはいわないよね？」

「はあ？」

完全にミュ置いてけぼりで展開している。

ミュはなんとなくケータイをアインに手渡した。するとアインはケータイの端末からデータをインストールしてミュに返した。

「これで完了だよ」

「なにが？」

「さっきから理解力不足だよバイト君」

本当に理解力とかも問題だろうか？

「ちゃんと説明してよ」

「仕方ないなあ、一回しか言わないからちゃんと聴くんだよ。ケータイに777と打って『サイエンスパワー・メイクアップ!』と叫ぶんだよ。ちなみに叫ぶときにケータイを頭の上に掲げるとカツコイイよ」

「はあ？」

「とにかく実践だよ。やってみなよ」

「はあ……」

ため息をついてミュは言われたとおりやってみた。

「サイエンスパワー・メイクアップ……」

ちなみにダルイのでケータイは掲げなかった。

しかし、やっぱりなんか起きた！

突如眩く光り輝くミュの体。重力無視でふわりと浮き上がり、クルクル回転しながら体の周りになにかが巻きついていく。ちなみに光輝くシルエットで、BからDに豊胸されたバストが強調される。

「な、なに!?!」

ミュが驚いているうちに変身完了。

なんとミュはいつの間にか白いゴスロリ姿に変身していたのだ。

科学少女プリティミュー見参！

驚いているミュにアインが補足説明。

「ちなみに変身時、ちよつとだけ裸になるからね」

「はあ!?!?!」

本日で一番デカイ『はあ』だ。

「大丈夫だよ、キューティー蜂蜜と違って輝いてるからモロ見えしないよ」

そういう問題なのか、輝いていても公衆の面前で変身したら、素っ裸になることには変わりないような。

アインがミュの背中をポンと押す。

「とにかく早く出勤して怪人をフィギュアにしておいでよ」

「だからなんであたしが……」

「バイト君、起爆スイッチがドーンとか以前に、キミはボクに月収100万で雇われてるんだよ、忘れてないかい？」

「ミュがバイト君と呼ばれる由縁。バイトしてるからバイト君。そのまんまだ。」

「忘れてないけど……」

「今月の給料は前払いしてあげただろ」

「そ、そうだけども……」

「ミュの心の天秤が揺れる。」

怪人と戦うか、100万円を手に入れアインに起爆スイッチを押させないか……。

「やる！ あたし行つてきますす！」
即決した。

なぜつてすでに前払いされた100万円の一部を使い込んでしまっていたから。

「物分りが良くて助かったよ。それでは出勤したまえバイト君」

「はい、頑張つて行つてきますす！」

給料を返せない痛さから、ミュは行くしかなかった。作り笑いを浮かべて。

でも、病室を駆け出そうとしたミュが急ブレーキ。

「ちょ、ちょっと待つて、行くつてどこに？」

「そのくらい自分で考えなよ」

「はあ？」

なんの手がかりもない。被害者の女性はすぐそこで光合成をしているが、口を聞ける状態じゃなさそうだ。まるで本当に植物になつてしまったように、魂が抜けている。

そのとき、ミュのケータイの着信が鳴った。

「知らない番号からだ」

ナンバーディスプレイは非通知でもなく、登録してある番号でもなく、090からはじまる誰かのケータイからのようだった。

「もしもし？」

通話に出てミュウが尋ねると、電話の向こうから悲痛な叫びが！

「助けてセンパイ！」

「誰！？」

「メグです……助けて……」

そこで通話はツーツーと切れた。

「番号教えてないのに……」

さすがはストーカーだ。

しかし眼鏡少女メグの身にいつたいなにか？

てゆうか、わざわざなせミュウに助けを求めたのだろうか？

てゆうか、助けに行きたくてもどこにいるのかわかんねえーよ！

「知り合いの子から助けてって電話がきたんだけど？」

ミュウはアインに顔を見合わせた。

「ふむ、正義のヒロインは困ってる人を助けに行かなきゃいけない

よ」

「でも場所がどこかわからないから」

「相手の電話番号はわかるかい？」

「うん、着信履歴が残ってる」

「見せたまえ」

ケータイに表示された番号を見るや、アインはランドセルからパ

ソコンを取り出し、キーボードを連打しはじめた。

けれど、その動きもすぐに止まる。

「ホウジユ区だね、キミが通ってる学校の近所らしい」

パソコン画面を見るアインの横でミュウも画面を覗いた。そこには

地図と赤く点滅する点が表示されていた。ケータイのGPS機能で

メグの居場所を突き止めたのだ。

パソコンをランドセルにしまって駆け出すアイン。

「行くよバイト君！」

「えっ、う、うん」

アインを追いかけてミュウも病室を飛び出した。

病院内では入っちゃいけないのにな!

ワトソン君の運転する車ですぐに現場に向かう。

カーナビには先ほど調べたメグの居場所が表示されている。
が、ワトソン君はカーナビを見ながら焦っていた。

「相手が移動してるにゃ!」

アインは後部座席から身を乗り出してカーナビを見た。

「移動してるね。たぶん車かな」

相手が一箇所に留まっていなるとなると厄介だ。車で車を追いかけるのは物理的に難しい。

けど大丈夫、こっちには自称天才科学者アインがついている。

「高速ならジェットエンジンで追いかけるけど、住宅街じゃムリだね」

自称天才さじを投げる。

うはつダメじゃん!

なにか言い手はないのか?

ワトソン君が気付く。

「止まったにゃ」

追いかけている相手が止まった。

信号待ちかと思っただが、どうやら違っらしい。大型スーパーの敷地内で赤い点が止まっている。

まさかお買い物かっ!

今晚のおかずを買うつもりなのかつ!

今晚の夕食はカレーなのかつ!

これは好都合だ。相手がお買い物をしている間に追いつける。本当に買い物をしているかは、カーナビからは皆目不明だけど。

本当に買い物をしているのか、相手はまったく動く様子がない。

その間にミユたちを乗せた車は目的地に着いてしまった。

夕方の買い物客が多いこの場所に、本当にメグがいるのだろうか? アインは車の窓から外の様子を窺った。

「アレ、怪しいね」

視線の先にあるアレとは、大型の車だった。その周りには人が集まっている。それは献血車だった。

カーナビの位置から見ても、あの献血車の位置をピッタリだ。けど、どうしてあんな場所にメグがいるのか？

まだいるとは決まったわけじゃなく、電源が入ったケータイがあるだけかもしれない。

とにかく確かめなきゃいけない。

さて、ここで次の行動が重要になってくる。

が、アインは即決だった。

「それではバイト君、献血者を装って行って来たまえ」

「ヤダつてば、あたし注射苦手だもん」

「本当に献血をする必要はないよ、ちょっと中の様子を見てくればいいよ」

「だったらワトソン君の方が適役のような」

ミュはワトソン君に顔を向けたハズだった。なのにいない！

隠れられた！

そうやらワトソン君も注射が苦手らしい。

仕方なくミュが行くことになり車から降りた。

そこでミュは重大なことに気付いた！

しまったプリティミューの衣装のままだ！

恥ずかしさで顔を真っ赤にしながらミュは車の中に戻ろうとした。

ド、ドアが開かない！

閉められた！

閉め出された！

鍵を閉められた！

「中にいれてよ！」

ドアをドンドン叩くもシカト。ミュの超合金パンチでもへこまない車は素晴らしい。

声を張り上げて車を殴っていたことで、ミュは周りの視線を集め

てしまった。

もうここまでで人の注目を浴びたら行くしかない。
今さら着替えてもムダだ。

なので、ミュは俯き加減で献血車に向かって歩き出した。
献血車の前に出来ている短い列にミュも律儀に並ぶ。

献血を受けるヒロインの姿は社会に貢献してるよね！！

ミュの番が来て車の奥に通された。

そこには白衣にサングラス姿の老人の姿があった。見るからに怪しい臭いがプンプンだ。

サングラスの下で笑う口と、手に持った注射器が不気味だ。

丸椅子に座らされ、ミュはいつの間に見守りに腕を消毒されていた。
た。

マズイ、このままでは本当に献血してしまう！

「あの、あたし献血しに来たんじゃないんです！！」

「このお嬢ちゃんを抑えろ」

と、老人は注射器を構えて行った。なんて強引な医者だ。

いや、そもそも本当に医者なのか？

医者だとしても見るからに藪医者っぽいぞ。

押さえつけられたミュは必死に抵抗しようとするが、なぜかこの
看護婦力が強い。

「放して！」

暴れてミュは老人の腹を蹴っ飛ばした！

ヤバイ、プリティミュのキックは殺人キックだ。相手が老人な
ら粉骨爆砕してしまう。

蹴られた老人は後ろのカーテンを破りながら吹っ飛んだ。

マズイ、殺してしまったかもしれない。

が、老人は何事もなかったように立ち上がった。ご老体のクセし
て強いぞ。もしかしてボケで痛みも感じないのか！？

「ケケケツ、お主ただの人間ではないな？」

尋ねる老人のほうがあきつとただの人間じゃない。

ミユは質問をオウム返しした。

「あなたこそ何者！」

「よくぞ訊いてくれた。わしは偉大なるジョーカーの怪人蝙蝠伯爵じゃ」

「ジョーカー!？」

しまった、こんな場所でジョーカーの怪人に出遭うなんてついでない。

狭い車の中に閉じ込められたミユに逃げ場はない。

しかも、さっきまで看護婦だった人が全身タイトの男に変わってる。ミユの視線は全身タイトの股間に注目だ。モツコリしてる!

前回の蜘蛛男同様、ミユはどーしてもモツコリした股間に目がいってしまう。

ダメだ、可憐な乙女が戦闘員の股間ばかり見ちゃダメだ。

ミユは必死になって股間から目を放した。すると、その視線の先には床に倒れた人影があった。

先ほど蝙蝠伯爵が破ったカーテンの後ろに隠されていたのは?

「メグちゃん！」

やはりメグはここに拉致監禁誘拐されていたのだ。

困ったことにメグは気を失っている。

困ったことにミユは2対1だ。

困ったことに気付けばミユも車に拉致監禁!

どうするプリティミユー!

絶体絶命のピンチを迎えちゃったミユの運命はいかに!

どうするもなにもない。

「逃げなきゃ」

ミユはアクションコマンド『とんずら』を発動。

しかし逃げられない。

大きな車とはいえ、やっぱり逃げ場がないほど狭い。

しかしやっぱり逃げる。

強引にでも逃げる！

戦闘員Aに顔面パンチを食らわせ、閉まっている出口にプリティミューキック！

なんて必殺技はないけど、とにかく蹴りを食らわした。

吹っ飛ぶドア。飛んだドアの先に通行人がいないことを祈りつつ、ミユは見事脱出成功ミッション1クリア。

ミッション2は追いかけてきた蝙蝠伯爵をどうにかする。

追いかけてきた蝙蝠伯爵が白衣を投げ捨て、タキシード姿に変身した。

「ケケケツ逃げてもムダだ」

蝙蝠伯爵と向かい合うミユ。

「もうこうなったら戦うけど、そんなことよりなんで陽が出てるのに平気なの？」

蝙蝠伯爵のバツクには沈みかけている太陽がある。

「わしは蝙蝠伯爵、吸血蝙蝠であって、吸血鬼ではない」
納得の答えだ。

てつきり雰囲気的に吸血鬼だと思っていたミユのミスジャッジ。

「ややこしい怪人だなあ、もお！」

勝手に間違えたのだから逆ギレだ。

いつの間にか辺りには買物客たちで人だかりができていた。
ケータイカメラでバッチリ撮られてる。

駅前とか遊園地のヒーローショーのノリだ。

「頑張れプリティミュー！」

野次馬の中から声があがった。すでに正体バレてるし。てゆか、ローカルヒロインなのに、もう知れ渡ってるとは情報社会って怖い。

バレてるついでに蝙蝠伯爵にもバレた。

「お主が蜘蛛男を倒したプリティミューか！」

「……ええっと、まあ成り行きで……」

「お主がプリティミューと知ったからには、その首を持って帰らねばならん」

「マジで！」

秘密結社ジョーカーを完全に敵に回してしまったミュ。一昨日までの平凡な生活サヨウナラ。

頑張れ、負けるな、くじけるなプリティミュー！

逆境に負けずに悪に立ち向かうのだミュー！

と、いききたいところだったが、なんとここで重大な問題が発覚。

ミュは自分の両手を見た。

……素手だった。

丸腰〓素手〓ピンチ！

焦るミュは作戦を考えた。

名づけて時間稼ぎ。ポピュラーな作戦のひとつと言えよう。

「えーっと、戦いをはじめめる前にいくつか質問があるんだけどいい？」

質問攻撃だ！

これを有効に使えば敵に精神的ダメージを与えられるかもしれない。

「どうして献血なんてしてたの？」

攻撃力の弱い質問だった。

「若い乙女の血が好物なのだ。お主の血も味わってくれる、ケケケッ」

近づこうとしてくる蝙蝠伯爵に、ミュは手を突き出して待ったをかけた。

「ちよちよ、ちよつと、まだ質問は終わってなくて、あの、その、えつと……」

質問が思いつかないミュは、逆に精神的に追い込まれてダメージを受けそうだった。

そんな困ったミュの元へ、野次馬を掻き分けて白衣の少年が現れた。

「なら代わりにボクが質問しよう」
アインだった。

「蝙蝠伯爵と言ったね、トマトの遺伝子を植え付けられた患者がいるんだけど、ボクはそれがジョーカーの仕業と睨んでるんだけど、どうかな？」

「ケケケツいかにも、わしの仕業だ。その患者とやらは、あと一歩で逃げられたO.Lだな」

「やっぱりね」

自信満々の笑みを浮かべるアインにミュが質問。

「なんでわかったの？」

「天才というのは無意識のうちに森羅万象を読み取る力があるんだ。だから勘が鋭くなる。つまりね、世の中の現象は全て繋がっているということさ。数値こそがこの世の心理、計算で導けないことは、この世に存在しないんだ。でもね、導けるといっても、ほとんどの現象には膨大な計算が必要なわけで、佐藤さんちの来週の食事を当てると言われても、計算しているうちに来週になってしまいう可能性も大いになるけどね。ちなみに佐藤さんちの今日の晩御飯はカツカレーらしいよ」

もうすでに誰もアインの話の聴いていなかった。でも、佐藤さんが誰なのかは気になる。

ミュは蝙蝠伯爵の戦いが今まさにはじまろうとしていた。

けど、できれば戦いたくない。ミュは。

なのでまだまだ粘ってみる。

「ええっと、まだ質問があるんだけど、どうしてメグちゃんをさらったりしたの？」

「あのお嬢ちゃんはわしのプラントになるのだ」

「プラント？」

「わしの食事を栽培する人間植物じゃ」

ミュはまだ首を傾げている。

わかりやすく説明すると、カワイイ女の子をさらって、植物人間にして、血の実を収穫して食べるということだ。

まあ、なんておぞましいんでしょう。

蝙蝠伯爵がロリコンで眼鏡っ子好きだったなんて、おぞましい。老人のクセにロリコンだなんて、不潔！

眼鏡少女メグがお爺ちゃんに食べられちゃう！
なんとしても助けなくては！

でも、ミユは素手だった。

やっぱり素手じゃ戦えない。

そこにグットタイミングなことが起きた。二本足で立っているワトソン君から、ミユにマジカルハンマーが投げられた。

ミユは見事マジカルハンマーをキャッチゲットした。これさえあれば、たぶん、きつと、おそらく100人力だ。

見た目はただのオモチャにしか見えないピコピコハンマー。しかし、その実体は驚くなかれ、自称天才科学者アインが発明したウエポンなのだ。

このマジカルハンマーで攻撃された怪人は、なんとフィギュアになってしまうという恐ろしい武器。科学者のクセに、物理法則を無視した魔法としか思えない現象が起こる、マジカルなハンマーなのだ。

マジカルハンマーを構えたミユ。その手が汗で滲む。冷や汗とかそういう類ではなくて、恥ずかしくて身体が火照って出た汗だ。

白いゴスロリ姿にピコピコハンマーという姿は、ただのコスプレにしか見えない。その上、マジカルハンマーで敵を叩くときに、『マジカルハンマー・フィギュアチェンジ』などというセリフ（呪文？）を言わなくちゃいけない。

そんな趣味がないミユには恥ずかし過ぎる行動なのだ。

マジカルハンマーを握ったまま、その場で立ち止まっているミユにアインから催促。

「バイト君、6時からアニメがはじまるから手短にやつつけちゃってくれたまえ」

ミユの決死の戦いよりも、アニメ優先。どーせ録画しているクセに、オンタイムで観ることにアインはこだわっている。

もうこうなったらミュはヤケクソだ。100万円と自分の命を守るため、ついにミュは蝙蝠伯爵に立ち向かった。

「マジカルハンマー・フィギュアチェンジ！」

大きく振りかぶったミュのハンマーは空振った。パンチラチラリン

空振りをした反動をしたミュが尻餅を付く。まさか、恥ずかしいセリフを叫んでミスるなんて、信じられない。と言った目でミュは上空を見ていた。

夕焼け空をバックにして漆黒の翼を広げる蝙蝠伯爵の姿。ミュの攻撃を空に飛んで回避したのだ。

「空飛ぶなんてズルイ」

呟くミュ。

続けてアインも呟く。

「上空戦を考慮にいれるの忘れてた」

自称天才のクセに忘れるなんて、やっぱり『自称』だ！

考慮に入れるのを忘れていたということは、それすなわちミュに空を飛ぶ術がない。蝙蝠伯爵と戦えないということだ。

またまたミュピンチ！

上空にいる蝙蝠伯爵に、文字通り手も足も出ない。

こうなったら、手と足以外を出すしかない。

ミュは自分の靴を脱いで蝙蝠伯爵に投げ付けた。

「降りてきてよ！」

ある意味足で攻撃するも、軽く靴はかわされ、やっぱり手も足も出ない。

蝙蝠伯爵は長い牙を覗かせて嗤っている。

「ケケケツ、手も足も出ないようだな」

そんなこと言われなくてもわかっている。だからクツを投げたのだ。

「うるさい、さっさと下に下りてきて勝負してよ！」

ミュは怒鳴って見るが、効果は薄く蝙蝠伯爵はあざ笑っている。

「ならば降りて進ぜよう」

急に蝙蝠伯爵が滑空してミュに襲いかかる。

風のように襲い迫る攻撃をミュは必死に避けた。運動神経はミュの自慢なのだ。

しかし、そのままカウンターを食らわそうとミュはするが、すぐに蝙蝠伯爵は上空に逃げてしまった。

「この卑怯者！」

ミュの罵声は虚しく響いただけ、蝙蝠伯爵にはノーダメージだった。

「卑怯とは失礼な、羽を有効に使った戦法じゃ」

「伯爵とかいう偉そうな名前のクセに、女の子をイジめるような戦い方をするなんて卑怯よ！」

「ケケケツ、可愛い娘を苛めるはわしの趣味じゃ」

サディストだ。ロリコンのサディストだ。卑怯者でロリコンのサディストだ。卑怯者でロリコンのサディストのお爺ちゃんだ。

「絶対あたし負けたくない」

ミュは心に強く誓うのだった。

そんなころ、アインはなにをしているかということ、地べたに座ってノーパソでテレビを見ていた。

「宝石強盗だって、コレうちの近くだよ」

ニュース番組に夢中だった。

ダメだ、アインったらまったく役立たず。

そんなころ、ワトソン君なにをしているかということ、ちようちよを追いかけて遊んでいた。

ダメだ、アイン以上に使えねえー。

もうミュは独りで戦うしかない。

自分って不幸なのかもと思いはじめたミュに、周りの野次馬から声援が！

「頑張れミュー！」

「あんな怪人コテンパンにしちゃえ！」

「今日の下着何色ゲヘゲヘ」

若干不純物も混ざっていたが、ミユは胸に熱いものが込み上げてきた。

「そうだ、あたしは独りで戦ってるんじゃないんだ。あたしにはみんなついてる！」

その勢いでミユは蝙蝠伯爵に立ち向かおうとした。が、ミユの視線は上空。

やっぱり空飛び相手じゃ手も足も出ない。一気にボルテージ低下でヤル気減退。

落ち込むミユに声援が飛ぶ。

「頑張れ！」

「胸はなにカッブ？ ゲへへ」

「立つんだジョー！」

不純物が増えている。これじゃヤル気もまったく出ない。

ついにプリティミユは戦いに敗れてしまうのか！

ついにつてほど怪人と戦ってないけど。これで2人目だ。

上空から再び蝙蝠伯爵がミユに襲い掛かる。

ミユは決死の覚悟を決めた。

逃げずに迎え撃つ！

「マジカルハンマー・フィギュアチャンジ！」

蝙蝠伯爵はミユの目と鼻の先だ。

そんな状況下で、献血車から女の子が降りてきた。

「センパイ！ やっぱり助けに来てくれたんですね！」

メグに声をかけられビクリドッキリミユは振り返った瞬間、回した腕が蝙蝠伯爵の顔面に炸裂。

歯を粉碎されながら、鼻血ブーで蝙蝠伯爵はブー飛んだ！

ミユのミラクルな攻撃が決まった。

ついに地上に落ちた蝙蝠伯爵。

「おによれー、プリティミユー！」

歯を砕かれ、鼻血ブーで、うまく喋れないらしい。

立ち上がるうと蝙蝠伯爵が地面に手を付いた瞬間、ゴキツと濁音

が辺りに響いた。

蝙蝠伯爵は変な体制で動きを止めてしまっている。

「こ、腰が……」

ギックリ腰だ！

吸血怪人蝙蝠伯爵も歳には勝てなかったらしい。

ギックリ腰で蝙蝠伯爵が動けない今がチャンス！！

「マジカルハンマー・フィギュアチェンジ！」

横殴りでミュのマジカルハンマーが炸裂した！

「ぎゃあああ！」

叫んだ蝙蝠伯爵の身体が見る見るうちに縮んでいく。

そして、呆気なく小さなフィギュアになってしまった。

さっきまでちょちょと遊んでいたハズのワトソン君がすかさずフ

ィギュアを回収。

終わったのだ。

戦いは終わり、ミュは勝利したのだ！

ドツと疲れて立ち尽くすミュにメグが駆け寄る。

「センパイ！」

「……しまった」

どうにか誤魔化さなくては……。

とっさにミュは目を片手で隠し、残って手で鼻をつまんだ。

「センパイって誰のことかな？」

鼻のつまった声で苦し紛れの誤魔化しをするミュをメグはきよと

んと見ている。

「なにしてるんですかセンパイ？」

「センパイなんて知らない。私は正義のヒロインプリティミュー。

ミュさんと私は一切無関係だから、彼女に迷惑をかけないように。

それではさらばだ！」

メグに背を向けて逃亡するミュ。始終苦しすぎる言い訳と行動だった。

頑張りミュ！

負けるなミュウ！
苦しすぎるぞミュウ！

秘密結社ジョーカー帝都支部。

ゲル大佐は蝙蝠伯爵が倒された報告を受けていた。

「おのれ、またプリティミュウか……」

ゲル大佐は怒りに任せて鞭を鳴らした。その衝撃でほぼ丸見えの巨乳が揺れる。今にも乳首を隠しているサスペンダーが外れてポロリしそうだ。

歯をガチガチ鳴らすゲル大佐の正面で、通信装置が波打って何者かのシルエツトが現れた。

即座にゲル大佐は背筋をピンと伸ばして敬礼をする。

「首領！」

突然の首領の通信にゲル大佐は硬直した。

「蝙蝠伯爵がやられたそうだな」

「ヤー！」

ドイツ語でイエスと答えるゲル大佐の顔は苦々しい。

首領の口調は厳しかった。

「小娘相手になにをしておったのだ」

「蝙蝠伯爵は歳でちこが使い物になりませんでした。だから負けたのです！」

蜘蛛男が負けたとき同様、ゲル大佐はちんにこだわっているようだ。半裸状態のコスプレから考えても、やっぱりただのんこ大好きな痴女だ。

「ちこさえしっかりしていれば勝てたのです！」

よくわからない理屈だ。

物陰から声がした。

「ちこちこことこだわっているから、負けたわけではありませんか？」

姿を現したのは赤いハイレグ水着に手はカニのハサミ……じゃな

かった。よく見ると、サソリの尻尾が生えている。サソリ女だ！

「ち こなどついているから気になるのです。このレイディスコーピオンが必ずやプリティミューを倒して見せましょう」

メスのレイディスコーピオンにはち こはついていないが、根本的な問題として戦いにち こは関係ないよう気がする。

だが、ゲル大佐は期待を寄せた。

「ふふっ、よかろう。プリティミューのことはお前に任せただ、レイディスコーピオン！」

「はい、お任せあれ」

女二人の笑い声が基地に木霊した。

秘密結社ジョーカーに命を狙われるミュ。

ち このないレイディスコーピオンが、科学少女プリティミューに戦いを挑む。

果たしてプリティミューVSレイディスコーピオンの女同士の戦いゆくえはいかに！

第3話「レイディスクコーピオンだよプリティミュー！」

「冬だ、海だ、常夏だ!？」

「これは収録された映像ではありません、生放送です！」

と、ズラ疑惑のあるアナウンサーは熱弁して、自分の腕をバックの海に向けた。

白い砂浜と青い海、サンサンと輝く太陽。

ビーチで日光浴をする人たち、海に腰まで浸かつてはしゃぐ恋人たち、小さな子供が砂でお城まで作っている　冬なのに。もちろんみんな水着だ。

「決してこれは極寒の中で我慢比べをしているものではありません！」
夏以上に暑苦しいアナウンサーはスタッフからカキ氷を受け取って、ひとり早食い競争をはじめて1秒03のタイムで完食した。世界記録は及ばない。

「このとおり、カキ氷も美味しく食べることが……」
ぎゅるるるう〜。

お腹が悲鳴をあげて、急にアナウンサーの顔が真っ青に。その映像をテレビで見っていたアインが叫ぶ。

「きつとシロップがブルーハワイだったから顔が青くなったんだ！」

「そんなわけないにや〜」

呆れ声のワトソン君のツッコミ。

アインは指を横に振って、チツチツと舌を鳴らした。

「わかってないねワトソン君。ミカンを食べると手を黄色くなるのと同じ原理さ」

「それとこれは違うにや」

「どう違うか科学的に説明して欲しいものだね」

「だってブルーハワイを飲んでも顔は青くならないにや」

「わかってないね、今からボクが科学的に証明……っ!？」

テレビのスピーカーから悲鳴が聴こえて、アインは瞳孔を開いて

画面に釘付けになった。

《た、大変です、海の中から巨大な影が！》

アナウンサーのドアップから映像がパンして、逃げ惑う人々と波立つ海を映し出した。

巨大な波を従えて、三角頭の影が砂浜を覆った。

海の中から白くて長い吸盤付きの脚が何本も伸びる。この焼いたらとっても美味しそうな脚はまさか……。

イカだ！

その映像を見たワトソン君はゴクンと生唾を飲んだ。

「美味しそうだにやあ」

アナウンサーは危険を顧みず、自ら巨大イカに突撃取材を試みた。《海から突如巨大なイカが現れました！果たしてこのイカはどこから来て、なんの目的で我々の前に現れたのでしょうか！》

巨大イカの大きさは胴体だけでもアナウンサーの2倍以上ある。

脚まで入れたらどのくらいあるか計り知れない。

アナウンサーは額の汗を拭いながらマイクを巨大イカに向けた。

《あなたはいったい何者なのですか！》

もちろん返事などなかった。

《どうやらこのイカはシャイなようです。他の質問をしてみましよう。恋人はいるんですか？》

その質問を浴びせた瞬間、長い脚がアナウンサーに襲い掛かってきた。

咄嗟にしゃがんだアナウンサーだったが、その頭から髪がなくなっていた。

しまったズラを取られた！！

巨大イカの吸盤に奪われたカツラ。しかも、そのカツラからお札がバラバラと舞ってくる。なんとアナウンサーはズラの中にへそくりを隠していたのだ。

お茶の間にツラまでバレて、へそくりの隠し場所までバレてしまった。

ズラが取れてしまったら開き直るしかない。アナウンサーは一皮向けてプロ根性を見せはじめた。

《なんと凶暴なイカなのでしょいか！ 30万円した私のズラを奪うとは、盗人の才能もあるようです！》

なんかコメントが滅茶苦茶だった。

しかし、使えないアナウンサーを差し置いても、アインはテレビに釘付けにされた。

そして、さらなる衝撃がアインを襲う。

《なんですかあれは！》

アナウンサーが海に指を差した。

な、なんと海から砂浜に謎の爬虫類が上陸してくるではないか！しかも二足歩行の爬虫類だ！

いや、爬虫類というニュアンスは少し違うかもしれない。あれはゴラだ！

衝撃映像はまだまだ終わらなかった。

空から何かが砂浜に向かって飛んでくる。クルクル回転するあれは……カメだ。カメの甲羅が回転しながらやってくる。

しかもその甲羅の上に一眼レフのレンズを乗せている。これってまさか……？

「カメラだ！」

アインが歓喜の声をあげた。それはプリティミュー第1話に出てきた珍獣の名だった。

砂浜に次々と現れる怪獣たち。

怪獣大戦争がはじまるというのか！

アインはメガネの奥で目をキラキラ輝かせた。

「今すぐ行くよ！ ワトソン君、バイト君に電話だ！」

アインの目的はただひとつ、世界にひとつだけのフィギュアを集めるため。

そんな趣味のせいで、今日もミユは苦勞をさせられるのだ。

真っ赤なオープンカーが海に向かってレッツゴー！

運転しているのは……なんとアインだった。正確にいうと、アインが背負っているランドセルからマジックハンドが伸びて、それがアインの代わりに運転している。

「アインって免許持ってるの？」

と、聞いたのはミュだ。

わけもわからず後部座席に乗せられ、どこに行くかも聞かされていなかった。半分拉致られた。

「免許なんか持つてるわけじゃないじゃないか」

あっさりアインは言った。まあ運転しているのはマジックハンドだ。たぶん無免許運転にはならない、たぶん。

けれど、運転席にアインが座っていることには違いない。巡回中のサツに見つかったら、やっぱり尋問されそうな予感だ。だってアインの見た目はどう見ても小学生だ。

車に乗っているのは小学生と中学生と、ネコ。うん、問題ないとにかくポリスに見つからなければいいのだ。良い子は決してマネしちゃいけません。

オープンカーは国道を南下し続け、ミュはどこに行くのか察しがついた。

「もしかして海に行くの……真冬なのに」

「アタリだにゃ」

ワトソン君が言った。当たっても賞品は出ない。

ミュは陰鬱な顔をした。

「なんで海なんか行くの……真冬なのに」

「今日は」

ワトソン君が今日の趣旨を説明しようとした瞬間、アインのマジックハンドがワトソン君の頭を引っばいた。そして、アインがすぐさま口を開く。

「今日はただのレジャーだよ、あはは。日ごろの疲れを癒してもらおうと思っただけ」

ミュウが座席の間から身を乗り出して、じとっとした瞳でアインの横顔を見つめた。

「普段どれだけあたしのことをヒトと思って扱ってないと思ってるわけ？ それを今日は疲れを癒せだって……絶対に裏があるんでしょう？」

無謀だと知りながら敵に突っ込ませるわ、身体を勝手に改造して爆弾まで仕掛けるわ。でも、改造されたおかげでバストサイズはBからDに豊胸した。

アインは基本的に利己主義だ。そんな人間の言葉を信じられるはずがない。

「裏なんてないさ」

絶対にアインは目線を合わせないで言った。

まあ、行けばわかるだろうと思っただけミュウは後部座席に背を付けた。「レジャーねえ。しかもなんで冬の海なの。どーせなら彼氏と行きなかつた」

と愚痴を漏らすミュウ。

車に乗ってるのはガキとネコ。

ここでワトソン君が訊いてきた。

「ミュウは彼氏がいるにゃ？」

「……いるに決まってるじゃない！」

声をあげて息もあげるミュウ。必死な感じが彼氏ナシと物語ってる。いたとしても妄想の王子さまだ。

ミュウが墓穴を掘ったところで、海岸の風景が徐々に見え来た。

冬の海といえば、灰色がよく似合うような陰鬱なイメージがあるが、目に入って来たのは青い海と白い砂浜。そして、ミミズがアスファルトの上で干からびそうな照りつける太陽。

なにか様子がおかしいとミュウが思いはじめたとき、怪獣か恐竜みたいな鳴き声が聴こえてきた。

「なにっ!？」

驚いて辺りを見回したミュウの目に飛び込んできたのは！

「怪獣大戦争!？」

巨大亀とゴ　ラがケンカしていた。

ミュはドアを跨いで走っている車から飛び降りようとした。

「あたし帰る!」

ここまで来たらやらされることはわかってる。アレと戦ってフィギユアにしろとでもいいのだろう。無謀だ。スケールからして、ジョーカーの怪人よりデカすぎる。

マジックハンドがミュの首根っこを掴んだ。

「逃げてもいいけど起爆スイッチ押すよ」

伝家の宝刀『起爆スイッチ押すよ』。

ミュの体内に埋め込まれている爆弾は、アインの気分次第でドーンだ。逆らえるハズがなかった。

大人しくミュは座った。股を開かず手はお膝。

車は海岸脇の道路に止められた。

車を降りていやいや海岸に降りるミュ。

ちよつと先では怪獣大戦争が繰り広げられている。近くで見るとさらに大きい。

ミュは回れ右×2回をして元来た道を引き返そうとした。が、目の前に立ちはだかる白衣のガキ。

「ボクはキミの雇い主だよ。ちゃんと高い給料も払ってるんだから、ちゃんと仕事してもらわないと困るよ」

「仕事しろっていわれても、あんなのと戦えるハズないでしょ!」

ミュはあんなのを指さして吠えた。

珍獣カメラが火を噴き、それに対抗してゴ　ラも口からビームみたいのを吐いた。完全に人智を超える戦いの領域に入っている。

アインはう〜んと考え、パツと上を向いたかと思うと指を一本立てた。

「これでどう?」

「これってなに?」

「1匹100万円」

「安いってば！」

ミュの月給は100万円である。それを今日は1匹100万円かどうかと言っているのだ。しかし、月給100万でも仕事の内容に比べたら、安いんじゃないかとミュは思いはじめていた。

ゴスロリ衣装を着せられて、時間と場所も構わずジョーカー怪人と戦い、ときには怪人以外の珍獣捕獲にも狩り出される。

中学2年生で月収100万は高いか安い。ちなみに補足すると帝都では暗黙で中学生以下のバイトも認めている。

アインはピースサインをした。

「2本でどうだい？」

「それでも安すぎだつてば！」

「キミ中学生の分際で200万が安いだつて！」

「中学生がどうこうって問題じゃなくて、戦う相手が問題なんですよ！」

暑い日差しが余計に2人を熱くさせる。暑い日はイライラしてしようがない。しかも2人も冬服。

ワトソン君がカキ氷を持って現れた。

「まあまあ、カキ氷でも食べて頭を冷やすにや」

ワトソン君が持ってきたのは、イチゴとブルーハワイ。あのブルーハワイだ！

ミュはイチゴを取ろうとすると、もっと早くアインがイチゴを奪った。

仕方なくミュはブルーハワイを受け取り、一気に咽喉に流し込んだ。

すると……！

驚くべきことに顔が真っ青に！

青くなったミュの顔を指差してアインが勝ち誇った顔をした。

「ほらボクの言ったとおりじゃないか」

指を差されているミュはなんのことだかわからない。

「あたしの顔になにかついてるの？」

急にみんなミュと顔を合わせなくなった。

しかもアインは別の話題をはじめた。

「さて、今日の戦いは海だ。バイト君の変身機能には、実はアクアバージョンがあるんだ」

唐突な説明にミュは怪しんだ。

「そうじゃなくて、あたしの顔がどうかしたの？」

ミュはアインの顔を覗き込もうとするが、アインはクルッと回って決してミュと顔を合わせない。

「アクアバージョンの変身方法はいたって簡単だよ。いつもどおりケータイでフフフって打ったあとに『サイエンス・アクア・メイクアップ!』って叫ぶだけ」

「変身の方法はわかったから、なんであたしと顔合わせないわけ？」

「よし、バイト君、いざ出撃だ！」

ビシッとアインは怪獣たちを指さした。徹底的にミュと話を合わせない気だ。おまけに顔をすら合わせない。

ミュは怒った顔をして、その場から動こうとしない。仕方なくアインは見せることにした。

「ワトソン君、ボクのカキ氷を食べてみてくれたまえ」

「なんでにゃ？」

「いいから早く」

「わかったにゃー」

ワトソン君がカキ氷にがつついた。まさかワトソン君までもが…

カキ氷を食べ終わったワトソン君の顔をアインが指差した。

「ほら、これでわかったろ」

ミュは首を横に振った。

「ぜんぜん？」

そういうのも無理もない。ワトソン君はなににも変わっていないかった。

アインは苛立つように髪の毛を掻いた。

「わかるだろ、顔色が赤くなってるじゃないか！」

と言つても、ワトソン君の顔は毛で覆われている。赤くなってるかどうかなんてわかんねーよ！

そんな言い争いみたいなのをしているうちに、怪獣大戦争は決着を迎えてしまった。

なぜか和解して海に2匹で帰っていくカメラとゴラ。それを見てアインが絶叫する。

「あゝっ！ ボクのファイギュアが海に帰って行く！！」
アインは波打ち際に向かって走り出した。

「ボクのファイギュア！」

コテン！

砂浜でアインがコケた。

倒れたままアインは2匹の背中に手を伸ばす。

「ボクの……ボクの……ファイギュ……ぐふっ」
力尽きたアインが砂浜に顔を埋めて動かなくなった。

「ボクのファイギュア！！」

なんて叫びながら、汗びっしょりでアインは目を覚ました。

目覚めたのは海の家のお座敷。近くにはミュとワトソン君、そしてこの道60年の看板娘がいた。

この道60年の看板娘のストーリーを語り出すと、ぶっちゃけ連載枠に収まりきれなくなるので割愛させていただきます。

ワトソン君は器用にうちわでアインを扇いでいる。

「日射病だにゃ」

「ボクの脳は超高性能CPUを積んでるからね、熱にとっても弱いんだ」

汗を拭ったアインはそう言いながら白衣を脱いだ。その下にはまだ白衣を着ていた。暑くて誰もそこにはつつこまない。

ミュがサイダーのピンをアインに手渡した。

「これ飲んで頭冷やして」

「バイト君、気が利くね。だからって給料アップはしないからね」
「……人の好意を素直に受けれないわけ？」

「ただより高い物はない。これは名言だと思うね」
とか言いながらサイダーをちゃっかり飲むアイン。

プハーっとまるでビールを一気飲みしたオッサンのごとく、アインはサイダーを飲み干すと、急に瞳を丸くした。

「そうだ、ボクのフィギュアは！」

そのクエスチョンにワトソン君がアンサーしてくれた。

「カメラもゴ　ラも海に帰ったにや」

「そんな……ボクのフィギュアが……」

肩をガツクリ落とすアイン。

てゆうか、あの二大怪獣が海に帰ってしまうなんて、この話の冒頭の前フリ的展開はムダ？

怪獣大戦争も繰り広げられず、ミュVS怪獣軍団の戦いも行なわれず、なんのために怪獣が出てきたのみたいな……。

しかも、ミュVSカメラのリベンジマッチすらない。

壮大な前フリと見せかけて、壮大なフェイク。

冒頭のシーンが見事オール蛇足に終わってしまった。

しかし、アインはあることに気付いた！

「そうだよ、イカは？　大魔王イカはどうなったの？」

ちなみに命名はアイン。

「あれはこの海の守護神様じゃ！」

突然、看板娘が会話に乱入してきた。

「守護神様を怒らせると祟りが起きるぞ、恐ろしや恐ろしや」

両手のシワとシワを合わせて看板娘は念仏を唱え出してしまった。
こんなババアは放置して、アインは海の家を飛び出した。

海岸は静かなものだった。怪獣騒ぎで行楽客はいなくなり、真っ赤な日差しが照りつける砂浜。

「大魔王イカまでいなくなるなんて……ボクのフィギュア帰って来
い！」

海に青春を叫ぶみたいな状態。怪獣を取り逃がしたのがそーとーシヨックだったらしい。

ワトソン君がアインの脚に寄りかかるように手を乗せた。

「まっ、こういう日もあるにゃ。」

イチゴのカキ氷を食べながらミュも海の家を出てきた。顔色は青と赤が混ざって悲惨な色になっている。

「あたしは怪獣と戦わないで済んでよかったけど」

「よくないよ、ボクのフィギュアはどうなるんだ!」

「男の子なんだからグズグズ言わないの」

「ボクは男じゃないよ女だよ!」

「はっ?」

常夏のビーチでミュは一気に凍りついた。

そんな衝撃的な展開が繰り広げられようとした瞬間、なんか新展開が乱入してきた。

「おーほほほほっ、貴様がプリティミューとかいう小娘だな!」

赤いハイレグ水着を着た美女。手はハサミになっている。出たっ、今回のジョーカー怪人レイディスコーピオンだ!

突然の怪人出現にアインたちは驚くこともなく、ミュにいたってはそんなことより大事なことがあった。

「ちよつとアンタ黙ってて!」

レイディスコーピオンに言っつてミュはアインの襟首に掴みかかった。

「今女の子つて言っつた?」

これは目の前の怪人より重要な問題だ。

しかしレイディスコーピンにしてみれば、とんだ侮辱だ。

「オイッ、貴様! アタクシを放置する気か!」

「だからアンタちよつと黙っつてて、あたしはアインと大事な話があるの!」

「黙っつててとは無礼千万な小娘だ。おい、お前たち構わないからやつちまいな!」

レイディスコーピオンの命令で、脇に従えていた全身黒タイツの戦闘員がミュたちに襲い掛かって来た。

そんな状況に陥ってもミュの眼中はアインだけ。

「女って言ったでしょ、女なの？ 少年じゃなくて本当に女の子なの！？」

「バイト君、危ないよ」

「えっ？」

ガツン！ つとミュは後頭部を殴られた。しかも鉄バット。

熱い砂に顔を埋めて倒れたミュ。

だが、こんなことじゃミュの頭はスイカ割りのようには割れない。だって改造人間だもん。

「いった〜い！」

後頭部を押さえながらミュは飛び上がった。痛みがあるのは仕様だ。

すでに海の家の中で日差しを避けて、ヤキソバを喰ってるアインからアドバイス。

「バイト君、アクアモードに変身だ！」

ぶっちゃけそんな機能のことミュはすっかり忘れていた。というか、あのときはそんな説明を聞いてる場合じゃなかった。

「アクアモードってなに！！」

ミュが叫ぶとワトソン君がさつと現れた。

「説明するにや。アクアモードとはプリティミューの変身形態のひとつで、海や水辺での戦いに優れた効果を発揮するにや」

そんな説明を受けている最中もミュは戦闘員たちに追い掛け回せられていた。

「えー？ なに？ 聴こえなかったもう一度お願い！」

だが、ワトソン君がもう一度説明することは二度となかった。

戦闘員に首根っこを掴まれたワトソン君が投げられた！

しかもそっち海！

海の中に投げられたワトソン君をさらなる恐怖が襲う。高波だ！
高波がバツシャーン！

ワトソン君は高波に攫われて海の藻屑に……。さよなら、キミのことは一生忘れないからっ！

はい、みんなで一分間、黙祷！

ちゅん。

ミュは故人のことをすでに忘れることにして、助けの眼差しをアインに向けた。

「助けてアイン！」

「ボクが助けたら、キミを雇ってる意味がないじゃないか」

あっさりと思捨てられた。

こうなったらミュは自力でなんとかするしかない！

ミュはケータイを取り出して叫ぶ。

「サイエンス・パワー・メイクアップ！」

光に包まれたミュが一瞬にしてプリティミューに変身した。通常変身なので色はそうでもないけど、着てみると暑苦しい白ロリだ。

白だけどぜんぜん爽快じゃない！

しかも砂浜には適さない厚底ブーツ。

それでもミュは奮闘した。

マジカルハンマーを構えるミュ。

えい、やーっ、とぉー！

てな感じでザコ戦闘員を倒していく。戦闘員は倒されるために出てくる存在なのだ。

しかし、戦闘員はゴキブリのように湧いてくる。

しかもー！！

ここで突然、邪魔が入った！

「プリティミューさんこっち向いてください！」

テレビカメラの中継だった。それも1台2台じゃない、怪獣騒ぎで駆けつけた民間及び国営がわんさかわんさか。こうやって今日もミュは白日の下にさらされるのだ。

しかも！！

報道陣に混ざって一般カメラマンまで。

しかも！！

カメラマンの中には。

「センパイ！」

追っかけメガネツ娘、ミュの後輩のメグだった。

その姿を発見してしまったミュはそっちに目を取られて、後ろから飛び掛る戦闘員を避け切れなかった。

「キー！」

飛びついてきた戦闘員の手が……ミュの乳を鷲掴みにした！

「えっち！」

ミュの背負い投げが炸裂！

「キーッ！」

戦闘員の言葉を訳すなら『不可抗力だ！』に違いない。

このおっぱいミユうつと揉まれちゃった事件が今日のベストショットだろう。

暑さと恥ずかしさで顔を真っ赤にしてゼーハーゼーハー。ミュー

は額の汗を拭った。

目に入る敵はもう1人しかない。戦闘員はみんな砂浜で気持ち良さそうにお休みだ。

レイディスコーピオンが鞭を振るった。

予定としては『バシン！』と良い音を鳴らす予定が、砂に音を吸収されて『プシッ』みたいな腑抜けな音が鳴ってしまった。

「鞭のクセして弛んでるとはけしからん、お前はふにゃンかつ！」
なんか勝手に怒り出してレイディスコーピオンは鞭を捨ててしまった。

そんな光景を見ていたミューは意味不明な心境だった。

「いきなり鞭をふにゃチ 呼ばわりして怒り出すなんて……欲求不満！？」

そう言われてみれば、レイディスコーピンは欲求不満そうな顔を

している。怒り易いのもそのせいかな。カルシウム不足のせいだ。

「アタクシが欲求不満だと!? ちこなんて付いてる下等生物にアタクシが媚びるとでも思っているのかッ!」

生放送の電波に乗る『ちこ』発言。しかも言っているのは怪人と言えど、見方を変えればコスプレ美女。きつと高視聴率だ。

常夏のビーチでプリティミューVSレイディスコーピオンのち

こナシ対決がはじまろうとしていた。

これまでミューに挑んだちこアリ怪人たちは、ことごとく破れていった。

しかし、この戦いの行方は?

自慢のハサミでレイディスコーピオンが攻撃を仕掛ける。

ミューのマジカルハンマーはその攻撃を防ぐ。だがハサミは片方の手だけだったが、お尻にもうひとつ武器があった。

刃物を先端につけたような鋭い尻尾がミューに襲い掛かる。

「きゃーっ!」

ミューの悲鳴と共に切り裂かれる甘ロリ衣装。

男たちから歓声があがった。

再び切り刻まれるミューの衣装。そして、湧き上がる歓声。砂浜はムンムンした暑い熱気に包まれた。

衣装をボロボロに切り裂かれ、ミューは剥がれ落ちそうな胸元の布を押さえて後退った。

「このドSの痴女!」

「おほほほ、もっと辱めに合わせてから止めを刺してやる。シャーッ!」

奇声をあげて襲い掛かってくるレイディスコーピオン。

ミューは切り札を出した。

「マジカルハンマー・フィギュアチェンジ!」

振り下ろされたハンマーはレイディスコーピオンのおでこにペチン!

が、なにも起こらなかった。

鋭いハサミはミューの胸を切り裂く！
湧き上がる歓声！

「きゃーっ！」
叫ぶミュー。

外れたブラジャー！！

ミューは両手で胸を隠してしゃがみ込んでしまった。

これって絶体絶命のピンチか！

ミューを見下して立つレイディスコーピン。

「お遊びはここまでだ。止めを刺してくれるわ！」

振り上げられる鋭いハサミ。

このままミューはやられてしまうのか！

「ちよつと待つにゃー！！」

その声はまさか……！！？

海をクロールで泳いで来る人影……人影？

褐色の肌をした若い男が世界新記録に迫る勢いで、いやそれ以上のスピードで海を泳いでくるではないか！

「何者だ！」

叫んだレイディスコーピオンは見てしまった。

海から上がってきた美少年の姿を……しかもフルンだ！

「おいらが相手だにゃー！」

顔に似合わない口調。しかもフルン！

「な、なんだ貴様は……ちこ丸出してアタクシに敵うと思っっているのか！」

威勢は言葉だけで、レイディスコーピオンは焦っていた。その視線が向けられているのは、美少年の股間……！！

巨根だった。

「クソツ、ちこごときに……ちこなどにアタクシが負けてなるものかっ！」

取り乱しながらレイディスコーピオンは謎の美少年に襲い掛かった。

まるで猫のようなしなやかさで攻撃をかわす美少年。そのたびに、ちこが右左に踊る。

レイデイスコーピオンはちこから目が離せなくなってしまうた。海だからってちこ丸出しで戦うなんて弾けすぎだ。てゆうか、卑怯だ卑劣だ、放送事故だ！

ただいまお茶の間では急遽差し替えの映像が流れている。ちこが踊ってる映像なんて真昼間からテレビで放送できるかポケッツ！踊っているのはちこだけではない。それに踊らされるレイデイスコーピオン。

「早くちこを隠せば力がっ！」

「おいらはいつも裸だにやー！」

「巨根を自慢したいなら他のところでやれ！」

もうレイデイスコーピオンの頭の中はちこでいっぱいだった。

その際に謎の美少年が攻撃を繰り返す。

「ねこパーンチ！」

鋭いツメがレイデイスコーピオンの腕を掻っ切った。

切られたのは腕なのに、血を豪快に噴いたのは鼻の穴だった。

真っ赤に燃える太陽のような鼻血をレイデイスコーピオンは噴出した。

レイデイスコーピオンが怯む……攻撃にはなくちこに怯んだ隙に、謎の美少年はミューを抱きかかえた。

抱きかかえられたミューは顔を真っ赤にする。その視線はもちろんちこ！

今日のもうちこフィーバーだ！

そして、謎の美少年はミューを抱きかかえたまま走り出した。

「ひとまず逃げるにや！」

独り残されたレイデイスコーピオンは砂浜に膝を付き、何かをブツブツ呟いていた。

「ちこ……ちこ……ちこ……ちこ……ちこ……」

かなり重症のようだ。

閉店ガラガラ。

海の家に逃げ込んだ謎の美少年とミュ。ミュの変身は解けてしまっている。

2人が店に飛び込んだのと同時に閉店ガラガラして、外からの出入りを一切封じた。

フランクフルトを食べていたアインはその手を止めた。

「ちんちんを隠したまえワトソン君、看板娘の前だよ」
顔を真っ赤にして『いやん』と声をあげたババア。

というか、やっぱり美少年の正体はワトソン君だったのだ。しゃべり方からしてバレバレだった。

ワトソン君は脱ぎ捨ててあった白衣を腰に巻いた。

「なにも着ないほうが涼しくていいにゃ」

軽く愚痴を溢すワトソン君を、ずっと驚きの眼差しで見たままのミュ。

「巨根の正体……じゃなくて美少年がまさかワトソン君だったなんて……しかも巨根」

巨根にこだわりすぎ。

そして、ミュはもうひとつショックなことがあった。

「てゆうか、ワトソン君ってシヨタキヤラじゃなかったの!!」

ミュの勝手な妄想では、ワトソン君はアインよりも幼くて、擬人化したらシヨタそのものだと思っていたのだ。見事に期待を裏切られた！

しかも巨根だなんて反則だ！

なんかもうミュはいろいろショックだった。

世の中なにを信じていいのかわからない。疑心暗鬼になりそうな勢いだ。

でも、どうしてネコのワトソン君が人間の姿に？

まさか悪い魔女に呪いをかけられた？

でも、やっぱり有力な説はどっかのマッドサインエンティストの

被害者？

疑うミュの視線がアインに向けられた。

「アインがやったの？」

「ん？ なんのことだい？」

「ワトソン君がなんで人間の姿になってるわけ？」

「ああ、彼は水をかぶると人間の姿になっちゃうんだ」

なんかそんな設定聞いたことがあるような。

しかも。

「お湯をかぶると元の姿に戻るよ」

と、アインは追加した。

やっぱりそんな設定聞いたことがあるような。

ミュはどっからか真っ赤なヤカンを持ってきて、ワトソン君の頭

からお湯をぶっかけた。

「熱いやー！」

叫び声をあげたワトソン君の身体が縮んでいく。アソコのサイズ

もミニサイズ。

そして、全身に毛の生えた三毛猫になってしまった。

「マジだ……」

ミュは信じられないと言った感じで呟いた。

やっぱり世の中信じられないことばかりだ。

ミュはなんだか頭がガンガン響いてくるようだった。頭痛かんなっ

と思ったら、閉店したシャッターを叩く音、そして声。

「逃げるなんて卑怯だぞ！」

レイディスコーピオンの声だった。どうやら重症から立ち直った

らしい。

すぐそこまで敵が迫っている。だが、アインは余裕をぶっこいて

いる。

「このヤキソバも美味しいよ」

フランクフルトの次はヤキソバまで食っていた。

ミュはアインに噛み付いた。

「ちょっと、ごはんなんて食べてないで外の怪人をどうにかしてよ！」

「どうにかするのはキミの仕事だよ」

「でも……今のあたしじゃ……」

敗北。

3匹目の怪人にして早くも挫折。

だが、まだ本当に負けと決まったわけじゃなかった。

ヤキソバを食べながらアインは言う。

「キミが負けたのは当然だよ。アクアモードじゃないからさ」

そうだ、アクアモードがあった。

海や水辺に適しているという変身モード。

ここでワトソン君が説明すると見せかけて、先にアインが口を開いた。

「だから、変身るときにサイエンス・アクア・メイクアップって叫ぶだけだよ。1回の説明で覚えようよバカだなあ」

「バカじゃないから。でも本当にそれであの怪人に……だって、マジカルハンマーだって効かなかったのに」

プリティミューの必殺技『フィギュアチェンジ』が効かなかった。それについてもアインは明確な回答をした。

「ああ、それね。萌えメーターが足らなかつたからだよ。ザコ相手なら少しでいいけど、強い相手はたくさん萌えをためなきゃいけないんだ」

「はあ？」

なんかそういえば、そんなようなメーターの存在があったような気がする。プリティミューに変身したときに、胸のあたりにハートマークのメーターがあったような？

そんな話をしている最中も、外からは喚き声が聴こえてきていた。「オイこら、早くここから出て来い！ さもないと海の家ごとぶっ飛ばすぞ！」

そろそろ出て行かないとマズイかもしれない。

ミュウがビシツと背を伸ばして立ち上がった。
こうなったらアクアモードに賭けるしかない。

「よしつ、あたしガンバルから」

ラッキーセブンをケータイに入力して叫ぶ。

「サイエンス・アクア・メイクアップ！」

ブルーの光に包まれるミュウ。

そして、アクアモードに変身したミュウの姿とは？

痺れを切らしたレイディスコーピオンはロケット弾を打ち込む準備をしていた。

そこで開店した海の家から出てきた人影。

ミュウだ、アクアモードに変身したミュウだ！

野次馬たちが歓声をあげた。主に男の歓声。

アクアモードに変身したミュウの姿……その姿はスク水だった！
そう、紺のスクール水着。胸に縫い付けられた白い布には、黒いペンで『ミュウ』と汚い字で書かれている。

そして、このスク水の最大の特徴は萌えメーターだ。通常の変身時には胸にあったメーター、それがアクアモードではお尻についているのだ。お尻にハートがついていた！

まさか夏でもない時期にスク水を着るなんて思ってもなかった。

しかも、プールじゃなくて海。

しかも、公衆の面前でテレビにまで映っている。

しかも、今日は怪獣騒ぎでカメラの数が多い。

ローカルヒロインから全国区のヒロインに昇格だ！

もう絶対に友達や身内に正体がバレる。今まであまりバレてなかったのが不思議なくらいだが。

プリティミュウとレイディスコーピオンが向かい合う。

「今度は負けないんだから！」

「おほほ、衣装を替えたところでアタクシには勝てないわよ」

ハサミと尾を操るレイディスコーピオンに対して、ミュウはいつ

のもハンマーではなくバレーボールだ！

バレーボールというのは語弊がある。どうみても鉄球だ。

「バレーボールで勝負よ！」

でもやっぱりバレーボールらしい。

ミューの宣戦布告ではじまったバレーボール対決。

ビーチバレーの標準的なルールに乗っ取るなら2対2の対決だ。

レイデイスコーピオンと戦闘員のコンビ、ミュー側の相手は……いない。

「しまった……自分で戦いを申し込んでおいてパートナーがいないじゃん！」

ミューはワトソン君に顔を向けた。

「おいらはネコだから無理だにゃ」

人間に変身すればいいじゃん、と思うかもしれないが、きつとフルンだ！

ミューはアインに顔を向けた。

「ぐわっ、知らないうちに落札されてる……！」

ミューのこと完全にシカトでノーパソをやっていた。しかも、おそらくオークション。

こんな感じでささやかなピンチを迎えたミューに手を差し伸べたのは！

「センパイ、わたしバレー得意ですよ！」

すっかり、忘れてた。メガネツ娘メグがいたんだった。

メグの参戦により、ついにバレー対決の幕が開けた。

なぜか放置されていたバレーネットを使い、2チームがコートの中に入った。

ネット越しにレイデイスコーピオンがビシツと指を差してきた。

「この勝負でアタクシが勝ったら貴様らの命を貰うだけではないぞ。この帝都はこの砂浜のように、砂漠と化するのだ」

まさか、この冬なのに常夏現象はジョーカーの仕業だったのか！？
「絶対にそんなことさせない！」

これと言ったのはミユじゃなくてメグだ。どっちかというところ、ミユは帝都の平和に関してそれほど興味がない。

「あたしは起爆スイッチすら押されなきゃそれでいいんだけど」

あとバイト代さえもらえれば。

そんなこんなでバレーボールがはじまる。

サーブ権はミユだ。

どう見ても中身が空気じゃないボールをサーブする。

「とりゃ！」

ボールがビューンってぶっ飛ぶ。

ゴキッ！

なんか嫌な音が鳴って、顔面でボールを受け止めた戦闘員が泡を吐いて倒れた。

退場！

他の戦闘員によって担架で運ばれていく。

そして、すぐに別のメンバーが補充された。

そうそう、このバレーには特別ルールがある。それは得点制ではないこと。ボールを敵にぶつけて相手が倒れるまでやり合う。

ミユは完全にザコ戦闘員狙いで、次々と相手の数を減らしていく。

そして、ついに戦闘員はすべて倒されレイディスコーピオンを残すのみになった。

「おのれ小娘め……戦闘員ばかり狙うなんて卑怯だぞ！」

「戦略って言うて欲しいかな」

ミユのチームはメグちゃんと生き残ってる。てゆか、たぶんボールを一発でも喰らえば三途の川を渡れる。

けれど、そもそもメグはバレーそっちのけでミユを激写している。

一眼レフを構えて激写、激写、激写！

これってもしかして、最初から1対1で戦っても良かったんじゃないの的な展開。

「ミューが豪快なサーブを放つ。
「うりゃ！」

狙う相手はレイディスコーピオンしかない。
飛んできたボールをレイディスコーピオンが打ち返した！
それをまたミューが打ち返した。

それをまたレイディスコーピオンが打ち返した。

それをまた……以下省略。

バレーってというか卓球かよっ！

みたいなラリーの猛襲が繰り広げられ、ミューはだんだん息が切れてきた。

砂浜を照りつける太陽。平気な顔をしているレイディスコーピオン。ミューは熱さで意識が朦朧としてきた。

そして、ついに鉛のように重い鉄球がミューの腹にヒットした。

「うっ……」

当たってみるとかなり痛い。

「大丈夫ですかセンパイ！」

とか身を案じながらもメグは痛がるミューの表情を激写。

そして、事件は起きた！！

日本ではありえないくらいのビックウェーブがミューたち全員を呑み込んでしまった。

なんだこの展開！？

海の中から現れる白い触手。

パソコンをやっていたアインが目を剥いて立ち上がった。

「大魔王イカだ！」

すっかり忘れてた。

「バイト君、フィギュアにするんだ！！」

アインが叫んだ。

そのときミューは……触手に捕まっていた。

「無理だから！」

しかも、メグまで捕まっていた。にも関わらず激写中。

「センパイ笑ってください〜い」

ついでに、レイデイスコーピオンも捕まっていた。

「クソッ！」

レイデイスコーピオンは自慢のハサミでイカの脚を切り刻む。

怒った大魔王イカが暴れ出した。なんかもう手に追えない感じだ。どうやって收拾するんですかこの事態！

アインが叫ぶ。

「バイト君、必殺技を使うんだ！」

「必殺技つてなに！」

「アクアボムクラッシュって叫びながらボールを投げるんだ！」

ミューは無我夢中で持っていたボールを投げることにした。

「アクアボムクラッシュ！！！」

大魔王イカにボールが当たった瞬間、ドツカーン！！

ミューたちを見事に巻き込んで見事な爆発。

まさか自爆技！？

砂が空に舞い上がり、煙幕が辺りを覆った。

「ゲホゲホッ！」

煙の中からミューが出てきた。

「あたしを殺す気が……」

辺りから煙が消えると、砂浜には隕石が落ちたみたいなのクレータ
ーが開いていた。

そして、アインは大魔王イカとレイデイスコーピオンのフィギュ
アを大事そうに磨いていた。

今回もどうにかこうにかなっただみみたいで。

これで一件落着……と思いきや。

ミューは辺りを見回して気付いてしまった。

「メグちゃんがない！」

まさかあの爆発に巻き込まれて……。

ミューの瞳に写る人影。

メグを抱きかかえて海から上がってくる美少年。

口からぶしゅーつと水を吐いてメグは目を覚ました。
なんか自分を抱いている上半身裸の美少年。慌ててメグは砂浜に下りた。

そして、見てしまった。

美少年の股間に生えているちこ。

「きゃーっ！」

メグのツメがワトソン君の顔を引っ掻いた。

「にゃー!? 助けてあげたのになんで引っかかれなきゃいけないにゃー！」

そんなこんなで事件は幕を閉じた。

そして、この日の夜にテレビ番組でこの事件が放送されたのだが、ほとんどカットされていたらしい。ちここのせいで。

どっかにある秘密結社ジョーカー帝都支部。

「ちこに負けるとは……」

ゲル大佐は怒りで身体を震わせ、巨乳をプリプルさせた。

今日もサスペンダーだけで隠されている乳首がポロリしそうではない。

通信装置に映し出される謎のシルエット。

《また小娘にやられたそうだな》

重厚なボイス。首領エックスだ。

「申し訳ございません首領」

ゲル大佐は頭を下げた。その姿は詫びているというより、ガツカリ肩を落としてる感じだ。

苦々しい顔をしてゲル大佐が顔を上げた。

「ちここのないレイディスコーピオンこそ、あの憎きプリティミューを倒してくれると信じていたのですが……奴はちこに敗北したのです！」

レイディスコーピオンはミューをあと一步まで追い詰めた。しかし、巨根を前にして怯んでしまったのだ。それが後々の敗北に繋が

った。

「いや、しかしレイディスコーピオンが負けたのは無理もありません。あのちこはアタクシが見惚れるほど立派なものでした……」

《言い訳とは見苦しいぞ！》

「も、申し訳ございません首領！」

ビシツとゲル大佐は背筋を正した。ついでに巨乳も揺れた。

《不甲斐ないお前たちに任せてはおれん。そろそろわしが遣わした怪人がその基地に到着するところだ》

「首領自らが遣わしたですと……？」

急にキツイ香水の匂いが部屋に立ち込めた。

「アタイをお呼びかしらぁん」

編みタイツを穿いたムチムチの太腿。

赤いマニキュアを塗られた長いツメ。

色っぽい唇の周りは……青かった。ヒゲだ！

チューリップの花みたいなスカートを穿いた変態が現れた。

「むふふ、アタイの名前はサラセニアぁんちゃんよぉん」

どう見てもオカマだった。

サラセニアとは食虫植物の名前だ。形は筒みたいで、そこに虫を誘い込んで溶解液で溶かしてしまう。

男でも女でもない怪人。これならばプリティミューに勝てると思っただのだ。

気になるところは股間についているか、ついていないかだ……。

ゲル大佐はサラセニアぁんのスカート捲った。その眼が大きく見

開かれる。

「な……なんとという巨大な……しかもポジションも完璧だ……」

「いやん、えっちい」

こんなオカマで……本当にプリティミューに勝てるの……か？

だが、ゲル大佐は確信した。

「これならば、これならばプリティミューに勝てるぞ！ おーほほほほほっ！」

果たしてゲル大佐は何を見て確信したのか？
巨大な……とはいったい何のことなのか！

ち こアリでも勝てず、ち こナシでも勝てず、しかし今度の怪
人は……。

ついに秘密結社ジョーカーの秘密兵器が動き出す。

プリティミューは巨大なアレにどう立ち向かうのか！？

あれっ、てゆうかなんか重要なことを忘れているような？
カキ氷シロップの謎とか……アインとか……。

第4話「サラセニアだよプリティミュー！」

『なのでミユはいつも駆け抜けることにしている。だが、しかし!!』

今日に限って走ってる途中で頭痛と吐き気が!

「な、なに……この臭い?」

ミユは口と鼻を押さえながら辺りを見回した。

バーコードハゲ!

青ヒゲじよりじより!

スネ毛ボンバー!

ミユは異様な光景を見てしまった。

バニーちゃんの姿をした中年男たちの集団。

股間のモッコリが放送コードギリギリですね!

謎の変態女装オヤジたちが客引きをしていた。しかも、この腐った果実のような臭い。どうやらオヤジたちの香水らしい。

ミユは看板を棒読みする。

「新装開店、オカマクラブ熟れた果実」

熟れすぎて腐っている。店の名前を考えた奴の脳ミソも腐ってるハズだ。

こんな店に誰が来るもんかっ!

なんてミユは思ったが、ところがドッコイ!

魔法に掛かったように男たちが店に吸い寄せられている。

マニアだ、全国にマニアが店に集まってるに違いない。

と、いうわけでミユは見なかったことにした。

「さーってと、早くアインのそこ行かなくちゃ!」

逃げるように、というか、あからさまにミユはこの場から逃げた。

唐突なセリフからはじまった。

「そっいうわけだからバイト君、消えたオッサンたちの救出をする

んだ」

説明ゼロだった。

アインはミュと顔を合わせた瞬間、いきなりそんなことを言った。あまりの意味不明さにミュは数秒間フリーズ。

そこへワトソン君が補足説明をしてくれた。

「ここ数日、ホウジユ区獅子舞町で行方不明者が多発してるにや。」

その人たちを探して欲しいにやー」

「あたしが何で？」

今までも『何で？』と思えることをしてきたけど、今回はさらに摩訶不思議だ。

だって今まではアインの私利私欲（趣味）のために働かせられてきた。なのに今回は人命救出？

まるでこれじゃ正義の味方みたいじゃないかつ！

ミュは慌ててアインのおでこに手を当てた。

「大丈夫、熱あるんじゃないの!？」

「熱なんかないよ」

「ま、まさか……偽者!」

アインが偽者説浮上。

さつとミュはアインから離れた。

「ワトソン君、このアインは絶対偽者よ!」

「偽者じゃないにやー」

「はっ!？ まさかワトソン君まで偽者!？」

ミュピンチ!

だが、ここでアインの思わぬ発言。

「バイト君こそ熱があるんじゃないのかい?」

さらにワトソン君の発言。

「今日のミュは可笑しいにやー。まさか偽者にや!？」

しまった、そっちかつ!

ミュのほうか偽者だったのかあああつ!?!

突然、ミュが低く笑いはじめた。

「ふふふふ、バレてしまつては正体を明かさなわけには……ぶっ！？」

ミュ（偽）が何者かに後頭部を殴られた。
殴つたのは　もう1人のミュ（新）だ！
そして、アインが叫ぶ。

「ボクのフィギュアがーっ！！」

ミュ（新）がミュ（偽）を殴るときに使用した鈍器が、アインのコレクションの1つだったのだ。
アインショック！！

ワトソン君はミュ（新）とミュ（偽）を見比べて傾げている。

「どっちが本物にゃ？」

ミュ（新）は気絶しているミュ（偽）の胸倉を掴んだ。

「これのどこがあたしなのよ！　こんなアゴ青くないし、スネ毛ボ
ーポーじゃないし、そもそもどう見たつてこれ男でしょ！」

思わぬ指摘でアインとワトソン君ショック！！

……まったく気づかなかつた。

「ボ、ボクの目を欺くなんて……」

「本物のミュと変わらないにゃー」

まだ信じられないアイン&ワトソン君。

そして、ミュ（本物）がボソツと。

「二人ともシネ」

アインの手にはミュの自爆スイッチが握られていた。

「あはは、どーやら本物のバイト君のようだね。でも、確実な証拠
を得るためにボタンを押ししてみようかな」

「やめてくださいお願いします」

ちよー真面目な顔でミュは棒読みした。

アインだつたらマジで押しかねないような気がする。

なんとか阻止するためにワトソン君が冷静に言う。

「ここで爆発したらアインの大事なフィギュアも吹っ飛ぶにゃー」

「それもそうだね」

アイン納得。

てか、フィギュアがぶっ飛ぶ前に、アインの体がぶっ飛ぶ。

さてと、ひと段落したところで、問題はこの気絶しているミュ（偽）のことだ。

アインはマジックハンドを使ってミュ（偽）の体を調べはじめた。

「ふむ、どうやら胸は詰め物らしいね。股間にも蛇口型の排泄器官があることから、これは……男だ！」

ミュは呆れていた。

「だから言ってるじゃん」

問題はそんなことじゃなくて、この女装男が何者で、いったい何の目的だったのか、そこが重要ではないのか？

しかし、そんな答えなどすでにアインの頭脳は解決していた。

「こいつはボクの大事なコレクションを狙っていたんだ。そうに違いない！」

いつもミュは思う。

本当にこのクソガキは天才科学者なのだろうか？

とりあえずこの女装男は縛り上げ、あとで警察に届けることで一件落着……したのか？

アインの切り替えは早かった。

「さて、そういうわけだからバイト君。さっきも説明したけれど、いざ出動だよ！」

「はっ？」

ミュには理解不能だった。なぜって、その説明とはミュ（偽）にしたものだったからだ。てゆか、ミュ（偽）にした話も説明になってなかった。

ワトソン君がミュの苦悩をキャッチして説明してくれた。

「獅子舞町で失踪者が多発してるにや。それを救出するのが今回の任務だにやー」

「あたしが何で？」

デジャブー！

だが、先ほどと同じ展開にはならなかった。

アインがめんどくさそうに捕捉をする。

「失踪者の中に原画家が混ざっていてね、彼がいないと『ときめけ』の発売日が延期になるんだ……最悪、発売すらできなくなるかもしれない」

「ときめけってなに？」

「ときめけを知らないなんて、キミは人生を5パーセント損失しているよ。ときめけと言えば、『闘神菊地さんのメリケンサック拳勇^{けんゆう}伝^{でん}』の略じゃないか、超人気格闘恋愛シミュレーションだよ」

ちなみにこの部屋の棚にもそのフィギュアが飾られていた。

七三分けの眼鏡サラリーマンのムキムキ筋肉フィギュア。と、その傍らに並ぶ総勢8人の女性キャラ 全員攻略可能だ！

とにかく今回もアインの私利私欲^{ワガママ}のためにミュは働くらしい。

ホウジユ区獅子舞町といえば、アインの研究所のすぐ近くで、そういうばミュはここに来る前通った道だ。

そして、ミュはある重大なことを思い出してしまった。

「あ、そういうば……ここに来る途中、オカマのお店が新しくできてたような……」

散らばっていたパズルのピースが合体する。

そう、まさに床に散らばっているグルグル巻きの女装オヤジ。このオッサンと失踪事件が結びついてしまった。

アインはパソコン画面を眺めていた。いつの間にか作った線グラフだ。

「ふむ、あの店が開店した時期と、失踪者事件が起きはじめたのは同時期だね。イコール、このコスプレマニアは、調査を開始しようとしたボクたちに向けられた刺客ということになるね」

そこまでわかったら、あの店に乗り込むしかない もちろんミュが。

とりあえず店の前まで来た2人と1匹。物陰に隠れながら店を監

視。

相変わらず満員御礼つてな感じで、次々と男たちが誘われるように店に入って行く。

そして、この腐った果実のような臭い！

すぐにアインはこの臭いを化学分析した。

「一種のフェロモンだね。男性を惹きつける作用と幻覚を魅せる作用があるらしい」

男性のみに効き目が現れる臭い。

だからミュは平気なのだ！

だから猫のワトソン君も平気なのだ！

だからアイン　にミュは目を向けた。

「そう言えばそうだ、まだあの話に決着ついてない！」

「ボクにどんな話があるって言うんだい？　給料の交渉なら無駄だ

よ

「違って、アインがおん　」

「あーっ！！」

急にアインが叫んだ。

アインが見たのはあの店に入っていくとある男。

「あれはときめけのシナリオライターじゃないか！！」

原画家とシナリオライターいなくなったら全滅。

アインは思わず飛び出していた。

そして、捕まった。

怖い女装オヤジに連行され店の奥へ消えて行くアイン。

ミュは見なかったことにした。

「さーとと、家に帰ってマンガでもようかなあ」

帰ろうとするミュの脚にワトソン君がしがみついた。

「待つにゃー、アインを助けるにゃー！」

「起爆スイッチのない今、あたしに怖いものはない！　そんなわけ

でさよならあ〜」

と、帰ろうとした矢先だった。

一眼レフカメラを持ってあの店に近づく少女の姿。ミュはその少女を物陰からじーっと観察した。

ミュはその少女の名を口にする。

「メグちゃんだ」

プリティミュアの追っかけメガネっ娘で、ミュの学校の後輩でもあるメグだ。

でもどうしてこんなところへ？

まさか、ミュの後を尾行してきたのか？

メグは女装のオッサンとなにやら会話していた。

「失踪事件とこの店が関係することはわかってるんです！」

強い口調でメグは変態女装オヤジに詰め寄っていた。

ミュの追っかけばかりフューチャーされるメグだが、実はいろんな事件の追っかけカメラっ娘だったりするのだ。

しばらくミュが観察を続けていると あ、メグが捕まった。

アインに続いてメグまでもが、店の奥に連れ去られてしまった。こうなってしまうては良心の呵責とかで、放っても置けなくなっ

てしまったミュ。

仕方なく救出に動き出すミュだったが、どうやって店に侵入するのか？

ミュはこれでも思春期真っ盛りの女子中学生。あんな如何わしい店に出入りできるハズがない。

ミュはじーっとワトソン君を見つめた。

「ワトソン君がんばって」

「にゃ!？」

「ワトソン君がお店に侵入して、あたしを手引きして裏口から入れてくれるとか、そういう作戦でいこうよ、ね？」

「おいらはムリだにゃー！」

「ワトソン君なら平気、水を被れば人間になれるんでしょ？」

「あんな店イヤだにゃー!!!」

駆け出して逃げるワトソン君。

ミユはしつぽを掴もうとしたが、まんまと逃亡されてしまった。
1人残されたミユ。

すぐ近くには毒蛾の巣窟。

バーコードハゲ！

青ヒゲじよりじより！

スネ毛ボンバー！

あんな地獄に正面から突っ込む勇気も根性もない。

とりあえずミユは裏口に向かった。

従業員用の裏口。

ミユは念のためドアノブに手を　。

「あ、開いた」

開いてしまった。

店内に入った途端に鼻の奥を攻撃してくる刺激臭。あの腐った果物のような臭いだ。

忍び足でミユは店内を搜索。

ミユは地下に続く階段を発見した！

怪しい臭いがプンプンする地下だ。

階段を下りると目の前に立ちふさがったドア。

ミユはそのドアを開けた！

すると！

なんとトイレだった。

「は？」

思わずミユの口から漏れた。

しかも、運が悪いことにトイレで女装オヤジがう　こ中だった。

股を開いて便座に座っているオヤジと目が合ってしまった。股間に

モザイクを入れないと放送禁止になってしまう。

眼を剥いて固まっていたオヤジが急に叫ぶ。

「キヤー痴漢よ！」

「はっ？」

痴漢＝自分という公式が理解できなかった。

むしろ女装したオッサンのほうが痴漢でしょ？ みたいな。

どうして、どうして、と思いつながらミュは逃げた。

騒ぎはどうやら大きくなってしまったらしく、痴漢騒ぎでそこら中に女装したオッサンが溢れ出した。

ミュは必死で逃げた。

そして、ミュは再び地下への階段を見つけた。明らかにこの店の構造は可笑しい。

今度はバスルームかと思いつながらもミュは階段を下りた。

地下室に下りると、すぐに鉄格子の牢屋が目に入った。中にはたくさんの男が捕らえられている。そんな中で浮いている二人の存在。

「バイト君、早く助けてくれないかな？」

アインだった。

そして、もう1人はメグ。

「センパイ、どうしてこんなところに!？」

その質問をミュは軽くスルー。

すぐにミュはみんなを牢屋から助けようとするが、鍵がないのでどーにもならない。

ミュが困っていると後ろから心配がした。

すぐにメグが叫んだ。

「センパイ危ない！」

「はい？」

と、ミュが後ろを振り向くと、そこにはなんと……スク水姿のオヤジが立っていた!

股間からはみ出してる未処理のお毛毛が（ry

その姿を見たミュは精神的痛恨の一撃を受けて気を失ってしまった。

と、いうわけで。。。

「バイト君まで捕まったら意味ないじゃないか」

明らかなアインのグチ。

さらにこつちからも攻撃される。

「どうしてセンパイがいるんですか？」

しつこいメグからの質問。

もちろん質問の答えを正直に言うわけにはいかない。メグにプリティミューだつてバレたら大変だ。かと言ってウソで誤魔化してもメンドクサイことになりそうだ。

なので完全シカト。

「センパイ、わたしの話聞いてるんですか？」

「そんなことよりここを脱出する方法を考えなきゃね！」

ミュはメグと目を合わせない。絶対に合わせない。合わせないっというか、見えていないつもり。

アインはため息を漏らした。

「脱出できるならボクがとづくにやっているよ」

他の男たちもあきらめモードだった。

かなり巨大な牢屋だ。中にいるのはざっと4、50人。それでもまだまだ余裕のある牢屋だ。

これだけの人数が集まっても脱出不可能なのだ。

ミュは牢屋の外を見渡した。牢屋の見張りにはスク水のオッサン1人だ。さつきはワキ毛ボンバーとモツコリ股間と以下略で気絶してしまつたが、もう気絶するほどのインパクトは感じない。だつて後姿しか見えないもん。ただ、ケツに食い込む水着が目の毒だ。

スク水オヤジは何も持っていない。牢屋の鍵はどこにあるのだろうか？

「この牢屋の鍵つてどこにあるの？」

ミュが牢屋の住人たちに尋ねると、コソコソ話で伝わってきた。

牢屋の鍵はあのスク水オヤジが持っているらしい　股間に入れて最悪だ。

股間に入ってる鍵なんて触りたくもない。

さらに脱出は困難になった。

時間だけが過ぎていく。

だんだんと焦りの色が濃くなるアイン。

「早くしないとアニメがはじまっちゃうよ」

「どーせ録画してるんでしょ」

「オンタイムで観ることに意義があるんだよ。録画はあくまで保存用さ」

「はいはい」

ミュにはどーでもいいことだった。

アニメの心配なんかより、今は自分の身が心配だ。

男たちはなぜ集められたのか？

牢屋の次のステップがあるハズだ。

さらに時間は過ぎていく。

アニメを見逃したアインはショックのあまり隅っこで丸くなっている。ミュは励ます気にもなれなかった。

またさらに時間が過ぎた。

牢屋番をしているスク水オヤジに異変が！

豪快ないびきを掻いて寝やがった。

そんな爆睡状態のスク水オヤジに天誅が下った。

「にゃー！」

という掛け声と共に、空手チョップでスク水オヤジが気絶させられた。

そして、スク水オヤジを倒した人影がミュたちの前に姿を現した。

「ひよっとこ仮面ただいま参上にゃー！」

その姿を見てミュは凍りついた。

真つ赤なフンドシ姿の変態が立っていた。

しかも、ひよっとこのお面まで被っている変態だ。おまけにお面

のおでこにはペンで『』と書かれている。

ひよっと仮面を見るメグの瞳は輝いていた。

「かつこいいい！」

ヒドイ美的感覚だった。

メグはもうひよっとこ仮面のトリコだった。

「お尻にフンドシが食い込んでるところが萌え〜。ところでなんで頭にゼットの文字が書かれているんですか！」

「ゼットじゃないにゃー、ゼータだにゃ。正式名称は猫又戦士 ひよっとこ仮面だにゃー！」

「素晴らしいネーミングですね！」

どこがだよ。なんてミュは思ったが、触れると怪我をしそうだったので、その話題には触れないことにした。

落ち込んでいたハズのアインが、牢屋越しにひよっとこ仮面の前に立った。

「遅いよ、ワトソン君。ここの鍵はそこにいるスク水が股間に隠しているらしいよ」

「ワトソン君じゃないにゃー、ひよっとこ仮面だにゃー！」
語尾がもろにワトソン君です。

が、ここは百歩譲ってその話題には触れないであげよう。

ワトソン君……じゃなかった、ひよっとこ仮面はさっそく鍵を探すことにした。

なんの躊躇もなしにスク水の股間に手を突っ込み、それを掴んで引っ張った！

「ぎゃー！」

気絶していたハズのスク水オヤジが絶叫してまた気絶した。今度は口から泡を吐いている。

「間違えたにゃー！」

なんて言いながら笑って誤魔化すひよっとこ仮面。でも、笑顔は隠れて見えません。

今度こそ本当のカギを見つけて取り出した。

「在ったにゃー」

さっそくそのカギを使って牢屋を開けると、みんな一斉に逃げた牢屋の奥に。

ひよっとこ仮面と微妙な距離を保ちつつミュが言う。

「3メートル以内に近づかないで」

「どうしてにゃ？」

「そんな手で近づかないで、早く洗って、むしろ切断して」
「なんでにゃ？」

理解してないひよっとこ仮面はミュに近づこうとした。

ミュが拳を握る。

「近づくなつて言っただろシネ！」

怒りの鉄拳がひよっとこ仮面の顔をぶつ飛ばした。

サイボーグだったりするミュのパンチは殺人パンチだ。

さよならひよっとこ仮面！

ぶつ倒れるフンドシ青年と割れて床に転がるお面。早くも素顔が露になってしまったが、殴られた衝撃で見ても無残な顔になっていて、どこの誰だかわかんない状態だった。

ボロボロで、大きく晴れ上がったフンドシ青年の顔を見ながら、メグは首を傾げていた。

「どこかで見えたことあるような……？」

でも思い出す前にミュに腕を引っ張られた。

「早く逃げるよ」

そんなこんなでフンドシ青年は放置で大脱走がはじまったのだった。

牢屋から逃げ出した男どもの大行進！

なんかものスッゴイ数の軍勢なので、次々と現れる変態どもを踏み付け蹴散らしていく。

これなら逃げるのも簡単かもしれない！

なんて思っていた矢先、腐った果実のような臭いがあたりに立ち込めた。

男たちの足が止まり、次々とバタバタ気絶してしまった。

残ったのはミュ、メグ、アイン。

気づけば店内までやって来てしまっていた。

客は誰一人いない。

女装した変態さんたちもいなかった。

腐臭がさらに強くなった。

気配を感じてミュは振り返った。そして、見なかったことにした。「ちよつとちゃんところち見なさいよおん！」

見てはいけない物体が野太い声で叫んだ。

チューリップみたいなさカーとを穿いた巨体のオヤジ。標準装備の青ヒゲもバツチリだ。

うん、バニーとかスク水に比べたらぜんぜん平気

どうやら臭いの発生源はこの変態らしい。だとしたら、この変態を倒したら一件落着になりそうだ。

「というわけでバイト君、がんばってくれたまえ」

メガネを拭きながら軽く言いやがったアイン。本気でミュは殴つてやるうとしたが、ここはグツとグツと抑えた。

アインは簡単に言ってくれたが、問題はそんなに簡単じゃない。

ここでの大問題はアインじゃないほうのメガネツ子。そう、メグだ。

あくまでミュは普通の女子中学生を通さなければならぬ。

そんなこんなで戸惑ってる間に、全身黒タイツの戦闘員まで現れた。

「ふむ、やはりジョーカーの仕業だったらしいね」

そう分析したアインはソファに座ってゆっくりしていた。しかもどこから見つけてきたのか、飲み物まで勝手に飲んでるし！

「むふふ、そうよ、アタイはジョーカーのアイドル怪人サラセニアあんちゃんよおん」

怪人というとか変人だ。

ついでにアイドルじゃなくてゲテモノ。

雑魚戦闘員が襲い掛かってきた。

ミュは仕方なく変身しないで戦うことにした。

10万倍馬力のパンチで戦闘員をボッコボッコにする。黒戦闘員くらいなら変身しなくても大丈夫。

人間とは思えないパワーをメグの前で披露しちゃってるが、このくらいなら学校で十分見られちゃってる。

最近はずパワーをセーブすることに慣れてきたミュだが、それでもクラスメートを病院送りにしてしまう事件を起こしてしまっている。バスケットの授業でボールを破裂させたときは、爆弾騒ぎになっちゃって大変だったりした。

学校でのミュはそりゃもう浮きっぱなし。

ぶっちゃけもうプリティミューってバレたほうが楽かも。学校で危険人物扱いされて友達がいなくなるより、変身ヒロインとして騒がれたほうが精神的苦悩が少なくて済む。

そうだ、メグが見ているこの場所で変身してしまえば!!

もう迷いなんてない。ミュはプリティミューに変身しようとしたのだが。

「あれ……ない？」

ミュはポケットというポケットに手を突っ込んだ。

「ない!？」

叫ぶミュ。

変身アイテムのケータイがない!

そうだ、牢屋に入れられたときに取り上げられたんだった。

ちなみにアインも高機能ランドセルと四次元白衣を取り上げられている。

ミュは戦闘を忘れて探し物をしている間に、なんとメグとアインが捕まっていた。

サラセニアあんは勝ち誇った笑いを発する。

「むふふふ、アンタもおとなしく捕まりなさい!」

人質を捕られてしまった今、無理に抵抗したらヒドイことになりそう。

青ヒゲで頬擦りとか、濃厚なキスとか、ここで言えない内容とか!

ミュが抵抗をやめて敵に投降しようとしたそのとき、店の裏から

新たな変態が乱入して来た。

「ひよつとこ仮面再び参上にやー！」

フンドシ青年再び現る。

しかも、割れたハズのお面が修復されている。

ひよつとこ仮面はアインを捕らえている戦闘員に飛び蹴りを食らわした。さらにそのまま床に落ちた！

「にやー！！」

ひよつとこ仮面肋骨強打。

負傷したひよつとこ仮面は動けない。

だが、名誉の負傷の甲斐もあつて、アインが敵の魔の手から逃げ出せた。

だが、代わりにひよつとこ仮面が捕まった。

だが、混乱に乗じてメグが逃げた。

1匹……じゃなかった、1人が捕まって2人が逃げられた計算だ。捕まったワトソン君の心配より、アインは自分のことが大事だった。

「ワトソン君、ボクのランドセルと白衣は？」

「ワトソン君じゃないにやー、ひよつとこ仮面だにや。アインの7つ道具はないけど、ミュのケータイは見つけて来たにや」

アインの7つ道具？

えっ？

それって、つまり高機能ランドセルと四次元白衣のほかに、5つなんかスゴイ道具があるってこと？

しかし、そこは一切スルーだった。

ひよつとこ仮面はフンドシの中に手を突っ込み、取り出したケータイをミュに投げた。

「受け取るにやー」

力のこもったミュの拳。

「んなもん使えるかあーっ！」

メガトンパンチ！！

はい、ケータイ粉々です。

ミュのパンチでケータイは見事に粉碎してしまった。
その事態を把握したミュは青い顔をした。

「ヤバッー!!」

いまさら後悔しても遅いです。

本当は不本意だけどしょうがない。ミュはこっ叫んだ。

「アイン、メグを連れて逃げて!」

「めんどくさいよバイト君」

うはっ、いきなりアイン拒否。

メグさえいなければ、どーにかなるかもしれないのに!!

そのメグがいらない!?

いつの間にかメグは姿を消していた。一足早く逃げたのかもしれない。

もしかしてチャンスが巡って来た?

今こそミュのパワーを発揮するときだ!

でも、変身はできません。

人質無視でミュは戦闘開始!

パンチ、キック、パンチヲ見えても気にしません。

次々と戦闘員が倒れていく中、ひよっところ仮面を捕らえている戦
闘員が叫ぶ。

「キーツ!」

なんか怒ってるようだ。たぶん『動くな、この人質がどうなって
もいいのか?』みたいな感じだと思われる。

ひよっところ仮面が叫ぶ。

「おいらのことは気にせず戦うにゃー!」

男気だ。そのフンドシも男気だ。

ということ、人質の命をかるーく無視してミュは戦い続けた。
そしたら見事にひよっところ仮面がぶん殴られた。

「にゃー!」

ミュはかまわず戦い続けた。

そしたらひよつとこ仮面にボディブロー。

「にゃー!!」

ミュはそれでも戦った。

そしたらひよつとこ仮面の顔面にパンチ!

ひよつとお面がぶっ飛んだ。その下から現れた顔は……やっぱり

ワトソン君(人間バージョン)。

「にゃー! やっぱり助けてにゃー!!」

急に弱気だ。

すでに戦闘員はワトソン君を捕らえている1人。

そして、自称アイドル怪人サラセニアあんが残っていた。

「むふふ、ただの学生じゃなわいねえン」

はい、本当はプリティミュです。

ついにサラセニアあんが動く。

な、なんとサラセニアあんは自らのスカートをめくり上げた!

痴漢だ、変態だ、露出狂だ!!

サラセニアあんの股間から生えている巨大なアレ。

ミュはアレを見て凍りついた。

「お、大きい……」

ミュに向けられた巨大なアレ。

もつ逃げることもできない。

どつするミュ……!!

なんと、サラセニアあんの股間には大砲が付いたのだ!

「むふふ、このメガ粒子砲でズッコンバッコンしちゃうわよあん!」

ミュの立ってる位置はもろ射程範囲内。しかも近距離すぎる。サイ

イボーグにされちゃってるミュも避けられるハズがない。

こんなピンチのときに、都合よく出てきてくれたひよつとこ仮面

も捕まっている。

もつミュたちを助けてくれるキャラはいないのか!?

「天が呼ぶ、地が呼ぶ、人が呼ぶ、悪を倒せと私を呼ぶ……」

誰かの声が響き渡った。

「私は正義の魔女っ娘、天に代わってお仕置きよ！」

物陰から紅髪「アカガミ」のセクシー美女が現れた！

魔女っ娘を自称してるクセに、魔女っぽいのは三角帽子と悪魔の羽が生えた杖。

衣装は紅いラインの入った黒くて水着っぽいボデイスーツ。ダイナマイトボディが強調され、Gカップの巨乳が揺れていた。

それを見たミュウが胸を押さえて呟く。

「……負けた」

ミュウはDカップだった。しかもシリコン樹脂。

突如、現れた魔女っ娘は魔法を唱えた。

「マジカルシュート！」

杖から放たれた光の弾が戦闘員にヒットして、捕まっていたワトソン君が助かった。

ずっとオレンジジュースを飲んで、くつろいでいたアインが飛び上がった。

「魔導少女マジカルメグじゃないか！」

マジカル……メグ？

ミュウはマジカルメグの顔をまじまじと見た。典型的な綺麗形の顔で、ボディもダイナマイト。知り合いのカメラっ娘メグとは似ても似つかないセクシー美女だ。

興奮気味のアインはさらに説明を続けた。

「マジカルメグと言えば、半年前に突如現れたリアルヒロインで、一部の熱狂的なファンから支持されてフィギュア化、さらにはネットで漫画になるほどの人気だよ。プリティミュウはその2番煎じ、亜種ってとこだね」

プリティミュウの生みの親はあんたでしょ。それを2番煎じ扱いって……。

マジカルメグはミュウの顔を向けた。

「プリティミュウ、ここは引きなさい」

なんか正体バレてるし！

今回の怪人はなんか強そうだ　股間のアレが特に。だからマジカルメグの言うとおり逃げちゃったほうがいいかもしれない。ミユは逃げる気満々だった。

だが、アインが反対した。

「それはできないね。プリティミューにはジョーカー怪人をフィギュア化する崇高な使命があるんだ。そして、世界で1つだけのレアフィギュアがボクのコレクションに加わるんだ！」

「そんなくたらないことのためにミューは戦っているのか……」

マジカルメグは吐き捨てるように言った。

「そんな不純な者たちに戦いは任せられない。ジョーカーは私が壊滅させる！」

声を張り上げながらメグはサラセニアあんに襲い掛かった。

放置されていたサラセニアあんは怒っていた。

「いきなり現れてアタイより目立ってるんじゃないわよ、メガ粒子砲発射！」

サラセニアあんの股間から巨大な光の柱が放たれた。

杖を構えたマジカルメグ。

「Mフィールド！」

大爆発が起きた。

眼が焼けるような閃光の直後、鼓膜が破れるほどの轟音が響いた。誰かが咳き込む声が聞こえた。

辺りは煙に包まれ、なにが起きているのかまったくわからない。

ミユは夜の街を眺めた。

「あはは、獅子舞町は夜も賑やかよねえ〜」

さっきの爆発で店が完全にぶっ飛んでいた。

すぐにマジカルメグの直後ろの隠れたミユ、アインはかすり傷程度で済んだのだ。

サラセニアあんの姿はなかった。

焼けた果実の残り香と、金色の粉が舞っていた。

マジカルメグは辺りを見渡して言う。

「怪人は倒したわ」

それだけ言つてマジカルメグは姿を消してしまった。

残されたアインは瓦礫の山に立って叫んだ。

「ボクのフィギュアがあつ！！」

サラセニアあんをフィギュア化できなかったことが、かなりーりシヨックだったらしい。

もうひとつアインにはシヨックなことがあつた。

「ときめけがあつ！！」

原画家とシナリオライターも瓦礫の下に埋もれていた。

それはさて置き、ミュはあることに気づいた。

「ワトソン君がいない？」

さよならワトソン君、きつと瓦礫の山の中で死ん（ry

落ち込みながらアインは帰る準備をしていた。

「ワトソン君ならお腹が空いたら帰ってくるさ。それよりも警察が来たらメンドクサイから帰るよ」

もうすでに繁華街の住人たちが野次馬を作っている。ケータイで写メ&動画を撮られまくりだ。テレビより先にネットで垂れ流される。

ミュは顔を隠しながらさっさと逃げることにした。

獅子舞町オカマクラブ大爆発の翌日、何食わぬ顔でミュが学校に登校した。

運良く、ニュースではミュやアインの映像は流れていなかった。

ただ、フンドシ姿の変態が警察に連行されたらしい。

今日はなんの事件も起こさずに学校が終りそうだ。

あとは帰るだけつてところで、誰かに声を掛けられた。

「センパイ！」

振り向くとメグがいた。

「ああ、よかつた無事だつたんだ」

ミュはちよつとほつとした。

「はい、一人で逃げちゃってごめんなさい。センパイは大丈夫だったんですか、ニユースで爆発事故見ましたよ？」

「うん、なんか正義のヒロインみたいのが現れて助けてくれたんだけど……」

ミュはメグの顔をまじまじと見つめた。

やっぱり違う。

あっちのメグとこっちのメグは似ても似つかない。姿かたちも違うし、まったくの別人に見える。

メグはメガネの奥で瞳を輝かせた。

「ヒロインってプリティミュですか!？」

「え、その……」

「残念です、センパイがミュだって証拠をつかめたかもしれないのに……」

「だからね、何回も言ってるけど、あたしプリティミュじゃないし。あたしのこと助けてくれたのは魔導少女マジカルなんとかっていう人だし」

「え、ミュじゃないんですかあ」

それにしてもあの魔導少女マジカルメグっていったい何者なのだろうか？

ミュが考えるよりもアインのほうが詳しくそうだ。

校門まで歩いてくると、そんなアインがグッドタイミングで現れた。真っ赤なオープンカーで乗り付けやがった。

「バイト君、大変な事件が起きてるよ」

「どんな事件？」

「獅子舞町で昨日の怪人が大量発生してるんだ」

昨日の怪人「オカマ怪人

それが大量発生!？」

地獄絵図ですね!

さっそくミュは車に乗り込んだ。だってアインが起爆スイッチを

握ってるんですもの。

この件についてまたメグにしつこく質問されると思ったが、いつの間にかメグの姿は消えていた。スムーズに現場に向かえそうだ。

獅子舞町はお祭り騒ぎだった。

まだ陽の昇る明るい時間帯なので、そこいらのお店の営業時間ではないけど、このまま騒ぎが続いたら今日は臨時休業だ。

すでにコマンドポリスが出勤して、報道陣もわんさかいて、野次馬の数もすごいことになっている。

とりあえずそんな様子を離れたところから、ミュとアインはカーナビでニュースの生中継を見ていた。

ミュはその映像を見て青い顔をした。

地面からサラセニアあんが生えていた。

まるで植物のように生えていた。

アスファルトの地面を突き破る根性を見せて生えていた。

そりゃもう強くたくましく生えてますとも！

上空から枯葉剤をまいてやれ！

コマンドポリスは臭い対策でガスマスク着用している。武器は火炎放射器だ。

サラセニアあんの身体から、緑の触手がたくさん伸びている。焼いても焼いても生えてくる。そんな感じだからコマンドポリスは近づけなかった。

強力な武器の使用は市街地なので許可が降りづらい。ミサイルで一掃したいが、建物を壊したら補償しなくてはいけない。

アインは『ふむ』と納得したようだった。

「どうやら植物型怪人だったらしいね。これだけ数が多いと、ミサイルで爆撃したいところだけど、政府が許可を出すまでには時間が掛かりそうだ」

そこで臨時ニュースが飛び込んできた。

《帝都政府は獅子舞町2丁目にBフィールドを発動すると発表しま

した》

その発表を受けてアインは少し嫌そうな顔をした。

「不味いね、結界師たちが来るよ。さっさと現場に潜り込んだほうが良さそうだね」

その意味をミュも理解している。

Bフィールドとは結界のことである。結界が張られてしまうと、その中に誰も出入りができなくなる。つまりミュも入れなくなってしまう。

アインはミュにケータイを手渡した。

「新しいケータイだよ。全部倒す必要はないからね、1匹だけフィギュアにしたらいいから」

「はいはい、がんばりませう」

言葉から滲み出す頑張る度ゼロ。

さっそく車を降りて現場に向かおうとしたミュをアインが引き止める。

「ちよつと待ちたまえ」

「なんで？」

「テレビを見ればわかるよ」

Bフィールドが発動されていた。

これでもう誰も中に入れない。結果が解かれるのは不測の事態が起きた場合と、戦闘が終って敵が一掃された場合だ。

ミュはラッキーと内心思っていた。

「これじゃあ、なぐんにもできないよね。ってことであたし帰るから、んじゃねえ〜」

「ダメだよ帰っちゃ」

「なんで？ だって中に入れないんだからあたしのできることはないもん」

「Bフィールドは地表のみに効果があるんだ。下水道を歩いていけば中に入れるよ」

「へえー、そーなんだー」

嫌そうにミュは言った。

「ご丁寧にすぐ近くにマンホールがあった。

下水道には雨水などが通る道と汚水が通る道がある。

ミュがマンホールのフタを開けた。ちよつと臭うが汚水っぽい感じではない。

嫌そうな顔でミュはアインを見つめた。

「マジで行かなきゃダメ？」

「それがキミの仕事だからね」

「はいはい」

起爆スイッチさえなければ……。そんなことを思いながら、

ミュはマンホールを降りることにした。

のに、アインが声を掛けてきた。

「そうだ、バイト君」

「なんですか！！」

ちよつとミュは怒ってるらしい。

「これは仮説なんだけど、本体がどこかにいる可能性があるよ」

「はい？」

「バイト君も知ってる通り、ジョーカー怪人はハイブリッドなんだ
ぶつちやけミュは知りませんでした！」

アインは話を続けていた。

「つまり今回の怪人はサラセニアとの合成人間ということになるね」
「先生、サラセニアってなんですかあ？」

「食虫植物の一種だよ。筒状の葉に虫を落とし、溶かして栄養を吸収するんだ。そのサラセニアというのはね、1つの根からいくつかの筒状の葉を作る。つまり、現在地表に出ているのは葉の可能性があるってことさ」

早い話、根っこを倒さないと無限増殖するかもよつてことである。
あんなキモイ物が増殖し続けたら……考えただけで身震いする。

起爆スイッチやバイト料に関係なく、ミュは絶対に倒す決意をした。

さっそくプリティミューに変身して下水に降りた。

かなりデカイ下水に降りたらしく、川のように流れる下水の脇に人の通る道が確保されている。

「あれ、どっちに行けばいいんだっけ？」

はい、おめでとございます　　迷子です。

下水道で迷子になってしまったミュー。

しばらく歩いていると、水の流れる以外の物音が聞こえた。

ミューは急いでそっちに向かった。

思わずミューは足を止めてしまった。

そして、見なかったことにして回れ180度。

「ちよつと待ちなさいよおん！」

なんか聞き覚えのある声。そこにいたのはサラセニアあんだった。しかも、なんかワラワラいますよ。

さすがに勝てないのでミューが逃げることにした。その視線の先に現れる黒い影。

「さすがはプリティミューね。貴女もここに本体があると思っってきたのね？」

魔導少女マジカルメグだった。

ところで1つツツコミたいところがあるのだが……マジカルメグって『少女』やないやん！

すでに戦闘モードに入ったマジカルメグ。

なんかいかにも魔法です、って感じのエネルギー体を飛ばしまくって、マジカルメグが次々とサラセニアあんを倒していく。

だが、倒しても倒してもすぐに新しいのが生えてくる。で、なんか知らんうちにメグが触手に捕まって宙吊りにされていた。

ずっとクールだったマジカルメグが崩壊した。

「いやあ〜っ、早く助けてくださあ〜い」

涙をボロボロ流しながらマジカルメグは情けない声を出した。

……呆氣にとられるミュー。

触手は貪るようにマジカルメグの身体に巻き付き、バストが締め上げられて強調された。

バストアップ効果だ!!!

マジカルメグは地面に落ちた自分の杖に手を伸ばして訴えた。

「その杖を私に……」

ミューは言われた通りに杖を拾って、メグに向かって投げた次の瞬間、触手がミューの身体を弾き飛ばした。

ドボン!

下水に堕ちたミュー。

さらに次の瞬間、マジカルメグは呪文を唱えていた。

「フレイムロード!」

火焰がサラセニアたちを焼き払い、炎の道の先をマジカルメグが指差した。

「あれが本体よ、プリティミュー!」

えっ、いつの間にかクールモード?

確かにそこにいたサラセニアぁんは周りと違っていた。バーコードハゲなのだ!!!

ミューは下水から這い上がって駆けた。ドロドロの水に濡れた姿が一部のマニアに萌えた。

萌えメーター全快!

「マジカルハンマー・フィギュアチェンジ!」

「あぁん」

キモイ声を上げてサラセニアぁんはフィギュアになった。

すると、周りのサラセニアぁんが次々と枯れてしまったではないか!

残ったのは腐った果実のような残り臭い。

マジカルメグはもう完全にクールなお姉さんに戻っていた。

「今日のところは礼を言う……ありがとうプリティミュー」

そう言っただけでマジカルメグは姿を消してしまった。

残されたミューは数秒間じっとしていて、急にハッとして叫んだ。

「ここどこなのよぉ〜!」

はい、おめでとございます　　迷子です。

秘密結社ジョーカー帝都支部。

今日はいつもと様子が違った。

怪人たちがあまりに不甲斐ないため、ゲル大佐が寝込んでしまっ
たらしい。

ち　こがあってもなくても、両生類でもダメだった。

通信装置のあるいつもの部屋では、戦闘員たちが胡坐を掻いて怠
けていた。

そこへ現れた謎の男。

「あのお、ゲル大佐の髪を散髪に来たのですが……ゲル大佐はどこ
らに?」

ボソボソと弱々しい口調。顔も青白く見るからに病弱そうだ。

しかし、その男は鋭い武器を持っていた。

なんと両手が巨大な金属ハサミなのだ。

この男の正体はカマキリ怪人マンティスシザーだった!

戦闘員がマンティスシザーに挨拶をする。

「キーツ!」

「あのお、キーツじゃわからないので日本語でお願いできないでし
ょうか?」

「キーツ!」

「ごめんなさい、自分で探します。お手数をお掛けしました」

心の底から申し訳なさそうに頭を下げ、マンティスシザーは姿を
消した。

それと入れ替わりで部屋に入ってきたゲル大佐。

「おい、マンティスシザーはまだ来ないのか!」

「キーツ!」

「なに、今来ただと?　どうして自分の元へ連れて来んだ!」

ゲル大佐は巨乳を揺らしながら怒り、戦闘員の股間を蹴り上げた。

「キーツ！」

悲鳴もやっぱり『キーツ！』だった。

次回の怪人はさっきの彼なのか！？

果たして他の怪人が登場しちゃうのかっ！

結局、魔導少女マジカルメグの正体もわからなかったよー！

てゆか、フンドシ仮面（誤字）はあれからどうなったの……？

第5話「マンティスシザーだよプリティミュー！」

日曜日だって言うのに、呼び出しされてミュはカンカンだった。

「ったく、今日は友達と遊ぶ約束してたのに」

ただでさえ減少中の友達。友達との約束は重要事項の1つだったが、ヤツはアレを握っている。そう、ミュの命を繋ぐ起爆スイッチ。そんなわけでミュは仕方なくアインの自宅&研究所に向かっていった。

街を歩いていると、人だかりができていた。

ミュは人ごみを掻き分けて、その中心にいた人物を見た。

両手がハサミの男が女性の髪をカットしていた。

「シザーマン？」

と、ミュは呟いた。

あんな大きなハサミなのに仕事は繊細で、華麗なハサミさばきで観客の心を驚づかみ。

いったいこのハサミ男は何者なのか？

そんな感じで観客とのトークが進められ、ハサミ男はこんな話を始めた。

「実は……ゲル大佐という方を探して、旅をしているのです。人の髪を切るのは、旅を続けるための路銀稼ぎとでもいいますよるか」
ゲル大佐を探して3千里ですか！？

見方によつては感動話じゃないか！！

ま、ミュは『へえーそうなんだあ』程度にか思わなかったが。

そこらにいる路上パフォーマーと変わりませんね。

てなわけで、ミュはこの場を後にした。

獅子舞町を駆け抜け、裏路地を奥まで進んだ。

金属のドアの前に立って、いつもどおりインターフォンを 押
そうとしたのだが。

「貸家？」

って書いてる張り紙が貼ってあった。
インターフォンを押しても反応ゼロっていうか、電源すら入ってない感じだった。

ミュはドアに耳を当てて、中のようすを探った。
音はしない。

気配も感じられなかった。

「……………」
ミュは目を白黒させて、脳ミソをフル回転させた。
そして。

「人を呼び出しといて、どーゆーことじゃボケッ！」
ドアを殴る蹴る！

金属製ドアなので、辺りに爆音を撒き散らす。

10万馬力のミュでもドアはびくともしなかった。

それでもミュはドアに闘いを挑み続けた。

「意味わかんない、借家つてどーゆーことなのよおおっ!!」
闘いを続けていると、どっかのビルの窓が開いた。

「うっせーよ！」

男の声が出た直後、2階から投げられたナベがミュの頭にヒット。

「イタッ……………」

ナベをぶつけられた。

怒ったミュはナベを投げ返す。

「シネ!!」

ナベを顔面に受けた男は鼻血の噴水を拭きながら倒れた。
本当に死んだかもしれない。

邪魔者がいなくなって、ミュはさらにドアと格闘した。

「オラオラオラオラ！」

なんかもうヤケクソだった。

「ハア……………ハア……………」

サイボーグでも頑張ると疲れるんですね。

ミュが息を切らしているとケータイが鳴った。

誰か確認せずにミュは通話に出た。

「なに！」

《ふむ、電話に出るなり怒鳴るなんてカルシウム不足だよ》
アインの声だった。

「シネ！」

《言語中枢に障害かい？》

「シネ！」

《ふむ、どうやら重症らしいね。早くボク元へおいでよ》

「ハア？ 来たけど借家ってどういうことよ！」

《そうだ、そのことで電話をしたんだよ。引越したからそこに来てくれたまえ》

「シネ！」

絶対にクロス、次に会ったら絶対にクロス。ミュは心に刻み込んだ。

《ケータイに地図を転送してあげるから、早くおいでよ》
ブチッと通話が切れた。ブチッとキレたいのはミュのほうだった。てゆか、もうキレてます。

地図を頼りにミュがやって来たのはアキバ区ネオ・アキバタウン。オタクの聖地だ。

街を歩いているとそこから中から音楽が聞こえてくる。

アニソンばかりですね。

「汚染される……あたしの心が汚染される」

ミュは吐き気を催していた。

日曜日の今日は特にヤバイらしい。

メインロードが歩行者天国になっているらしく、なんか変な人たちがあんまりいますよ。

レイヤーさんに群がるカメラっ子。

その中に知ってる顔を発見してしまったミュは、断じて見ていないことにした。

こつちがあつちを見つけたことよりも、あつちこつちが見つかることを恐れた。

なのにあつちは見つけやがりましたよ！

「センパイ！」

メグが駆け寄って来た。

聴こえないフリ聴こえないフリ。

ミュは空を眺めながら逃走。

しようとしたが、腕を掴まれてしまった。

「センパイ待ってくださいよお」

「ワタシ日本語ワカリマセン」

「センパイ大丈夫ですか？」

「ワタシ日本語ワカリマセン」

強引過ぎる。

メガネの奥から覗くまん丸の瞳。

「センパイですよね？」

「センパイ誰デスカー？」

「ミュ……センパイですよねえ？」

「世界二八自分ト似タ人ガ3人クライイル言イマース」

「はぁ……そうなんですか……」

不思議な顔をしてメグはきょとんとしている。

その隙を突いてミュは逃走した。

今度こそ逃走に成功！

メグは呆然と立ち尽くしたままだった。

絶対に変人だと思われましたね！

そのまま走ってミュは地図に書かれた場所までやって来た。

いくつかの店が入っているビル。

そのビルの地下2階にアインは引っ越したらしい。

エレベーターで降りる間、どうやって血祭りに上げてやるつかミ

ユは考えた。

とりあえずメガネごと目潰しで奇襲をかける。

視界を奪ったところであとはじっくりコトコトお楽しみだ。
邪悪な笑みを浮かべるミュ。そんな顔で街中を歩いていたら職務
質問されます。

エレベーターを折り、少し歩いてドアのインターフォンを押す。
小型ディスプレイにワトソン君の顔が映された。

《今開けるにやー》

自動ドアが開き、中に進入するミュ。口元が邪悪だ。

ミュは辺りを見回しながら獲物を探した。

部屋は前より広くなっているが、家具の配置は前とほとんど同じ
で、棚に並べられたフィギュアがミュを見ている。

その部屋の中心にアインはいた。ソファに座ってさっき届いたば
かりのアニメDVDを鑑賞している。

今だ、相手が油断し切っている今こそチャンスの時だ！！

ミュはチョキの構えでアインに飛び掛った。

ガッーン！

突然現れたフライパンによってチョキが塞がれた。

「いったあゝい！」

ミュは指先を押さえながらしゃがんだ。

アインはアニメを見ながら言う。

「今いいとこなんだから邪魔しないでくれたまえ」

命を狙われたことなど、まったく気づいていないらしい。

ミュは再びアインに襲い掛かった。

「シネ！」

今度はマジだ。

フライパンごと叩きのめしてやる！

が、アインの高機能ランドセルから飛び出したフライパンは、ま
たもやミュの攻撃を防ぎ、さらにミュを思いつきりぶっ飛ばした。

ぶっ飛んだミュは棚にぶつかり、フィギュアが雪崩のように床に
落ちた。

「ボクのフィギュアー！！」

アインが絶叫した。

アニメなんか見ているどころじゃない。

騒ぎを聞きつけてワトソン君も部屋の奥から顔を出した。

「どうしたにゃ？」

「どうしたもこうしたもないよ、バイト君がボクのフィギュアを！」

ワトソン君が見たのは、床に散らばったフィギュアの山と、目を血走らせたミュの姿だった。

「シネ！」

ミュはまたまたアインに襲い掛かった。

ガッーン！

自動操縦のフライパンがまたミュをぶっ飛ばす。

「あーっまたボクのフィギュアがあっ！」

アインは頭を抱えてうずくまった。

ワトソン君がこんな発言をする。

「今日のミュは可笑しいにゃー。まさか偽者にゃー？」

またかーっ！

またそういう展開ですか！

ある意味まさかの展開ですね！

反則ワザな展開ですね！！

が、ミュはこう反論した。

「ハア？ あたしのどこが偽者なの？ 日曜日に呼び出された挙句、

行ってみたらアンタらいなくて、引越したなら先に言えよバカ！

だから怒ってるんのだ！！」

アインは納得したように頷いた。

「ふむ、怒る動機としては筋が通っているように感じるね。ここまで怒り狂うほどじゃないと思うけどなあ」

「今回のことだけじゃないの、今まで溜め込んできた物があんのよ！」

身体に埋め込まれた爆弾ひとつで、かなり人権無視をされてきた。それと、馬鹿力を手に入れてしまったために、学校でトラブルばか

り起こしてしまつて友達減少中。
いろんなストレスが溜まりに堪つて、ついに大爆発を起こしたのだ。

だが、まだ本物のミュだと決まつたわけじゃない。

アインは起爆スイッチに手をかけた。

「本物かどうかを調べるには、これを押し見るのがいいね」

「ここで押したらアインのフィギュアもただじゃ済まないにゃー」
ワトソン君のバッドツツコミ。

ツツコミを入れるところは、フィギュアだけじゃないと思う。

アインはため息をついた。

「バイト君がそこまで思いつめていたとはね、早く気づいてあげべきだった」

しんみりそう語るアイン。

過去のアインの態度からは想像できない変化。そんなギャップに、ミュはちよつぴり感動さえしてしまった。

「アイン……わかつてくれればそれでいいの」

「わかつたよ、キミの気持ち。コレをあげるから機嫌を直したまえ」

コレと差し出されたのは美少女フィギュア。

「こんなのいるか！」

ミュはフィギュアを床に叩き落した。

「あーっボクのフィギュアあああ！」

首が飛んだフィギュアをアインは抱きかかえ、メガネの奥にいったいの涙をため、怒りのこもつた瞳でミュを見上げた。

なにも言わず、アインは壊れたフィギュアを抱きかかえ、部屋を静かに立ち去つた。

あーあ、アイン君スネちやつたよお。

アインは戻つて来なかつた。

その間にミュの怒りはすっかり冷め、ちよつと悪いことしちゃつたかなあ、と思いはじめていた。

床に落ちたフィギュアを棚に片付けるミュ。

棚にはシールが貼ってあった。フィギュアの立ち位置を示すシールだ。几帳面というか、こだわりが怖すぎる。

ミュは片づけを続けながらワトソン君に尋ねた。

「ねえワトソン君、どうして急に引越したの？」

「ジョーカーにあの場所がバレたらしいにや。ミュがプリティミューだってこともバレてるにやー」

「は？」

「そーゆーことは質問される前に言いましたよ。」

引越しの話をしなかったら、ずっと黙ってる気だったんですか？

聞かれなかったから、答えませんでしたなんて言い訳通用しませんよ？

「早く言つてよー!!」

ミュは激怒した。

「ごめんにやー、引越し作業で忙しかったにやー」

「ケータイにメール打つくらいできたでしょ！」

「最近ミュ怒りっぱいにやー」

怒って当然だ。

正体がバレているということは、学校にジョーカー怪人が教師として赴任してくるとか、宅配便を装って自宅に来るとか、家族にだって危険が及んでるじゃないか。

ジョーカー怪人のイケメンが母親を誘惑して、不倫の果てに家庭崩壊だってありえるじゃないか！

ミュは頭を抱えた。

想像すれば想像するほど、かなりピンチだ。

でもね……このピンチにミュはもっと早く気づけたはずだった。

ジョーカーにアインの自宅がバレと思われる要因は、あの偽者ミュ騒ぎが発端だ。

あの変態オヤジはミュに変装していた。つまりミュの存在を知っている可能性は、限りなく100パーセントに近い。

けど、ミュは今でもあの変態オヤジが自分にそっくりだと認めて

いない。

「ごうしちやいられない！」

「ミュは一刻も早く家に帰ろうとした。」

「あたし帰る」

「急にどうしたにゃ？」

「急にじゃないし、ジョーカー怪人があたしの家族を襲うかもしれないじゃない！」

「それなら平気だにゃ。ミュの家族には24時間監視がついてるにゃ」

「は？」

「そんな話聞いておりませんか？」

「またアレですか、質問されなきゃ答えませんってヤツですか？
人間不信に陥る寸前だ。」

「ミュの心配は治まらず、やっぱり家族の元へ駆けつけることにした。」

「ミュは玄関のドアを開けて自宅に飛び込んだ。」

「まだまだ夕飯の時間でもないのに、台所から匂ってくるクリームソーダの匂い。」

「台所に駆け込んだミュは啞然とした。」

「ハア？」

「と、思わず口から漏れるくらいだ。」

「台所に立っている母親。そこまではオツケーだ。」

「……そこにいる人だれですか？」

「なんと、食卓にはあのハサミ男がいたのだ。」

「はい、意味不明ですね！」

「おかえりなさいミュ」

「柔らかな笑顔で母親はミュを見つめ、美味しそうな香りが鼻をくすぐる。微笑ましい食卓の風景……じゃねえよ……！」

「だからなんでハサミ男がいるんだよ……！」

ミユは八サミ男を指差した。

「その人なに？」

八サミ男が自ら答えました。

「はじめましてミユさん、私の名前はマンティスシザーです」

ミユは遠目から見たからはじめてじゃないし。てゆか、なんでミユの名前まで知ってるの！？

ええ、もちろんそれはミユママが話したからですよ。

「マンティスさんと町で出会って、髪を切ってもらったお礼に、夕食でもごちそうしようと思って来てもらったのよあ」

そういう馴れ初めでミユママとマンティスシザーは出逢ったらしいですよ。

ミユは理解できなかった。

「そんな凶器を持った変種者をどうして家にあげるわけ！」

八サミは体の一部なので、存在自体が銃刀法違反です。

ミユママは少し怒ったような顔をした。

「どうしてそんなことを言うの？ 人は見た目で判断しちゃいけません。マンティスさんはとても心の優しい人のなのよ。今も生き別れになった上司を探して旅をして苦労しているのよ、食事くらいご馳走してなにが悪いの？」

上司を探して旅って……普通、兄弟とか両親でしょそこは。

「ママはちょっとお人よしなのよ。こんなの八サミ持つてる変態でしょ！」

「わたしにだって人を見る目くらいあるわよ。ジョニー・デップに似ているマンティスさんが悪い人のハズないわ！」

「ママ、イケメン好きだもんね。パパのことだって顔で選んだんでしょ！」

「失礼なこと言わないでよ、パパとは大恋愛の末に駆け落ちして結婚したのよ！」

思春期の娘と母親の戦いは、まさに女と女のぶつかり合い！

このまま放って置いたら、ケンカはドンドン加速して行きそうだ

った。

そこへブレーキをかけたのはマンティスシザーだった。

「あのく、私がいるとお二人がケンカをしてしまうようなので、また旅に出ようと思います」

マンティシザーは立ち去ろうとした。

だが、その腕を掴んで引き止めるミュママ。

「行かないでマンティスさん、あなたはなにも悪くないわ!」

近距離で見詰め合う男と女。

瞳をキラめかせるミュママと、それを受け入れるマンティスシザー。

そのまま二人の顔が近づき……。

「ちよつと待ったあ!」

ミュが二人の顔を引き離れた。

展開になんだかバラの花びらが舞っている。どう考えてもアブナイ展開だ。

ここでミュはハッと気づいて、マンティスシザーから守るように母親の体を抱いた。

「あんたジョーカーの怪人ね!」

そうだ、これはミュの脳内シミュレーションと同じだ。

ジョーカーのイケメン怪人が母親を誘惑して、昏ドラ風に家庭崩壊、登場人物の精神錯乱を企んでいるに違いない!

母親の得意料理がたわしコロツケになってしまう!!

マンティスシザーはうつむいて、なにも言わずじっとしていた。

そこにミュが追い討ちをかける。

「ジョーカーだから何も言えないんでしょ!」

「……そうです、私はジョーカーの改造怪人です」

ついに認めた!

やっぱり母親を墮落させる気だったんだ!

ミュはさらにマンティスシザーを責め立てる。

「ママ、ジョーカーっていうのは悪の組織なんだよ。こいつはその

「一員なんだよ、悪いヤツなんだよ！」

バシーン！

ミュの頬が強く叩かれた。叩いたのはミュママだった。

「どうして叩くの！」

頬を押さえて声を上げたミュをミュママはじっと見つめていた。

「ママはジョーカーのことはよく知らないわ。でも、マンティスさんのことは信じてる。この人はとても心の優しい人よ」

「ママは騙されてるのよ！」

再びケンカがはじまりそうだった。

そのとき、マンティスシザーが叫んだ。

「やめてください！」

そして、すぐに声を沈めて話はじめた。

「私はジョーカーの怪人です。そして、ジョーカーは悪の組織です……でも信じてください！ 私はジョーカーを憎んでいます」

声を震わせ、怒りと哀しみを込め、マンティスシザーは肩を落としました。

ミュはまだマンティスシザーを信用したわけじゃない。けれど、なにか心に響くものがあった。

そして、ジョーカーを憎んでいるとはいったい？

ミュと母親はマンティスシザーの話に耳を傾けた。

「ジョーカーの怪人はもともとみな人間です。ジョーカーは優れた才能を持つ人間を捕まえ、怪人に改造し、洗脳してジョーカーへの忠誠を誓わせるのです。私はどういうわけか洗脳が利きませんでしたが、それでも恐怖心からジョーカーに逆らうことができません。でも、私は……こんな体にしたジョーカーを憎んでいるのです！」

そう言いながらハサミの手を胸の前に掲げた。

今まで戦ってきた怪人……蜘蛛男、蝙蝠伯爵、レイディスコーピオン、サラセニアーン、みんなジョーカーの被害者だった。そう考えるとミュは胸が痛くなった。

母親はハサミの手を握った。

「たとえどんな姿をしていようと、わたしはあなたの傍にいるわ！」
トキメキ炸裂！

「……ママさん」

呟き、マンティスシザーはミュママを見つめた。
再び見詰め合う男と女。

母親のハートはファイアーしていた。

「ジョーカーだかなんだか知らないけど、あなたのことはわたしの命に代えても守るわ。だからここにいて、この家は出て行かないで！」

「それはできません……私がいたらみなさんに迷惑をかけてしまう！」

「いいよ、あなたはここにいて……」

な、なんですかこの展開！？

プリティミューらしくありませんよ！！

普段なら、ここで強烈なツッコミが入ったりするのだが、ツッコミすら飛んでこない。

第三者のミュはさっきから厳しい顔をして黙り込んでしまっている。

ミュが急に台所を出て行った。

そんなことにも気づかないほど、ミュママとマンティスシザーは見詰め合っています！

ミュはネオ・アキバタウンに来ていた。

ここに来る理由はアインに会うほかなかった。

なのに関係ない人にバツタリ出会う。

「センパイ！」

駆け寄ってきたのはメグ。

「また会いましたね」

なんて声を掛けてきたメグを完全シカトでミュは先を急いだ。

研究所&自宅のドアをワトソン君に開けてもらい、ミュはアイン

の姿を探した。

アインはまだ部屋の奥から出てこないのだと、ワトソン君が困ったようすでミュに伝えた。

ミュはアインの部屋の前に立った。ドアには『使用中』のプレートが飾ってある。

「アイン、ここ開けて！」

ドアをドンドン叩くミュ。

どこからかアインの声がした。

「バイト君の出力と硬度じゃ壊せないよ。この地下全体はかの有名な合成金属でできているんだ」

有名な金属ってなんだーっ!?

ミュはドアを殴る蹴るした。

「さっさと出てきなさいよ、話があるんだから！」

「うるさいなあ、ボクならここにいるよ」

「えっ？」

振り向くとアインが立っていた。

どうやらアインは部屋の外にいららしい。

「ボクになんの用だい？」

「もう……怒ってないの？」

「ボクが怒ってるって、どうして？」

「だって、ずっと部屋にこもってたってワトソン君が……」

「ああ、部屋にこもってたのは『龍玉』のDVDボックスを観てたからだよ。やっと『冷凍編』まで見終わって、一息ついていたらとこるわ」

「……へえーそうですかー」

なんだから、自分もちよつと悪かったかもあ　なんて反省した自分がバカだったとミュは思った。

「他に話がないならボクはまた龍玉の続きを見るから」

自室に入ろうとしたアインの服をミュが掴んだ。

「待って、聞きたい事があるの」

シリアス路線満開なミュの瞳に見つめられ、アインも神秘的な顔つきになった。

「なんだい？」

「ジョーカーのこと」

「ジョーカーのこと？」

「あたし、ずっとジョーカーと戦ってきたのに、ジョーカーのことよく知らなかった」

ミュは自分の見てきたこと以外、ジョーカーのことを知らなかった。

人々に危害を加えようとしていることは確かだ。そこだけを見たらジョーカーは悪だ。

でも、ミュが今まで見てきたモノは……。

横 ン男、ロリコンジジイ、SM嬢、オカマ……。

急にミュの顔色が曇った。

「やっぱりただの悪かも」

えっ、自己完結しちゃった？

ミュは頭を激しく振って考えを捨てた。

「違うの、ジョーカーの怪人はみんな……無理やり改造されて洗脳されてるって聞いたの！」

もし本当にそうだったら……。

「あたし……もう戦えないかもしれない」

「ふん」

と、アインは素っ気無く鼻を鳴らした。

デリカシーゼロっていうか、ミュの話ちゃんと聴いてましたか？
みたいな。

アインの態度でミュの感情はジャンジャングルグルした。

そりゃもうジャンジャングルグルした。

怒り、哀しみ、虚無感。

無言で立ち去ろうとしたミュの背中にアインが声をかける。

「無理やり改造とか洗脳とかどこで聞いたの？ ジョーカーの怪人

はみんな志願者だよ。戦闘員は時給のバイトらしいけどね」

「え？」

戦闘員ってバイトだったのか！！

さっきアインが『ふうん』と鼻を鳴らしたのは、ミュが戦えないと言ったことにたいしてじゃなくて、無理やり改造なんてウソだよそれ、って意味の『ふうん』だったのだ。

きょとんとしてるミュにアインは話を続けた。

「ジョーカー怪人は手広く募集しててね、ネットの裏サイトとか、大学のサークルだったり、スカウトマンがホウジユ区あたりでスカウトしたり」

「悪質な新興宗教みたいに、いつの間にか入団させられちゃったりじゃないの？」

「前にさ帝都警察が押収した証拠物件を見たんだけど、法的な手続きを踏んで契約書とか作成してるみたいだね」

「そ、そうなの？」

あれ、なんか話が違ってきたような……。

ここでもう一度、ミュは冷静になって考えてみた。

マンティスシザーの話（ミュの解釈）では、無理やり変態に改造されて、変態になるべく洗脳され、華麗なる変態に生まれ変わると聞いた。

アインの話（ミュの解釈）では、自ら進んでド変態に改造され、根っからの変態が、さらに変態になるべく日々精進。

どちらが言っていることが間違っているのか？

むしろ根本から『ミュ』の考えが間違っているのか？

マンティスシザーがミュママに近づいたのは偶然だったのか？

やっぱり、もしかして……イケメン怪人不倫大作戦！？

どんどんミュは不安になってきた。

あの心に訴えかけてきたマンティスシザーの言葉も、全部ウソ？
見事にミュは騙されちゃった？

ミュママはケータイを持っていないので、ミュは自宅に電話をか

けた。

トゥルルルルル……発信音が聞こえるだけで、いくらコールしても誰も電話にでんわ!

「家に電話かけても誰もでない。パパは残業かもしれないけど、弟だって家にいるはずなのに……」

不安だ!

さらにミュを不安にさせる要素を持ってワトソン君がやってきた。

「ミュのママを監視していたロボットの反応が消失したにゃ!」
はい、ピンチですね。

とてもとてもピンチでございますね。

「早く帰らなきゃ!」

ミュは急いで自宅に向かおうとした。

「待ちたまえバイト君!」

アインが引き止めた。

「待てない、早くママを助けなきゃ!」

「交通機関を使って帰ると時間がかかるよ。ボクが宅配ピザよりも早く届けてあげるよ。というわけだから、いざ出動!」

アインがリモコンのスイッチを押すと、ミュの足元に落とし穴が開いた。

「きゃっ!?!」

悲鳴と一緒にミュは闇の中に落ちた。

この展開ってたしか……第1話と同じだ!

ミュはチューブ状の滑り台を降り、ストンと着地したと思ったら、身体をシートベルトでグルグル巻きにされて発射準備完了。

秒読み、5秒前、4、3、2、1　ゼロ!

なんか今回はビルの配管を通じて屋上の砲台から発射された。

人間ロケット発射!

びゅん!

もうすっかり日も暮れて、ミュは夜空の星になりましたとき。

願い事はミュが地面に激突するまでに3回唱えるんだよ

科学少女プリティミューが人気になりますように！
科学少女プリティミューが人気になりますように！
科学少女プリティミューが人気になりますように！

余裕で3回願い事を唱えてからミュは着地した。

実際は着地というか着屋根。

隕石が落ちてきたみたいなのに、ミュは屋根をぶち破って着地した。
しかも、自分んぢじゃなくて隣んち！

「アツツーツ！」

ミュは熱々のナベに浸かっていた顔をあげた。口にはチクワをくわえている。

箸を持ちながら固まっている住人たち。

どうやら食卓に突っ込んでしまったらしい。

ミュは苦笑いを浮かべて逃げた。

「おでん美味しかったです、さようならあ！」

チクワを美味しくいただきました。

急いで自宅に駆け込むと、幻想が見えた。

バラ色が見えるような気がする幻想。

なんだかよくわからない空気感に家中が汚染されていた。

リビングで二人を発見。男と女の距離がゼロだ。

ソファに寄り添って座り、指を絡めて見詰め合う二人。

ミュママとマンティスシザーは見詰め合っているだけ、もう二人の間に言葉なんて必要だった。

かなりの高みまで到達している様子だ。

ミュの飛び蹴り炸裂。

「ママのことたぶらかしてんじゃないわよ！」

マンティスシザーはひらりと避けた。

一撃必殺で仕留められなかったことで状況は悪化してしまった。

ミュママがマンティスシザーに抱きつき、全身で守ってしまったのだ。

「なんてことするの、ミユをそんな子に育てた覚えありません！」

「覚えてなくても、育てたのはママでしょ！」

「あなたなんてもうわたしの子じゃないわ！」

「……重症だ」

まさか母親に離縁されるなんて、ここの父親が帰ってきたら泥沼だ。

ミユはあることを思い出した。

「そうだ、ユウはどうしたの？」

ユウとはミユの3つ離れた弟である。

「ユウだったらとくに家を出て行ったわ。バカとかアホとか叫んでたような気がするわね」

ミユもその言葉を母親に言っただけでやりたかった。

マンティスシザーがミユの前に立った。

「私たち結婚することにしました。私たちの愛は誰にも邪魔させません！」

「ハア？」

ミユの思考回路は正常に動作しなかった。

あまりにも話が進みすぎている。

ミユママがある1枚の用紙をミユに見せた。

「もうわたしの名前は書いたわ」

それは離婚届だった。あとはミユパパの同意があれば即離婚だ。

ミユは離婚用紙を奪って破り捨てた。

すると、ミユママはまた離婚用紙を出した。

「破ってもムダよ、いっぱい書いたもの」

離婚用紙の束をミユママはドスンと床に落とした。

それを全部燃やしてやろうとミユは思ったが、そんなことをしても根本的な解決にならない。

「ママ、お願いだから考え直して！」

「それは無理よ……だってわたしたち愛し合っているんだものおゝ」

指を絡めてミュママとマンティスシザーは見詰め合った。

「私も愛しています、ママさん」

キラキラエフェクトの幻想が見える。

やっぱりこうなったら根本を抹殺するしかない。マンティスシザーを倒せばミュママの甘い夢も覚めるハズだ。

ミュパーンチ！

ミュキーク！

ミュアッパ！

全部ひらりゆらりとかわされた。

マンティスシザーは避けるだけで戦う意思を見せない。

「どうして私たちが戦わなくてはいけないのですか……もう家族じゃないですか！」

「家族じゃないし！」

強烈なミュのパンチが決まった！

頬を殴られたマンティスシザーが床に尻をつく。

すぐにミュママがマンティスシザーを抱きかかえて守った。

「なんてことするの！」

「大丈夫ですママさん。ミュさんが私を殴ったのは、私を父と認めて本気でぶつかって来てくれた証拠です」

そんなプラス思考を見習いたいですね！

マンティスシザーは頬を押さえながら立ち上がった。

「しかし、その力を私に向けず、どうして世界平和のために使わないのですか。そう、偉大なるジョーカーのために使わないのですか！」

あれ？

ジョーカーのため？

ジョーカーを滅ぼすため？

ジョーカーに協力するため？

なんかどっちにも取れるような言い方をしたが……偉大なる？
あれ？

ミュは首を傾げた。

「あなたジョーカーに恨みがあるって言ってなかった？」

「そんなこと言いましたか？ ジョーカーはとても素晴らしい組織ですよ。あなたの力はジョーカーに捧げるべきです。そして、共に世界を愛で包みましょう！」

……ウソつきだ！

ついにミュはマンティスシザーの正体を見切ったり！

こいつは絶対にペテン師だ。

やっぱりそうだったんだ。イケメン怪人不倫大作戦だ。

そして、その真の目的は家庭崩壊……ではなくて、ミュをジョーカーに引き入れること。ミュを倒すだけなら、いくらでもチャンスはあったはずだ。それを母親から陥落させたのは、肉親から攻めたほうがミュの心が揺らぐと考えたのだ。

怖ろしい、今回のジョーカーは怖ろしいぞ！

今までの変態怪人どもとは一味も二味も違う。

ミュママは今やジョーカーの仲間であり、人質でもあるのだ。

マンティスシザーとミュママはベッタリくっ付いている。

手出しできないじゃないですか！

プリティミュールに変身することすらできない。母親の前で変身するわけにはいかない。

だって、あんな衣装着てるとこ見られたくないもん！

どうするミュー！！

ミュが世界崩壊なんかよりも切実な家庭崩壊の危機を迎えているころ、アインの研究所ではワトソン君（人間モード）が発射の準備を整えていた。

発射！

星空に打ち上げられたワトソン君。フンドシが風になびいてヒラヒラ。

ヒューン！

そのまま地上に向かって落下。パラシュートなし！

屋根を突き破って激突、ドーン！

その一部始終をミュは目の前で見ていた。

いきなり屋根を突き破って落ちてきた変態が、見事マンティスシザーに激突！

マンティスシザーは泡を吐いて気絶。

ワトソン君は床にめり込んで動かない。嗚呼、きつと死んだね

ミュママは何が起こったのかわからず、目を白黒させて気を動転させてしまっている。

ワトソン君がムクツと生き返った！

ゾンビかつ！

全身青アザだらけのワトソン君がカツコよくポーズを決める。

「ひよつとこ仮面ただいま参上！」

出たーっ、ふんどし仮面！（誤字）

が、ひよつとのお面がない。どうやら落下の衝撃でどっかに行っちゃったらしい。

素顔のひよつとこ仮面を見たミュママ。瞳が輝いた。

そこにいたのはふんどし姿の美青年。

身体はしなやかに引き締まっているのに、顔は童顔で主婦の心をくすぐる。

年下の可愛い彼！

母性本能をくすぐられまくり！

ミュは思った。これはチャンスだ！

「ワトソン君、そのままママを誘惑して外に連れ出しちゃって！」

「にゃ？」

状況を理解できないワトソン君だったが、ミュママのほうからワトソン君の手を握って来た。

「ぼく大丈夫？ ひどい怪我、わたしが病院に連れて行ってあげるわ」

ミュママはワトソン君の腕を引いて消えてしまった。

床で倒れていたマンティスシザーがなにか呟いている。

「おのれ……許さんぞ、プリティミュー！」

マンティスシザーが鋭いハサミで襲い掛かってきた。その顔は前とは似ても似つかないカマキリの顔。これがこいつの正体なのだ！

ミユは攻撃をかわし、ケータイを取り出した。

「サイエンスパワー・メイクアップ！」

白い光に包まれ、瞬く間にプリティミューに変身した。

ミユはカマキリ怪人を見ながら、なにか思い出そうといていた。

「そうだ、ア ガールズの特にキモイほうだ！」

カマキリ男に変身したマンティスシザーは、田 にソックリだった。

なんだかミユはヤル気が湧いた。

ボコボコにしても良心の呵責を感じないで済む。

ミユは邪悪な笑みを浮かべた。

家庭崩壊の危機をもたらしたこのペテン師に対する恨み。

ミユはマジカルハンマーを振りかぶった。

「マジカルハンマー・ファイギュアチェンジ！」

ぶん殴られたマンティスシザーがぶっ飛んだ。

あれれ、ファイギュアにならない？

怪人をファイギュアにするためには、ミューに取り付けられた萌えメーターを溜めなくてはいけないのだ。

そんなこと、ミューはちゃ〜んとわかっていた。

「あれえ〜おかしいなあ、一発でファイギュアにならないなら、何発も殴らないとね」

確信的にヤルつもりです。

ボコボコの半殺し決定！！

襲い掛かってくるマンティスシザー。

「シネーッ！」

「死ぬのはそつちじゃボケ！」

ハサミを避けてハンマーで横殴り。

また顔面を殴られたマンティスシザーがぶっ飛んだ。ついでに鼻血ブー！

怯んだマンティスシザーに容赦ない仕打ち！

「オラオラオラオアラ！」

マジカルハンマーが行ったり来たり、それに合わせてマンティスシザーの顔も左右にフリフリ。

大量の返り血（鼻血）が、ミユの白い衣装を彩る。

血の染まる甘ロリヒロイン！

一部のマニア層に受けることから、萌えメーターがいつの間にか満タンになっていた。

だが、ミューに止めを刺すつもりなんてない。ニヤツと笑いながら、まだまだ甚振るつもりだった。

顔をボコボコにされたマンティスシザーは、床に尻餅を付きながらたじろいだ。

「ま、待つてください……私は生き別れになった上司を探さなきゃいけないんです。ですから、ですからどうか見逃してください、お願いします」

「ハア？」

「本当です、本当なんです。上司を探して町を歩いていたら、たまにたまジョーカーの秘密資料にあったママさんに出会ってしまった……ジョーカー怪人として仕事を果たさないわけには、見てみぬフリをしたら、あとでどんなヒドイ目に遭わされるか……」

「最期に言いたいことはそれだけ？」

マンティスシザーを見下すミューの瞳は冷たい。冷凍ビームを発射できそうなほど冷たかった。

「ま、ままま、待つてください。私は無理やりジョーカーで働かされてるんです。そうです、脅迫されてるんです。そうだ、あ、姉が人質に捕られていて……」

「お姉さんが人質に……そんな、可哀想な……」

ミューは沈痛な面持ちで全身から力を抜いた。

その隙をマンティスシザーは狙った。

「シネーッ！」

「ウソだつてわかつてんだよ！」

マジカルハンマーが大きくスイング！

顔面に強烈な一撃を食らったマンティスシザーがぶっ飛んだ！

もう虫の息になつちやつたマンティスシザー。

「うふふ、まだまだ」

怖いです、怖いですよプリティミュー。

再びミューはマジカルハンマーを振り上げたのだが、急に脳ミソ

に謎の声が響いた。

《バイト君、ちゃんとフィギュアにするんだよ？》

それはアインの声だった。

久しぶりに使われたこの機能。そう言えば、そんな通信機能があったような気がする。

ミューは肩を落とした。

「はいはい、わかつてますよーだ」

起爆スイッチを前にしたら、邪悪モードのミューもサッと醒めてしまうのだ。

「マジカルハンマー・フィギュアチェンジ！」

虫の息のマンティスシザーに止めの一撃が炸裂！

フィギュアゲットだぜ！

これにて一件落着……と、思つて辺りを見回したミューが青ざめる。

「ヤバ……イ」

どんちゃん騒ぎをしたせいで、部屋の中はひっちゃかめっちゃかだった。強盗に入られたよりヒドイありさまだ。

「あはは、やっちゃつた」

ミューが天井を見上げると、屋根に開いた穴からキラキラ星が覗いていた。

「ゲホゲホッ」

ベッドに横になって咳き込んだゲル大佐。

なんか心労で風邪を悪化させて寝込んでしまったらしい。

羽根布団を被ってしまっているのだから、ゲル大佐の寝るときはスツポンポンらしい。

掛け布団の下には秘境が広がっているのです！

顔に汗を掻き、心労で弱っているゲル大佐の顔は、いつも以上に艶めかしい。

表情がエロすぎます、犯罪です。

小型の通信装置に映し出される謎のシルエツト。

《おまえともあるうものが心労で倒れるとは不甲斐ない》

低音ボイスの首領エツクスだ。

「申し訳ございません首領！」

ゲル大佐はビシツとベッドから跳ね起きた。

すぐさまピンク戦闘員（女）たちがゲル大佐の胸と股間を手で隠した。見事な仕事振りだが、その隠し方エロイです！

見えそうで見えないチラリズム。

ゲル大佐が動くのに合わせて、ピンク戦闘員の手も動く。まったく肝心なトコロを見せない連携プレイ。日ごろから特訓していると思えない。

「もうすでにプリティミューの正体は掴んでおります。次こそは次こそは必ずやプリティミューを……」

《正体を掴んでおつてまだ倒すことができぬのか！》

「も、申し訳ございません首領！」

通信機から視線を逸らしたゲル大佐は歯を食いしばった。ついでに巨乳もプルプル震えていた。

怒りが頂点達したゲル大佐は立ち眩みで床に手を付いた。

ピンク戦闘員ひとりの動きが遅れた。

かろうじてアレが見えなかったが、ゲル大佐は激怒した。

「練習が足りん！」

ゲル大佐はいつ間に握っていた鞭を打った。
ひょいとピンク戦闘員は鞭をかわした。

「仕置きの鞭をかわすとは何事だ！」

さらにゲル大佐は怒りを露にした。大量に掻いた汗が身体を濡らす。

鞭を避けたピンク戦闘員は『チツチツチツ』と舌を鳴らした。

「オレですよ、ゲル大佐」

ピンク戦闘員は女性限定のハズなのに、聴こえたのは男の声だ。そのピンク戦闘員が顔のマスクを脱ぎ捨てた。

驚きの瞳でゲル大佐はその男を見た。

「おまえは……カメ・レオン」

「なかなかゲル大佐に気づいてもらえないんでね、ワザと失敗してみたんでさ」

「さすがは変装怪人のレオンだな。して、あの作戦はどうなっている？」

「ええ、うまく潜入しましたぜ」

「宜しい、そのままミューの周辺調査をするのだ。そして、機が熟したら刈り取るのだぞ、ミューの首をな！ おーほほほほほほっ
！」

「わかってますぜ」

カメ・レオンの姿が消えた。

消えたのではない、見えなくなったのだ。

ミューの私生活に土足で踏み込んでくるジョーカー怪人。

今や危険に晒されるのはミューだけではない。

ジョーカーとの闘いは熾烈を極めることを予感させた……。

そー言えばさ、ミユママとワトソン君が夜の街に消えたって噂が……。

第6話「カメ・レオンだよプリティミュー！」

マラソンブームに乗っかって、ミュも美容と健康のために早朝マラソン。

「遅刻するーっ！」

口に食パン（ノートースト）を挟みながら、ミュは家を飛び出した。シチュエーションは王道ヒロインだが、見た目も本人も必死すぎ。

なかなか飲み込めない食パン。

そこでミュは食パンを手で丸めて口の中に押し込んだ。女の子が決してやってはいけない食べ方だ。というか男の子もやってはいけない。

「うっっっ！」

喉に詰まった。汚い食べ方をするから天罰が下ったのだ。

「うえ〜っ！」

ミュは電信柱の陰に吐露した。ヒロイン資格剥奪寸前だ。

たっぷり額に掻いた汗を手の甲で拭うミュ。

「ふう〜スッキリ」

その表情はさわやかそのもの。この顔だけなら清纯派ヒロインだ。過去をバツサリ切り捨てて、なかったことにしてミュは再び走り出した。

「ったく、なんで朝からついてないし。ママが起こしてくれないのが悪いのよ……てゆか、昨日ママ帰って来なかったみたいけど？」
ママが家に帰って来ないなんてはじめての出来事だった。しかも連絡なしで。

ミュの全身を不安の風が包み込んだ。

「まさか……」

そう、まさかジョーカーに連れ去られた？

もしそうだったら、一刻も早くママを救わなくては！

「でも遅刻するーっ！」

もしもの心配より、目先の心配のほうが切実だった。爆走していたミユの足が急ブレーキを踏んだ。道が分かれている。

「こっちが近道なんだけど……」

ラブホ街なんですよね！

できれば通りたくはないが、今は非常事態で背に腹を変えられない。

ミユはラブホ街に突っ込んだ。

路には誰もいない。今のうちに突っ切れ！

ミユの瞳に映る人影。2人組の男女がラブホから出てくるのを発見。

しかも、なんとそれは……！？

「マッ……」

言いかけてミユは自分の口を両手で塞いだ。

急いで物陰に隠れるミユ。そして、そーっとラブホから出てきた男女を凝視した。

どう見てもあれは自分のママ。しかも、腕組みをしている男のほうは　ワトソン君でした！

まさかワトソン君ったら大人の階段登っちゃったのかっ！？

顔面蒼白で息絶え絶えのミユ。眼なんか墜ちそうなくらい見開かれている。

まさかの光景は恐怖体験にも似た感情をミユの心に宿した。

男女の陰が朝の街に消えていく。

怖すぎてミユはストーキングすることができなかった。

それよりもミユの頭の中では、目くるめく妄想で大変のことになっていた。

もしもパパとママが離婚したらどっちについていくか！

これは重要な問題だ。

経済力のあるが家事ができないパパか、それとも家事も完璧オプ

シヨンで新しいパパが付いてくるママか……。

ミュはゾツとしてその場に立っていることも困難だった。

orzポーズで絶望を背負った。

新しいパパつてつまりワトソン君だろ。ワトソン君をパパって呼ぶっていいのか。死んでもできない。

「ありえない……ありえない……」

今日1日分の水分を全部冷や汗で流してしまった。アスファルトに水たまりができてしまった。

なんとしても二人を破局させなくてはならない！

ママとワトソン君を近づけてはならない！

学校になんか行ってる場合じゃない！

そつだ、二人を早く追わなくては……。

「……見失ったあゝ」

今すぐ探すか、それとも……？

「よし、あたしは何も見てない！」

現実逃避だった。

が、一つの大きな現実を忘れると、小さな現実が顔を出す。

「あーっ遅刻！！」

ミュは無我夢中で爆走した。悪い夢を忘れるために。

キンコーンカーンコーン

教室のドアに飛び込んだミュ。

そのジャンプ力は10万馬力。

教室を越えて、開いていた窓から 落ちた。

一瞬にして生徒たちが凍り付き、ハッと我に返って窓の外を覗き込んだ。

ここは3階だ。足から落ちれば骨折で済むかもしれないが、ミュのジャンピングポーズはウトラマン風。あれは絶対に腹から地面に激突している。

クラスメートのみならず、下の教室にいた生徒たちも窓の下を覗

いていた。

地面で大の字になっているミュ。ピクリとも動かない。

まさか死んだ……じゃなくなって機能停止!?

じゃなかった。

「……背中に突き刺さる視線を感じる……ここで立ち上がったら……」

立つに立てない状態なだけだった。

いつの間にか騒ぎは大きくなり。

学校中の生徒が窓から顔を出している。

ミュはうつぶせになったまま動けない。

いっそのこと救急車で運ばれるのもいいが、病院で人間じゃないことがバレてしまう。というか、救急車の中で無傷なのがバレル。

意を決してミュは勢いよく立ち上がった。

「うわっ、奇跡だわ！ 3階から落ちたのに無傷なんて奇跡だわ！」

自作自演。

こんなしょうもない言い訳しか思いつかなかった。

なんかもうどーとでもなれって感じだった。

すでにミュは生徒から変な目で見られている。

バレーボールで殺人サーブを放ってしまったことにはじまり、イ

ス・机・掃除用具・壁なんていくつ壊したか覚えていない。

それでもミュのことを深く追求する者はいなかった。陰でどんなことを言われているかわからないが。

もしかしたら恐れられていて、その話題に触れないだけかもしれない。

とにかく、ミュの周りからは友達が多引きしていった。というのも最初の頃で、最近はずかまた友達が増えはじめた。それもよく男子生徒に声をかけられるようになった。

ミュは何事もなかったように制服に付いた砂を払い、何事のなかったように教室に帰った。

教室に入ると、クラスメートは何事もなかったようにしていた。というより、明らかにミュと目を合わせないようにしていた。

ミュは今すぐ泣きたい気分だった。

でも、それを抑えて机で寝たふりをして腕の中に顔を埋めた。

すべてあのインチキ科学者のせいだ。実力はインチキではないが、やることがインチキだ。

そもそも正義のためにジョーカーと戦っているのではなく、世界に1つのレアフィギュアが欲しいって……なんだよその動機。

ミュは自分の人生が末期だと感じた。

最近の趣味と言えば、行き着くとこまで行き着いて、預金通帳に印刷された数字を数えること。数えている間は顔がニヤニヤするが、数え終わるとなんと虚しい気分になる。

しかもお金の使い道がないのが最悪だった。

はじめのころは豪遊したものだ、だんだんと自分の置かれていく状況に悲観してくると、お金なんかもっていてどうするんだと。

昨日なんかはついにジョーカーの魔の手が私生活にまで。自宅にジョーカーが現れるなんて。いつまたジョーカーが家族を狙うかわからない。

この学校にだって、パパの職場だって、どこにだってジョーカーが現れるかもしれない。

嗚呼、サイテーだ。

引越してどうにかなる問題だろうか？

そんなことしてもきつと無駄だろう。

ジョーカーと戦いませんと誓約書をジョーカー本部に郵送すれば平気だろうか？

でも戦い意志がミュになくても、どっかの誰かさんが起爆スイッチを握っている限り、いつまでも下僕を続けなくてはいいない。

なら、いつそのことどっかの眼鏡を殺るか？

そんなことを企ててドーンされたら一巻の終わりだ。

ならジョーカーを壊滅させればいいのではないだろうか？

どっかの誰かさんにドーンされる心配はなくならないが、少なくとも私生活や家族が危険に晒されることはなくなるような気がする。そうだ、それだ、それしかない！

「なんで今まで気づかなかったんだろ！」

大声を上げたミュにクラスメートの視線が集中した。が、すぐに視線を逸らされた。

ミュは再び寝たフリを決め込んだ。大声をあげて恥ずかしいくらいありやしない。

しばらくして教室のドアが開く音がした。きっと担任が入ってきたのだらう。ミュは気にもせず机で寝たフリを続けていた。

「なんだか教室がざわめいていた。」

「いったい何があったんだらう？」

「ミュがゆっくりと顔を上げると、教壇に立つ謎の外国人？」

ライオンみたいな髪型の男だ。顔立ちはまるでハリウッド俳優のようである。

「臨時担任のレオンです。田中先生は謎の奇病USO800型ウイルスにかかって、帝都病院の特別病棟に入院されました」

流暢な日本語だった。

女子生徒の熱い眼差し。男子生徒は嫉妬の眼差し。ミュの眼差しは机に向かっていた。

「なんかもうどこでもよかったので（主に人生全般が）、ミュは再び寝たフリをすることにしました。」

すると教壇に立っていたレオンがこつちに近づいてきた。

「ミュさん、まだお昼寝にも早い時間ですよ」

名指しで注意されては起きないわけにはいかない。

嫌そうな顔をしながらミュは顔を上げた。

別に怒ったようすでもなく、さわやかなレオンが立っていた。

「おはようございますミュさん」

別にミュはあいさつを返すことはしなかった。レオンはすぐに背を向けて教壇に戻っていく。

ここでミュはハツとした。

名前を呼ばれたことに気づいたのだ。

まさかクラスメートの名前を全部覚えてる!?

ミュは単純にそう思った。

だが、教壇に帰るレオンは人知れず不気味な笑みを浮かべていたのだった。

朝のホームルームが終わり、最後にレオンはこう付け加えた。

「ミュさん、大事な話がありますので、昼休みに会議室に来てください」

「えっ……」

なにかマズイことでもしただろうか？

レオンはそれ以上は何も言わず行ってしまった。

マズイことがミュの頭にリストアップされる。

主にプリティミュー関連。ほとんどそれから派生している。

学校内での器物破損事件とかが一番とがめられるかもしれない。

いちよう全部弁償しているが、ポケットマネーで。

「もしも退学……」

ミュは頭を抱えて寝たフリじゃくて寝ることにした。

現実逃避。

午前の授業が終わった。今日はとても長かったような気がする。

重たい足を引きずりながらミュは廊下を歩いた。

職員室の近くにある会議室に入ると、窓の外を眺めていたレオンが振り返った。

「お待ちしていました、どうぞそこにお掛けください」

「……はい」

ミュを座らせ、自らは座らずにレオンは部屋を歩き、出入り口の前立つと鍵を閉めた。

大事な話があるというのなら、鍵を掛けるのは当然かもしれない。しかし、レオンの鋭い眼。

ミュはハツとした。

「女子生徒を教室に閉じこめて性的暴行をするつもりね！」

「……はっ？」

ハズレたみたいだ。

「……ジョーダンですよ、あはは。で、大事な話があるんじゃないんですか？」

本気だったが、冗談で水に流した。

「そうです大事な話があります……プリティミューに」

「えっ!？」

慌てるなミュ!

「プリティミューってなんですかあ？」

すっとぼけてみた。

しかし、そんなことも無駄に終わった。

「あなたがジョーカーに仇を成すプリティミューだということは調べがついてるぜ」

明らかに変わったレオンの口調。

ミュは動揺した。相手が何者なのかもわかってしまった。

「まさか……プリティミューのファン!？」

「違うわボケッ！」

「じゃあストーカー!？」

「本気で言ってるのかあんた。オレの正体はジョーカーの変身名人 怪人カメ・レオンだ」

「ああ、やっぱりジョーカーか」

わかっていたが認めたくなかった。

ついにジョーカー学校進出。こうやって土足で人様の私生活に踏み込んでくるのだ。

どうするミュ!?

ここで変身するのは非常にマズイ。もしも誰かに見られたら?

ミュは変身前と変身後の仕様変更は衣装しかない。

こうなったら逃げるしかない。

出口は鍵が掛かってレオンが立っているから、やっぱり窓だろう。窓から飛び降りるところを生徒とかに見られても、すでにそのネタは今朝やっているのです。また奇跡で片づければいい。

背を向けてミュは窓から飛び出そうとした。その背中に声が掛けられた。

「逃げても無駄だぞ、すでにこの学園は包囲されている」

「そんな!」

ミュは窓枠に足をかけたままストップした。

包囲されているということは、ミュが外に出られないだけではなく、学校関係者全員が人質ってことなのか!?

すごい……なんだか今回のジョーカーはひと味違う。

なんだかマジだ!

やはりここで変身するしか……。

そのとき、窓の外から飛び込んできた人影にミュが膝蹴りされてぶっ飛んだ。

「ブハーツ!」

まさか敵の攻撃か!?

「天が呼ぶ、地が呼ぶ、人が呼ぶ、悪を倒せと私を呼ぶ……」
その決めゼリフはまさか!!

「私は正義の魔女っ娘、天に代わってお仕置きよ!」

紅髪のセクシー美女 魔導少女マジカルメグ登場!

三角帽子のツバをクイツと直しながらマジカルメグは床で伸びているミュを見下した。

「そんなところで寝ていないで立ちなさいミュー」

誰が蹴ったんだよ誰が。

……って、今たしかにそう呼んだような?

再びマジカルメグはその名を呼んだ。

「早く立ちなさいプリティミュー。あなたも変身ヒロインの端くれでしょ」

今度は聞き間違いじゃない！

ミュは驚いてビシツと立ち上がった。

「どうしてあなたまで!？」

「変身前と後の顔が同じなんだから誰でも気づくでしょう」

「……シヨック！」

そこを突っ込まれたら言い返せない。ローカルテレビ局、インターネット上、見事なまでにプリティミュの画像が晒されている。それでもそれでも広い世の中、ネットなんて全世界だ。そこでちよっぴり話題になってるローカルヒロインのことなんて、身内や学校くらいなら知られずに済むかなあって。

落ち着けミュ。

「大丈夫、大丈夫あたし」

マジカルメグはいわば同業者、ミュの正体くらいの簡単に調べられるかもしれない。だってジョーカーにもバレてるしね！

大丈夫、きつと身内とかにはバレていない！

レオンが真の正体を現した。

カメレオンにライオンのたてがみを生やしたカメ・レオン！

「マジカルメグまで現れるとはな。いいだろう、二人まとめて地獄に送ってやるぜ！」

ライオンの爪で襲いかかってくるカメ・レオン！

マジカルメグがマジカルスタツフを構えた。

「マジカルシュート！」

放たれた光の弾。

だが、カメ・レオンの姿が消えた。

次の瞬間、長い舌がバネのように伸び、マジカルメグを捕らえてしまった。

舌でぐるぐる巻きにされたメグ。これでは魔法も唱えることができない。

迷うミュ。

ここはやっぱり変身してメグを助けるべきなのだろうか？

それともばつくれる？

ミュは第三の選択肢を選んだ。

取り出すケータイ、ここで変身番号を打ち込めばプリティミュになるが、それはやらずに普通に通話。

「あ、もしもしアイン？」

《ワトソンだにゃー》

き、気まずい。

「や、やっぱりなんでもない！」

ミュは焦って通話を切った。

まさかワトソン君が出るなんて、今朝のこと思い出しちゃったじゃないか。

ミュがそんなことしている間にも、マジカルメグは長い舌で締め付け上げられている。

「いやあ〜っ、早く助けてくださあ〜い」

涙をボロボロ流しながらマジカルメグは情けない声を出した。

クールなマジカルメグが見せる素。

……あれ、デジャブ？

こんな展開が前にあったような。前はたしか触手だった。

長い舌はさらにマジカルメグの身体を締め上げ、バストがかなり強調された。

やっぱりデジャブだ！

前はミューがマジカルメグの杖を投げ渡して、それで万事解決したような気がする。

マジカルメグの杖は？

ミュは辺りを見回した。

「あつた！」

ミュは床に落ちた杖に手を……しまった誰かに先を越された。その杖を拾ったのは全身タイトルの戦闘員だった。

気づけば部屋中ジョーカーの戦闘員。

焦るミュ。

こつなつたらやつぱりアレしかない！

「恨むならジョーカーを恨んで！」

ミュは窓の外に飛び降りた。つまり逃走。

すでに学園はジョーカーに占拠されていた。

下駄箱、職員玄関などは封鎖され、生徒たちは校舎に閉じこめられている。

正門なども封鎖され、学園の外に出ることもできない。

しかも、あの場から逃げたミュだったが、すでに戦闘員にたちこめられていた。

戦闘員程度なら生身でも……。

ミュは熱い視線に気づいてしまった。

生徒たちが窓から顔を覗かせていではありませんか！

全校生徒の目がミュに注目。

生徒の中からこんな声が聞こえた。

「がんばってプリティーミ……」

そこまで言いかけて生徒は口を押さえた。

ミュはハツとした。

まさか気を遣われている？

もしかして全校生徒に正体がバレている？

それで気を遣って知らんぷりされていたの？

この頃、男子生徒に人気が急上昇だったのもそのせい？

「そんな……」

ミュはorzポーズで落ち込んだ。

バレないほうがおかしいさ、でもさ……気を遣ってもらってたなんて、シヨックだ。

でもこつなつたら肩の荷が下りた。

ミュはケータイを構えた。

「サイエンスパワー・メイクアップ！」

科学少女プリティミュー参上！

生徒たちの歓声があがった。

「がんばれプリティミュー！」

「応援してるぞプリティミュー！」

「みんなミュウの味方だよ！」

最後は本名を言われた。

もついいさ、正体なんてさ。

戦闘員たちが束になって襲ってくる。

ミュウは破れかぶれで戦った。

パンチ、キック、パンチラ！

男子生徒の歓声があがった。

なんか写メまで撮られている。

戦闘員の山が築かれた。

汗を拭うミュウ。

「ふう、とりあえず一段落。次は人質の解放か、それとも見殺しにしたマジカルメグはどうなったのかなあ……あはは」

今になって思えばあの場から逃げる必要もなかった。だって正体だってみんなにバレてるわけだし、さっさと変身しちゃえばよかったじゃないか。

きつと見殺しにされたメグは怒ってだろうなあ。

ミュウがため息を漏らしていると、下駄箱から戦闘員を引き連れたカメ・レオンが出てきた。マジカルメグはロープで縛られて気絶している。

ひとまずマジカルメグの安否を確認してミュウは一安心。

「死んでたら祟られるとこだったかも。とにかく……マジカルメグと人質全員を解放しなさい！」

強気にミュウは挑んだ。

「人質は解放しない。あんたを倒したあとにも有効活用させてもらうんでね」

カメ・レオンは嫌みたらしく笑った。

今回のジョーカーはマジだ。大規模作戦による学校乗っ取り。ミュウを倒すだけではなく、もっと大きな悪巧みがあるのか!?

これだけ多くの人質がいれば、いくらでも活用法はあるだろう。身代金だってふんだくられるだろうし、政府に交渉だってできるだろう。

どんなことを企んでいるかはわからない。だが、それを今食い止められるのはミューだけ！

「ごうなたら親玉を倒す！」

ミューはカメ・レオンに向かって走った。

立ちふさがる戦闘員たちをなぎ倒し、構えたマジカルハンマーを！

「きゃっ！」

ミューの手首が長い舌に掴まった！

そのままミューが敵の手に落ちてしまった。

長い舌でぐるぐる巻きにされた拳げ句、マジカルメグと同じようにロープで縛られてしまった。

敵の手に落ちた二人のヒロイン。誰も助けに来てくれないのか…

…。

ついにプリティミューも最終回になってしまうのかっ!？

一方そのころ、ネオアキバタウンのどっかにあるアインの研究所。「龍玉ぜんぜん見終わらないや。まだ細胞編も終わらないよ」

アインは背伸びしながら自室を出てきた。

リビングを通りかかったとき、アインの瞳にぼーっとしているワトソン君が映った。

「ワトソン君、魂が80パーセントほど離脱しているようだけど、なにかあったのかい？」

「にゃっ!？」

ワトソン君は我に返って驚いた。そこにアインがいたことすらも気づいていなかったようだ。

急にワトソン君は顔を真っ赤にして走り出した。

「なんでもないにゃー!」

その反応のどこを見れば何もない？

ありすぎ。

アインは首を傾げてキッチンに向かった。

捕らえられたダブルヒロイン。

今日は助けに来てくれる者も現れないだろう。

だってフンドシ仮面（誤字）は諸事情により使い物にならない。

そんなことなど知らない二人だが、最初からフンドシ仮面になんか期待にしていな。てゆか、頭にも浮かんでなかった。

「あたしたちをどうするつもりなの！」

ミューが叫んだ。

続けてメグも静かに口を開く。

「すぐに殺さないと言っことは、なにか理由があるのでしょうか？」

たしかに捕らえた理由がどこにあるはずだ。

カメ・レオンは何も答えなかった。

ここは校庭のど真ん中。こんな場所になぜ？

まるでカメ・レオンは何を待っているようだった。

しばらくして戦闘員たちが次々と空を見上げた。ミューとマジカ

ルメグも揃って空を見た。

空の彼方から飛んでくるヘリ。しかも武装している。

ヘリが上空から降りてくる。突風で校庭の砂が巻き上がり、ミュー

ーは思わず目をつぶった。

ついにヘリが地上に降り立った。

ハッチが開き、看護帽を被ったピンク戦闘員が降りてくる。

続いてベッドが運ばれてきた。しかも点滴まで。

ベッドに横たわるゲツソリした女。

戦闘員たちが息を揃えて敬礼。

「キーツ！」

戦闘員たちのこの反応。しかもピリピリした緊張感。ヘリから降

りてきた者がただ者じゃないことがわかる。

カメ・レオンはベッドの傍らに立ち、深々とお辞儀をした。

「これはこれはゲル大佐。わざわざのお越しありがとうございます」
その名を聞いたマジカルメグは息を呑んだ。

「まさか……ジョーカーの帝都支部を任されている幹部のゲル大佐なの!？」

ベッドからゲツソリした女がゆっくりと降りた。

「ゲホゲホッ……いかにも、うえええええ……アタクシがゲル大佐だ……」

今にも死にそうだった。

自慢の爆乳も今日は元気なく垂れている。

マジカルメグは驚きを隠せなかった。

「あんな弱そうな人が幹部なんて」

ミューも同意した。

「ホント、なんか顔なんて真っ青だし。自分の体調管理もできない人が幹部なんて信じられない」

「貴様ら言わせておけば……うえええええ」

ゲル大佐は鞭を振るおうとしたが、気持ち悪いし点滴打ってる最中だし、再びゆっくりとベッドに戻っていった。

しかも、ゲル大佐はバケツに『うえええええ』している。ゲル大佐というかゲロ大佐だ。

カメ・レオンは呆れたように首を横に振った。

「ここはオレに任せて帝都支部で休んでいればいいのに」

「ゲホゲホッ……ついにプリティミューとマジカルメグを捕らえたのだ……うえええええ……この手で……うえええええ」

もう会話もままならない状態だった。

白衣を着ていた戦闘員が頭の上でバツ印を作った。

「キーツ!!」

ドクターストップ!

ゲル大佐を乗せたベッドが看護婦たちの手によってへりに運ばれていく。

患者を緊急輸送!

そして、ヘリは飛び去った。

……何しに来たんだよ？

ジョーカー幹部との衝撃的な出会い。衝撃的過ぎて開いて口が塞がらない。

ぽか〜ん。

カメ・レオンは気を取り直すように咳払いをした。

「今のは見なかったことにしてくれ」

ゲル大佐ってなんですか？w

ここには誰も来ませんでしたし、ヘリなんか影も形も見えませんよ。

さーてと、カメ・レオンは鋭い爪を光らせた。

「オレが息の根を止めてやる。どっちを先にしようか？」

ミューは首を横にブルブル振った。

「あたしはただの女子高生だし、実はプリティミューのソックリさんなんです。この衣装とかも手作りのコスプレなんですよお！！」
言い逃れしようとしたが、校舎のほうからブーイング。まさかの全員敵に回ってしまった？

マジカルメグは冷静だった。

「どちらが先なんて関係ない……わたしはここで負けないもの」

縛られ動ける状況にない。

カメ・レオンはあざ笑った。

「たいした自信だが、今のあんたに何ができる？ あんたから血祭りに上げてやるよ」

「できるなら」

「殺してやる！」

マジカルメグの挑発に逆上して爪を振り下ろそうとした瞬間、カメ・レオンの口の中から植物の蔓が！？

次々と伸びる植物。口を花瓶に見立てた斬新な生け花ですか？

そして、毒々しい真っ赤な花が咲いた。

ミューの感想。

「キモツ！」

やせ細ったカメ・レオンは地面の上で痙攣している。

植物の蔓はまるで意志を持っていているかのように、マジカルメグを拘束していたロープを切った。

カメ・レオンに冷たい視線を送るマジカルメグ。

「この子は生物に寄生して育つ魔界植物ハナサカタロウ。貴方の負けはわたしを舌で捕らえたときから決まっていたの。あのときに種を仕掛けて置いたから」

怖っ、マジカルメグ怖っ！

ミューは言いづらそうな感じでそーっとマジカルメグに声をかける。

「あのお、あたしの縄も解いて欲しいなあとか」

「……わたしを置いて逃げたのは誰だったかしら？」

「そ、それは……作戦だったのよ、作戦！」

「別にいいわ。助けてあげる」

ロープを解いてもらったミュー。

カメ・レオンはすでに砂になって消えていた。

たくさんいたハズの戦闘員たちの姿もない。

これで一件落ち着いたのだろうか？

「あっ」

ミューは呟いた。

「フィギュアにできなかったけど……ま、いいか」

ピンポンパンポーン

校内放送が流れた。

《午後の授業をはじめます。全校生徒は速やかに授業の準備をしてください》

切り替え早っ！

ミューが教室に戻ると、恐ろしいくらいのシカト。

自分はミューじゃないなんて苦しい言い逃れをしたせいかもしれ

ない。あのとき確実に全校生徒が敵に回ったような気がする。

先生はまだ来ていないようだ。

というか、担任は謎の奇病らしいので、きっと代わりの先生が来るか自習だろう、てゆか、奇病って情報もカメ・レオンの言っていたことなので真実とは限らないが。

しばらく待っていると教室の前のドアが開き、先生が入って

ミュは眼を剥いた。

「カメ・レオン!？」

教室に入ってきたのは倒されたハズのカメ・レオンだった。

「プリティミューこの教室があんたの墓場だ！」

カメ・レオンの言葉が合図となり、クラスメートが一瞬にして変身セットを脱ぎ捨て、オール戦闘員に変身した。

一瞬にしてミュは席を立って、机の上に乗った。

「もしかして罠？」

そうです罠です。

しかし、カメ・レオンは確かにマジカルメグの魔界植物にやられたハズじゃ？

「オレがどうして生きているのか不思議なようだな」

「まさか死んだフリ？」

「あれはオレのダミーだ。冥土のみやげに聞かせたやろう。オレは自らが変身名人ただけでなく、他人を特殊メイクによって変身させるの能力があるのだ。しかも、見た目ばかりでなく、能力まで再現できる」

「じゃあマジカルメグに倒されたのは？」

「哀れな戦闘員くんだ」

なんだか今回のジョーカーはマジだ。黒歴史にされたゲル大佐以外は。

ミュの乗った机はまるで海原に浮かぶ孤島。周りは飢えた戦闘員たちに囲まれてしまっている。

しかも、パンチラ！

慌ててミュはスカートを抑えた。前を両手で押さえ、後ろを両手で押さえ、結局は両手で舞えと後ろを押さえた。

戦闘員がジリジリ詰め寄ってくる。

まるで祭壇に祀られた生贄状態。

一斉に戦闘員が飛びかかってきた。

ミュはパンチラ覚悟で戦闘員の頭を踏み台にしてジャンプした。

飛び石に乗るようにピョンピョンピョンと連続ジャンプだ。

教室の外に逃げようとするミュの背中にカメ・レオンが声をかけた。

「逃げてても無駄だぞ。全校生徒はすべてジョーカーと入れ替わっているのだからな！」

ミュは構わず廊下に出た。

ゾロゾロと教室から出てくる生徒たち。変身セットを脱ぎ捨てて戦闘員になった。

ミュは廊下を走りながらケータイを取り出した。

「サイエンスパワー・メイクアップ！」

瞬時にプリティミューに変身してハンマーで戦闘員の山をなぎ倒す。

なんか次から次へと沸いてくる戦闘員を見ると、ゾンビ映画を思い出してしまう。

「数多すぎー！」

ミュは叫んだ。

全校生徒がすべて戦闘員に入れ替わっているとすると、もう計算するのもイヤなぐらいの数だ。

後ろからも前から、ミューは戦闘員に挟み撃ちにされてしまった。

ちょうど運悪く窓もない。

「マジカルカノン！」

どこからか聞こえた声に合わせて巨大な光線が廊下を突っ切った。ミューは慌てて伏せたが、顔を上げてみると戦闘員たちがみんな

気を失っていた。人間じゅうたんのできあがりだ。

ただひとりその中で立っていたのはマジカルメグだ！

「うかつだったわ。まさかこんな畏が……あつ、プリティミューイ
たの？」

「いたのじゃないし、あたしまで殺す気がっ！」

「敵の数が多かったから範囲攻撃をしたまで」

「ちゃんと誰いるか確認してから撃つてよね！」

「わかつたわ、じゃあ伏せて」

「えっ？」

「マジカルカノン！」

ぶっ放された巨大な光線。

伏せたミューをかすめて後ろにいた戦闘員を一掃した。

マジカルメグはミューを放置して走り去ろうとした。

「ちよつと待つてあたしのこと置いていく気！？」

「最初から行動を共にしているつもりはないけれど？」

「緊急事態なんだから協力してもいいじゃん！」

「好きすればいいわ」

「ちよ、待つてつてば！」

走り去るマジカルメグの後をミューは急いで追った。

マジカルメグはどこに向かっているのだろうか？

「ねえ、どに行く気？」

「人質がどこにいるはず」

「どこつてどこ？」

「あんな短時間で全校生徒や教員を学園の外に移動させるのは不可
能。そうなると大勢が収容できる場所となると一カ所しかないわ」

「わかつた！」

ミューとマジカルメグはその場所に急いだ。

そして、二人がやってきた場所とは 体育館だった。

二人が体育館に飛び込むと、入ってきたドアが何者かによって閉
められ、部屋の明かりは急に落ちた。

スポットライトが壇上に向けられた。

「よくここまでたどり着いたな」

壇上に立っていたのはカメ・レオンだった。

さらにスポットライトは人質たちに向けられた。

「助けて！」

「ふざけんな俺たちをどうするつもりだ！」

「もうヤダ、早く家に帰りたい！」

叫び声や鳴き声、生徒たちの声が二人のヒロインに届いた。

人質に向けられていたスポットライトが消された。

壇上からカメ・レオンは手招きをした。

「科学少女と魔導少女、二人には楽しい余興をやってもらおう。さ

あ、壇上へ上がって来い！」

人質を取られている以上、従うほかなかった。

壇上に上った2人とカメ・レオンが向かい合った。

マジカルメグはすでに殺気を放っている。つまり、てめえ殺すぞオーラだ。

「わたしたちを壇上に呼んで何をさせる気？」

「察しが早くてありがたい。今から科学少女と魔導少女、どちらが強いか証明してもらおうと思う」

つまりそれは……。

ミューが叫ぶ。

「まさかあたしたちに殺し合いをさせる気!？」

カメ・レオンは笑った。

「そのとおり。拒否すれば人質がどうなっても知らないぞ？」

なんて卑劣な。なんて悪役っぽい怪人。

やっぱり今回のジョーカーはマジだ!

マジカルメグは頷いた。

「いいでしょう。ミューを倒したら人質は解放してくれるんでしょ
うね?」

「約束してやるう」

ミューが慌てて口を挟む。

「ちよつと、本気じゃないでしょうマジカルメグ？」

「いいえ、貴女ひとりの犠牲で大勢が助かるならば、わたしは悪にもなる」

「ちよ！」

「問答無用！」

マジカルメグが杖を構えて襲ってきた。

慌ててミューはハンマーで攻撃を受けた。

交じり合うハンマーと杖。

「ちよつと……話で解決しない？」

あくまで戦うことを拒否するミューに対して、マジカルメグの眼が冷たいこと冷たいこと。

「聞く耳を持たないわ」

「あなたのこと最初から好きじゃなかったけど、今からでも遅くないと思うの……友達になりましょう！」

最初から好きじゃないって、そのセリフがケンカ売ってます。

「葬る相手とは友達になれないわ！」

マジカルメグの杖が薙ぎ払われ、ミューの腹にクリティカルヒット。

ミューは腹を押さえながら後ろに大きく吹き飛ばされた。

ありえない、科学少女プリティミューでこんな展開が訪れるなんて。なんだか今回はみんなマジだ。ゲルなんとか以外は。

戦い合う二人を見ながらカメ・レオンは満足そうに微笑んでいる。

「さてどちらが勝つのか、マジカルメグが優勢か？」

生徒たちはどちらを応援していいのかわからない。

本当の敵はジョーカーのハズなのに！

そのジョーカーの戦闘員たちは賭をはじめていた。

プリティミューVSマジカルメグ

こっちもやつぱりマジカルメグが人気で、ミューは大穴扱いだった。

マジカルメグが足払いを放った。

見事なまでにすつ転ぶミュー。さらに見事なM字開脚パンチラ。倒れたミューに馬乗りになるマジカルメグ。

「覚悟しなさいプリティミュー！」

マジカルメグがミューの首を締め上げた。かに思われたが、ミューは少し驚いて眼を丸くした。まったく力が入っていないのだ。

首を絞めるフリをしながら、マジカルメグは自分の顔をミューの顔にグツと近づけた。

「人質はわたしが助けるわ。貴女はカメ・レオンを仕留めて。貴女がわたしを押し飛ばした瞬間、目くらましをするから強く眼を瞑るのよ」

すべてマジカルメグの演技だったの。でも、さつき腹に喰らった一発は死ぬほど痛かった。好きじゃない発言にたいする嫌がらせですか？

ミューは無言のまま眼で『うんうん』と合図をして、すぐにマジカルメグの身体を押し飛ばした。

すぐにマジカルメグが呪文を唱える。

「マジカルフラッシュ！」

閃光で目が眩む。

疾風のような早さでマジカルメグは床を滑るように走り、次々と見張りの戦闘員を倒していった。

カメ・レオンを任されたミューは。

「目が……見えないし！」

ちゃんと目を瞑れと言われたにもかかわらず、タイミングを間違えたっばい。

こうなったら破れかぶれでミューをハンマーを構えた。

「マジカルハンマー・フィギュアチェンジ！」

スカッ！

豪快な空振り。

「マジカルハンマー・フィギュアチェンジ、マジカルハンマー・フ

イギユアチェンジ、マジカルハンマー・フィギュアチェンジ、マジカルハンマー・フィギュアチェンジ、マジカルハンマー・フィギュアチェンジ!!」

とにかくハンマーを振り回した。

でもスカッ×5

戦闘員を倒して人質を救出したマジカルメグが叫ぶ。

「なにやってるのプリティミュー、早くカメ・レオンを倒しなさい！」

「言われなくたって……マジカルハンマー・フィギュアチェンジ！」

スカッ！

だんだんとミューの視力が回復してきた。

ということは相手も回復してきたと言うことだ。

「クソッ、目くらましとは小癪な。だが、こちらにはまだ人質が……って戦闘員が全滅してる!？」

気づくの遅いし。

カメ・レオンは額に汗をかきながら後退した。

「これで勝ったと思うなよ！」

突然カメ・レオンの姿が消えた!？

ミューは慌てて辺りを見回す。

「どこに消えたの!？」

「ここだ！」

背景の中から長い舌が伸び、ミューを拘束しようとした。

そのとき、遠くからマジカルメグの声が!

「マジカルカノン！」

またぶっ放しやがったぞ、おい。

反射的にミューは伏せた。

「ぎゃああああっ！」

光線の中に浮かび上がるカメ・レオンと悲痛な叫び。

黒コゲになったカメ・レオンは床に倒れながら、最後の力を振り

絞って遠くにいるマジカルメグに向かって手を伸ばした。

「範囲攻撃なんて卑怯だ……ぞ」

ガクツとカメ・レオンを気絶した。

敵の姿が見えなくても、範囲攻撃しちゃえば問題なし

マジカルメグはミューに背を向けて歩き出し、こつ言い残して消えた。

「止めは貴女に任せるわ、プリティミュー！」

残されたミューはハンマーを大きく振り上げて、床に倒れるカメ・レオンに問答無用の一撃！

「マジカルハンマー・フィギュアチェンジ！」

フィギュア化されたカメ・レオン。これで一件落着だ。

と、ミューが思ったのも束の間。

生徒たちが壇上に押し寄せてきた。

「やっぱりミユがプリティミューだったんだ！」

「一緒に写メ撮ろうぜ」

「ねえサインちょうだい！」

「今日の下着は何色、ゲヘゲヘ」

なんか変態が混ざってる！？

ミューは生徒たちに取り囲まれもみくちゃにされた。

「きゃっ、今あたしのお尻さわったの誰えっツ！」

こつして事件は一件落着した。

秘密結社ジョーカー帝都支部。

「おええええっ」

ゲロ大佐……じゃなくなってゲル大佐は死にそうだった。

なんだかバケツにリターンしてしまった食物に赤いモノが混ざりはじめている。

ゲツソリやつれたその顔は、以前の面影ゼロ。干からびたゾンビみたいな顔になってしまっている。

点滴のパックも大きくなり、ベッドを囲う医師団は増量、24時

間態勢で監視だ。

医療機器に表示された心拍数が……消えそうだ。
最初は心労だった。

そのせいで風邪を悪化させ、さらに肺炎になり、さらに心神耗弱。

吐き気、頭痛、腹痛、全身の怠さ。

さらに今度は。

「嗚呼、時が見える」

幻覚まで見えはじめた。

ベッドの脇に置かれた小型通信機に映し出されるシルエツト。

《だ、大丈夫かゲル大佐？》

声はいつもの低音ボイスの首領エックスだが、今日はまったく威厳がない。

あまりのゲル大佐の死にそうつぶりに、さすがの首領エックスも動揺しているのかもしれない。

「申し訳ございませんしゅっ、ゲホゲホッ、うえええ〜おええええ〜！」

通信機にモザイク機能がなかったために、モロ出し映像。

《オエエエ〜ッ》

首領エックスもつられて吐いたようだ。

通信がブツリ切れた。

ゲ 臭が漂う室内に甘い香りが流れ込んできた。

これは……ハチミツの香だ。

その匂いを嗅いだゲル大佐はバケツを手に取った。

「うえええ〜っ」

今のゲル大佐に食べ物の香、特に甘い香はNGだった。

「大丈夫ゲロたん……じゃなかったゲロたん？」

妖精のような羽を持つ少女が立っていた。

頭から伸びる2本の触覚と見せかけてカチューシャ。トラ柄クルクル模様のブラと、同じ柄のお尻に装着されたポイズンポットと毒

針セット。その姿は妖精というより蜂少女だった。

ゲル大佐は死にそんな顔を蜂少女に向けた。

「ミラクルハニーか……ゲホゲホッ！」

「大丈夫ゲルたん？ 喉痛みにはハチミツが1番だよっ！」

「おえええ〜っ」

甘ったるいのを想像しただけでバケツ一杯いけた。

もうゲル大佐にはしゃべる気力も体力も残されていなかった。

今夜が峠かもしれない。

こつなつたらミラクルハニーがやるしかない！

「アタシ頑張ってくるから早く元気になってねゲロたん！」

羽音を立ててミラクルハニーが消えたあと。

「うええええ〜っ」

いつまでもゲ の音が鳴り響いていた。

次回までゲル大佐は生きていられるのか！？

それともミューと直接対決もしないままに逝っちゃうのか！？

早く元気になって全国のファンの前に揺れる爆乳嬢王様として帰

ってきてください！

あっ、ミユはすっかり忘却してるけど、ワトソン君とママってどうなったの？

第7話「ミラクルハニーだよプリティミュー！」

花の金曜日、すなわちフラワーフライデー！
なんて英語はない。

ちなみに海上自衛隊では金曜日はカレーと決まっているらしい。

金曜日の夜、眠らない街ホウジュ区の輝きは、ワトソン君の瞳と同じくらいキラキラしていた。

ワトソン君のとなりを歩いているのは、何を隠そうミユママ！
妖しげな街並み。

ネオンの下を舞う夜蝶。

男女の行く先はラブホ街！

「マジ……ありえない」

力なくミユはつぶやいた。

母親が若い男を連れて歩いている。しかも、その相手ってのが、あのワトソン君（青年バージョン）。

そんなことがあっていいの！？

いや、よくない。

絶対によくない。

健全じゃない！

腕組みをしながら歩く二人の後ろ姿は、どう見ても不倫カップル。もしかしたらただの不倫じゃすまないかも。

ミユはゲツソリした。

ワトソン君をパパなんて呼ぶ日が来るかもしれないと考えるだけで、首つってご臨終したくなる。

あんなネコ人間がパパになるくらないなら、白いイヌがお父さんのほうがまだマシだ。あっちのほうが断然カワイイ。比べものにするのもおこがましい。

ワトソン君とミユママとはあるお店の前で立ち止まった。

思わず息を呑むミユ。

看板には『蜜蜂の館』と書かれていた。

蜜という響きがエロイ。

エロイと1度思ってしまうと、エロくてエロくてたまらなくなる。まるで催眠術。

男女が二人で蜜と言ったら……ゲホゲホッ。

ん〜ま〜、とにかく、ミュもそーゆー想像をした。

ミュの妄想ビジョンは広がっていた。

「あ〜どうしよ〜。ある日突然、弟ができたの……なんてママに言われたら。妹かもしれないけど。人面犬が弟なんて絶対にイヤ！妹かもしれないけど」

ミュが人目もはばからず、人から白い目で悶え苦しむ見られている間にも、ワトソン君とミュママはお店の中へ消えていく。

焦るミュ。

「早く追わなきゃ！」

と、言ってもお店の正面から堂々と入る勇氣はない。

ミュは裏手にある従業員口に向かった。

なんかこんなことが前にもあったような気がする。

前と同じなら、とりあえずドアノブに手を。

「あ、開いた」

開いてしまった。

店内に入った途端に鼻の奥を攻撃してくる甘ったるい匂い。甘すぎで胃もたれを起こしそうだ。

しかも、なにこの花畑。

店内はメルヘンでスイーツだった。

至る所に飾ってある花。

こんなところにいたら受粉してしまいそうだ。

ミュはこんな店に入るのは初めての体験だったが、なんだかそーぞーと違う。

もっとなんか、ああんとか、いやあんみたいなのを期待……じゃなくて、想像していたのに。

ミユは人目のつかないようにママたちを探した。とりあえずなんか個室がいつぱいある。

その一つから声が漏れてきた。

「ああん、そこ！」

ぎゃあああああつ！！

想像どおりの展開ぐあツ！！

しかも……じゃなかった、しかもを打ち間違えてしまっくらの衝撃がミユに！

「ママ！？」

そう、あの色っぽい声は紛れもなくミユママ！？

母親の声を聴き間違えるハズがない。が、あんな声を聴いたのは初めてだが。子供が聞いちゃいけない声だ。

自分の親がそんな声を出しているのを聴いたら、トラウマになる！

どうするミユ！

これからどうするんだミユ！

君はこれからどうする気なんだあああつ！！

そんなわけでミユはそーっとドアに近付いた。

さらに大胆にもドアノブに手を掛ける。

カチャつと開いた！

禁断の扉が開いてしまったよママァン！

部屋の奥から聞こえてくるあえぎ声。

「ああん、気持ちいい！」

ベッドの上で仰け反るミユママ。

その傍らには女性……女性？

レスプレイカッ！

いや、違う。

あれはプレイなんて生やさしいものじゃない。

あの手さばき プロだ！

謎の女性が黄金のとろ〜りとした液体を手にとりつけ、ミユママの柔肌に練り込む。

練り込む、そして練り込んで、また練り込む！

あれはまさか！？

オイルマツサージだッ！

ミュがさらに近付こうとしたとき、おっとどっこい、ドアが一気に開いてバランスを崩したミュが部屋の中に飛び込んだ。

バタン！

っと思いつきり倒れるミュ。しかも、うつぶせでパンツ丸見え。

驚くミュママ。

「ミュ！？」

焦るミュ。

「あ、うん……ちょー偶然だねママ！」

どんな偶然だよ！

そして、逃げるミュ！

ダダダダダッ！（走る音）

必死こいたミュは、しばらく走ってから立ち止まった。

おでこの冷たい汗を拭う。

「危なかったあ」

とつくに危ないを越えている。

でも、まあ一難が去ったことには違いない。

しかし、日本にはこんな言葉がある。

一難去ってまた一難。

「ここどこ！？」

ミュは迷子になっていた。

あたりを見渡せば、そこは謎の工場。

ベルトコンベアで運ばれてくる何かを全身黒タイツ……なんてこんなところにジョーカーがッ！

なんて煽るのもアホくさくなるくらい、待ってましたの登場だ。

読者には丸わかりの展開でも、ミュには見通せない。

まさかこんなところでジョーカーに遭っちゃうなんて、かわいそうなことにミュにはわからないのだ。

戦闘員たちは運ばれてくるビンの中身をチェックしていた。中に入っているのは黄金の液体。

ここまでの展開からどう考えても蜂蜜なのだが、ただの蜂蜜ではない。

ミュはこっそりビンを一個拝借した。または泥棒したともいう。ビンのラベルのはこう書かれていた。

お肌スベスベ、これであなたも20歳くらい若返る！

20歳とは大きく出たものだ。

だいたいこんなものは誇大広告に決まっている。

しかも、20歳くらい“くらい”がどのくらいの幅なのか。もしかしたら0歳も含まれているかもしれない。

ミュはさっさと関わらないようにすることにした。

ここがジョーカーと関わりがあるとわかった以上、深入りなんて好んでしたくない。

いつもなんだか事件に巻き込まれてしまうが、ミュはジョーカーと戦いたくて戦ってるわけじゃない。

工場から離れたミュは再び店内にやって来た。どうやらあそこは地下だったらしい。必死で逃げてとんでもない場所に迷い込んでしまったものだ。

「さっつてと、さっさと帰ろーつと」

なんて呑気に帰ろうとしていたミュの目の前に全裸の少年が!?なぜに!?

全裸!?

ぞーさん、ゆるらゆる

少年はミュの顔を確認するや。

「助けてにゃ！」

その口調は紛れもないが、その少年の姿は見たことがない。

きっぱり断言しよう あんなぞーさんも見たことがない!

いや、しかし、もしもってこともあったりして、驚いたミュが叫ぶ。

「ワトソン君!？」

そんなハズがない。

人間バージヨンのワトソン君は、もつとご立派だ（なにが?）。

ぞーさんをゆらゆらさせて駆け寄って来る少年が、見る見るうちに縮んでいく。というより、若返っているではありませんか!？

やがて少年だったものは、ミュの足下で赤ん坊になってしまった。

「にゃーにゃー」

しばらくミュは立ち止まって考えた。

「うん、帰ろう」

そして、なかったことにした。

巻き込まれていけない。絶対に巻き込まれてはイケナイ臭いがプンプンしている。

小うるさい猫人間がにゃーにゃー鳴いているのも気にせず、ミュは足早にこの店から出ようとした。

が、突然、個室のドアが開き、中からバスタオルを体に巻いた少女が飛び出してきた!

少女っていうか幼女はミュの顔を確認するや。

「ミュー!」

名前を呼ばれてしまった。

ミュには見覚えがないが、きつと関係者に違い。

しかも、ミュには嫌な心当たりがあった。

「もしかしてママ?」

「うん」

幼女はかわいらしく頷いた。

がーん!

ミュは頭を抱えてうずくまった。

もう見事なまでに巻き込まれました。さすがに家族まで見捨てることはできない。

ミニママを追って、ハチのコスプレをした店員が部屋から飛び出してきた。

「待ちなさい！」

と言って待つくらいなら、はじめからここまで逃げて来なかった
だろう。

ミニママは小さな体を活かして店員の腕の間をスルリと抜けて、
ミュの胸の中に飛び込んだ。

「助けてミュ！」

「助けるもなにも……とりあえず逃げる！」

ミュはミニママを丸太のように抱きかかえた逃走。後ろからはハ
チさんが追ってくる。しかも気づけば大群。

まるで蜂の巣でも突いたような状況。

こんなときは決して後ろを振り向かず、とにかく逃げる。

ミュは店内を駆け巡り、裏口から飛び出した。

後ろからは怒濤の気配がする。まだ追いかけてくる。どこまで追
いかけてくる気なのか。

「ママ、どうしようまだ追ってくるし！」

「ハチさんは黒いものに反応するらしいよお」

なんかしゃべり方まで幼い。見た目だけでなくどうやら中身は若
返っているらしい。

ミュはミニママの助言を受けて考えた。

ハチは黒いものに反応する。これはすでに実証された科学的根拠
のあることだ。みんなもハチのいそうな場所では、黒いものを身に
つけないようにしよう。

って、今の状況じゃ絶対に役に立たない豆知識！

では今の状況に対処する方法とは？

ミュはすでにテンパっていた。

「ハチの天敵は……って、そもそも後ろのお姉さんたちはハチって
前提でいいわけ？ コスプレしてるだけ、それとも蜂女なの、ジヨ
ーカーの怪人ってことでオツケー！？」

こんな調子じゃ良い考えなんて浮かびそうもない。とりあえず頭
でも冷やすべきだろう。

そんなときちょうど、空から雨が降ってきた。これで頭が冷やせるもんだぜ。なんて生やさしい雨じゃなかった。

ど・しゃ・ぶ・り！

Go・Go・豪雨！！

これはピンチだ。なにがピンチって、シャツが透けてブラ見えてしまうではないか。とくに夏服の女子学生が危ない。

しかし、ピンチとは一変してチャンスとなるものだ。

ハチのコスプレをした女たちが逃げていく。

「大変よ、雨に濡れたら飛べなくなってしまうわ！」

あの羽って飛べるのかっ！

ただのコスプレじゃないっばいぞ。

そんなわけでハチの大群からは逃げ切ったミュだったが、改めて状況を確認してみると。

幼女になっちゃったママ。

叫ぶミュ。

「あゝっ、ママが、ママが子供になっちゃった！」

大問題だ。

「もしもこのままママが元に戻らなかつたら……あたしってば未婚の母！？」

すでにミュの中では、ミニママを育てるビジョンができあがっていた。

「公園デビューもういいのか……入学、入園！？ お受験させて良い学校に入れなきゃいけないの！？ でもあたしも別にふっの学校だったし、お金とかかかりそうだし。てゆか、献立とか考えられないし！」

混乱しすぎ。

幼女がまん丸の瞳でミュを見つめる。

「ミュ寒い」

「え？」

「寒いよお、お風邪ひいちゃう」

「ええええ〜っ！」
たしかに一理ある。

こんな土砂降りの雨の中にいたら、ミュだって風邪を引いてしま
う。しかも夜。

ミュはミニママを抱きかかえて走り出した。
走るミュ。

Q・どこを？

A・繁華街を。

バスタオル姿の少女を抱きかかえて走る若い女の子。
絶対に不審人物として見られてる！

でもそんな人目なんてカマってられない。今は一刻を争う事態な
のだ。しかもそれに拍車を掛けるミニママの爆弾発言。

「ミュおしっこ」

もちろんミュ「おしっこというわけではない。

おしっこが漏れそうだという緊急事態ってわけだ。

「えええええ〜っ！」

ミュパニック。

大丈夫、慌ててはいけない。

そうだ！

「雨の中だから漏らしてもオツケー！　んなわけあるかー！」

ミュはセルフツッコミをした。

そんなプールの中でおしっこしてもバレないのなノリが通用する
わけがない。そもそもプールでもそんなことするな。もちろんお風
呂でもダメだ。

ミニママぶるぶるっと体を震わせた。

じよぼじよぼじよぼ〜。

ミュの体を温めてくれる……何か。

なんだか温かい液体が服に染みこんでいるような気がするよ。

あはは、きつと気のせいだね。

「気のせいなんかじゃない！　ああああっ、ダメ、漏らしちゃダ

メ！」

今さらミュにダメと言われても、後の祭りだ。

至福の表情をしているミニママ。

凍り付くミュ。

おしっこは温かいのに、都会の雨は冷たかった。

どうにか自宅まで帰ってきたミュ。

とりあえずミニママにTシャツを着せて、まるでワンピースみたいな感じにさせて、自分も着替えを済ませて今後の対策を練る。

まずは、掃除洗濯……の前に、ミニママをどうにかしなければ。

まだ主婦になると決まったわけじゃない。ミニママがミュママに戻れば万事解決だ。

ミュひとりでは解決でない問題も、誰かに相談すればどーにかなるかもしれない。

相談する相手と言ったら、あのメガネのフィギュアオタクしかないわけだが、本当に相談を持ちかけていいものか？

でも、事件はジョーカーがらみなわけだし、性格に問題があってもとりあえず天才であることは間違いない。

ミュはとりあえずケータイからアインに電話をかけてみることにした。

ブルルルルル

コール音が響く。

でも、出ない。

しばらくすると留守番電話サービスに繋がってしまった。

「ああああーっもぉ！　なんで出ないのー！」

普段から部屋に引きこもってるクセに電話に出ないなんて、きつと居留守に違いない。そう思うとミュに怒りはふつつと沸騰する。

こうなったら直接アインのところに行くしかない。

と思っていた矢先、ピンポンと家のチャイムが鳴った。

「こんなときに誰？」

ミユは駆け足で玄関に向かい、ドアスコップから外を確認した。そこに立っていたのは、レインコートを着た見知らぬ女性の大群。嫌な予感がする。

ミユがドアを開けるかどうか迷っていると、女たちは玄関を離れ庭などに散り始めた。家の周りを占拠された。

状況から考えてジョーカーの関係者だろう。そもそも今まで来なかったことが奇跡に近い。正確にはハサミ男（仮名）が家の中まで入ってきてるけど。

前回の戦いでは学校に教師のフリして変装名人（仮名）がやって来た。

もうミユには私生活なんてないのだ。

そういえば、ワトソン君か誰かだが、ミユの家は24時間監視してるから、ジョーカーなんてぜんぜん平気的なことを言っていたような気がする。

ぜんぜんダメだし！

なんかもう敵の包囲網の中だし！！

慌てるミユ。きつと間もなく敵が土足で踏み込んでくる。雨の日
に土足なんて掃除が大変じゃないか！

とりあえずこの場から逃げるのが先決だろう。

ミユがミニママの手を引いた瞬間、家が揺れた。

まるで地震のような揺れだ。立っているもやっとなくらい大揺れだ。

これはただの地震なのか？

外から雨音に混じって声が聞こえてくる。

「家が沈んでる！？」

は？

地盤沈下ですか？

地盤が弱い場所に家を建てたりすると、地震の影響で家が沈んだりするアレですね。

だが、状況はそんなもんじゃなかった。

家中から聞こえてくる不気味な謎のモーター音。

窓から見える景色が徐々に上がっていく。

家は沈んでいるのではなく、自ら地中に潜っていたのだ。

二階建ての一軒家は完全に地中に姿を消してしまった。もはやそれを追う手立てはない。八千のコスプレ美女軍団は為す術もなくその場に立ち尽くした。

一方、家の中に取り残されたミユは大パニック。

気づけば窓という窓は金属っぽいもので塞がれ、外の景色すら見ることができない。ただ、なんだか家が動いているような気がする。しかもかなりのスピードで下へ。

まるでエレベーターが目的階に到達したように、重力がうおんとなった。胃がびっくりする。

そして、家は再び動きはじめた。

おそらく今度は横に移動している。

もう意味がわからない。

ここままだとまで行くのだろうか？

最悪、途中で止まって地中に埋まったままなんてことはないだろうか。

ガッ！

強い衝撃と共に家の動きが止まった。

これ以上、動き出す気配はない。けど、窓はまだ塞がれたまま。

そもそも、上に移動した感覚がないので、おそらくまで地の底だ。

まさか本当に生き埋め！？

冷蔵庫に食料はある。

でも電気とか通っているのか？

通ってなかったら冷蔵庫は数時間で悲惨なことになる。

水道は平気なのだろうか？

家ごと移動したのに、水道管がくつついてきているハズがない。

てゆーか、そのうち酸素すらなくなる。

ものすごい緊急事態じゃないかッ！

慌てたミュはすぐさま玄関に向かった。

もしも地中だったらドアを開けたら悲惨なことになりそうだが、今のミュはそこまで頭が回らなかった。

「トイレの水が流れないなんて悲惨すぎる！」

給水タンクがあるので1回分は大丈夫だが、そのあと大きい方でもしたら……。

悲惨すぎる！

それは一刻も早くここを脱出しなくては！！

ミュは玄関のドアを力一杯開けた。

そして案外あっさり開いてしまったドア。

勢い余って外に出たミュはコケた。

潰れたカエルのように床に倒れたミュは本日二度目のパンチラだ。そこは小さな個室だった。金属の天井と壁で囲まれ、もちろん床も同じ。窓はやっぱりない。あるのは次の部屋へと続くドア。

「どじじじっ。」

つぶやくミュ。

とりあえず生き埋めは免れたらしい。

さっそくミュは次の部屋に移動しようとしたが、そのドアを開けるためには暗証番号が必要だった。

そんな番号知るかーッ！

やっぱり生き埋めだ。

暗証番号は0から9までの数字の組み合わせ。何桁の組み合わせかわからない。

こうなったら仕方ない！

ミュはテキストに数字を押しまくった。

そして、決定ボタンを押す。

ブー！

明らかに間違えな音がした。

再びミュは挑戦する。

今度は自分の生年月日を入力してみた。

ブー！

やっぱりダメだ。

ちよつと考えてみよう。

家が地中を移動するなんて、一般の住宅には備わっていない機能だ。ということは、自然に考えてアインの仕業に決まっている。

三度目の正直、ミュはアインの研究所の電話番号を入力してみた。ブー！

「これも違うの！？」

次はアインのケータイ番号を入力しようとした矢先！

《パスワードの認証に3回失敗しました。このドアは一時的に閉鎖されます》

そして、サイレンが鳴りはじめた。

明らかにやつちやつた感じだ。

部屋の照明も赤く点滅している。

「ええ、えええ、どうしたらいいの〜っ！？」

どうするもなにも、どーしよーもない。

この騒ぎを聞きつけて、ミニママもこの場にやって来た。

「どしたのミュ？」

「え〜つと、防災訓練……防災訓練に決まってる！」

もはや現実逃避。

しかし、サイレンが鳴り響いてからしばらく経っても、何事も起きない。

放置プレイ！？

これって放置プレイなの？

サイレン鳴らしてビビらせるだけビビらせといて、放置ですか！

どんだけSなんですか！！

10分が過ぎ、20分が過ぎ、30分が過ぎ。

遠くでサイレンが聞こえるのをシカトして、ミュは自宅の居間でミニママと対戦ゲームに夢中だった。

どうやら電気は通っているらしく、任電堂Wi-Fiのゲームソフト

『大乱交スマツチヨブラザコンズDX』略して……ゲフンゲフン（大人の事情）で遊ぶ二人。

このゲームは対戦アクションゲームなのだが、ミュは子供にも容赦ない。

「ふふん、またあたしの勝ち」

「もうこのゲームやめるー！」

「え、まだやろうよ」

性格悪し。

そんなことをしていたり、ミュママをお風呂に入れたり、再びゲームをしたりしているうちに、刻々と時間は過ぎていった。

ミニママが大きなあくびをした。

「ねむい」

時計を見れば、もうよい子はおねんねの時間だ。

ミュはミニママを寝かしつけ、ほっと一息。

今日はこんな感じで終わったが、明日から子育てが本格化するのだ。

「って、なんであたし子育てなんてしなきゃいけないの！」

そりゃそうだ。

「そういえばパパどうしたんだろ。家に帰ったら家が無いなんて、きつと大騒ぎしてるんだろうなあ。あ、そうだパパのケータイに

ってやっぱり圏外」

ケータイは地下だし圏外。固定電話も確かめたが、回線が繋がっていないようだった。

ここで地下に家ごと生き埋めにされたのだと再認識。

「どうしようっ！」

遠くではサイレンが未だに鳴っている。そろそろ誰かサイレンを聞きつけて来てもいいのに。

っていつか、とつくに来い。

ミュは再び玄関を出てあの個室に向かった。

サイレンがうるさい。いつまで鳴ってる気なのだろうか。

ここで突然だが説明しよう！

ミュはアインに改造された改造人間である。そのパンチ力、キック力、馬鹿力は人間の比ではないのだ。

とりあえずミュはドアを殴る蹴るの暴行。

ドン！ ガン！ アダダダダダッ！

ビクともしなかった。

ここでもう一度説明しよう！

ミュはメガネのクソガキに体を弄られちゃったサイボーグである。その破壊力、殺傷力、やっぱり馬鹿力は人間なんてちょちょいのちよいのだ。

再びミュがドアを殴ろうとしたとき、ウィーンっとドアがスライドして開いた。

そして、ピタツと止まったミュの拳の先にいたのはメガネ。

「もしかしたら言い忘れたかもしれないけど、ボクの心臓が停止したら、ボクの関係機関や私物を破棄するために爆発することになるから。それ以上は言わなくてもわかるよね、バカでも？」

アインはサラツとおどし文句を言った。

「それってアインをぶっ殺したら、あたしも爆死するってこと？」

「わざわざ聞くなんで、キミ馬鹿だろ」

馬鹿にされたミュはアインを馬鹿力で殴ってやりたかったが、バカバカつと心の中で叫ぶに留めた。

で、アインがこの場に現れたってことは、やっぱりここはアインの関係機関なのか？

そういえばサイレンもいつの間にか止まっている。

アインは嫌そうな顔をして言う。

「それで何をしに来たんだい？」

は？

「来たくて来たわけじゃないんだ」

「じゃあさっさと帰りなよ、ボクはアニメ観賞で忙しいんだから」

「だから来たくて来たわけじゃないって言ってるでしょ。なんか家

の周りをジョーカーの関係者っぽいやつらに囲まれちゃったら、なんかこんな感じで家が勝手に動いて、今に至るみたいな」

「ジョーカーならジョーカーと早く言いたまえ。ふむ、それで今度のフィギュアはどんなのだい？」

「知らないし。怪人に会ったのか会ってないのか」

八手のコスプレ美女軍団が、もしも全部怪人だったら……。

とりあえず立ち話もなんだということで、アインはミュをほかの場所に案内した。

地下からエレベーターで上がり、やって来たのが見覚えのある部屋。

壁の棚に飾られているフィギュア。前よりも増えているような気がする。

ここはアインの研究所、主にリビングとして使われている部屋だ。つまり、ミュの自宅ははるばるアキバ区にあるアインの研究所の地下までやって来たらしい。

とりあえずミュはこれまでのことをアインに話して聞かせた。ちなみにワトソン君のことはなかったことにした。自分の母親と一緒にだったなんて口が裂けても言えない。

話を聞き終えたアインはひとつうなずき。

「ふむ、それで被験者はどこだい？」

「ミニママのことである。」

「もうとっくに寝てるし。起こしたりしたら承知しないから」

すっかり保護者のミュ。

「しかし、調べないことには対処の仕様がね。せめてほかの手がかりがあればいいけど」

「あ、もしかしたらこのハチミツが原因かも？」

ミュはどこからか工場でいつの間にかパクったハチミツのビンを取り出した。てゆか、今まで持つとたんかい！

ゲームの最中とか、さぞ邪魔だっただろう。

アインの背負っている万能ランドセルからマジックハンドが伸び、

それがハチミツのビンを回収した。

ビンはランドセルの中で解析される。

チーン

まるでレンジのような音がして解析結果が出た。ランドセルから出たディスプレイに謎の図形やら意味不明な記号が羅列している。

「ふむ、どうやらとても健康良いロイヤルゼリーのようだね」

「それだけ？」

「いや、通常のロイヤルゼリーの成分のほかに、脳に作用を……凡人にもわかりやすく説明してあげると、若返りの成分も含まれているというわけさ」

「凡人で悪かったですねー。でさ、ママは元に戻るの？」

「元の年齢までちょうど戻すのはめんどくさいね」

「できないんじゃないかって、めんどくさいのかよ！」

アインは手のひらに置いた謎のスイッチボックスを押そうとしていた。

「バイト君が帰ってくるまでには余裕で逆若返り薬を作っておくよ。帰ってくるまでには？」

そして、アインはボタンを押した。

ポチツとな。

「きゃっ!?!」

悲鳴をあげたミュの足下に落とし穴!?

チューブの中をウォーターライダーみたいに滑り落ちるミュ。

なんかデジャブ。

ストーンと落ちたそこは発射台だった。

ミュの体にシートベルト。またの名を拘束具が装着され、息つ

くヒマもなくミュの体は再び上昇。

発射!

道路の真ん中で開いたマンホールからミュの体が天高く打ち上げられた。

嗚呼、何度目かの人間ロケット。

そろそろ飛行システムとか付けてくれればいいのに。

羽根も翼もジェットもないミュウは、自由落下にこの身を任せてフ
ォールイン蜜蜂の館。

天井をぶち破り、地下の工場まで落下。

生産ラインで働いていた戦闘員たちが慌てふためく。

瓦礫の山の中からよきつと立ち上がるミュウ。

「あはは、どーもお世話がせしてすみませ〜ん」

笑って誤魔化すが、どう見ても笑えない状況。

戦闘員のひとりが気づいた。

「プリティミュウだ！」

速効でバレた。

ミュウはケータイを掲げて叫ぶ。

「サイエンスパワー・メイクアップ！」

科学少女プリティミュウ見参！

さっさと変身して、さっさと仕事を終わらせたかった。

「え〜つと、で、ジョーカーの怪人さんはどなたですか？」

とりあえずミュウは質問を投げかけた。

が、返ってきたのは戦闘員の山。

キーッ！

キーッ！

黄色い声をあげる戦闘員たち。

ここは猿山かッ！

戦闘員がいくら束になってかかってきても、ミュウはアッサリさ
っぱりした顔でぶちのめす。戦いにも慣れてきたし、戦闘員なんて
目じゃない。

猿山じゃなくて戦闘員の山の上にミュウが立っていると、部屋の
奥から続々とコスプレ美女軍団が現れた。

八手のコスプレをしているだけに8人！

「よくも工場を滅茶苦茶にしてくれたわね！」

「せつかくの大人子供作戦が台無しだわ！」

「あなたのせいで減給されたらどうしてくれるのよ！」

「次のバイト何にしよう」

「私正社員だから、クビになったら困るし！」

「いいなあ、バイトは気が楽で」

「もう商品の一部は出荷済みだし、作戦は成功ってことでいいんじゃない？」

「ここでミューを殺しちゃって、上に報告しなきゃいい話だし」

8人は顔を見合わせながら『うん』と力強くうなずいた。

そして、一致団結してミューに襲い掛かってきた。

怒濤の連続8コンボ！

前からも横からも後ろからも、そして上からも毒針を手に持った美女が襲い掛かってくる。状況が状況じゃなければハーレム展開なのに。

コスプレなのか未だに定かでないが、あの羽は空も飛べるらしく、足場の悪さに関係なく襲い掛かってくる。

一方ミューは、戦闘員の山に足を取られて、思うように動けない。まるでモフラ叩きというか、ワ　ワ　パニックというか、マジカルハンマーを構えたミユの前に代わる代わる現れる美女軍団。

ミューの必殺技であるマジカルハンマー・フィギュアチェンジは、ミューの胸にあるハート形の萌えメーカーが堪らないと発動できない。今回は美女軍団とのコラボということもあって、溜まりが早いには早い、もしかして8回分溜めるハメになるのか？

そもそも今回の怪人は本当に彼女たちなのか？

でも、とりあえずフィギュアを持ち帰れば、あのオタクは満足するんじゃない？

ってことで、ミユはマジカルハンマーを振り回した。

「マジカルハンマー・フィギュアチェンジ！」

8匹もブンブン飛んでりゃ一匹くらい当たるでしょーってわけで、

見事にクリティカルヒット！

ほとんど床に蜂女のフィギュアが落ちた。

それを見た美女軍団がざわめき立つ。

「もうこのバイトやめた！」

一人が逃げ出した。

「私もこんな安月給じゃやってらんないわ」

また一人が逃げ出した。

「二人がやめるなら私もー」

3人目脱落。

「みんないつちゃうのお？」

4人目脱落。

「わたしたちもやめよっか？」

「うん、そうよね」

5人、6人と脱落。

「そういうことで」

笑顔でお辞儀して7人目も脱落した。

一人残されたミューはボソツとつぶやく。

「ラッキー」

フィギュアチェンジはメーター待ちがあるので連続で使えない。

あと7人も相手にしていたら、もうゲンナリだ。

1個でもフィギュアを持ち帰ればメガネも満足するだろう。8人

だったなんて言わなきゃいい話だ。

「さっつてと帰ろう」

戦いも終わり、堂々と店の正面口から出たミュー。

すっかり雨も晴れ上がり、夜空には星が輝いていた。

が、ここで衝撃の展開が！

眠らない大人の街がこどもの町になっていたのだ。

明らかに体のサイズに合っていない服を着た子供たち。

「うん、見なかったことにしよう」

ミューはいつも通りスルーすることにした。自分の役目はすでに

終わってる。この事件はまた別の人が解決すればいいこと。

フィギュアを大事に抱えミューはこの場をダッシュで逃げ去る予定であった。

が、その前に立ちはだかる少女。

2本の触覚、クルクル模様のブラに、お尻についた針付きポイズンポッド。もちろん背中には昆虫の羽だ。

ハチだ、どうみてもハチだ、ひいき目に見てもハチだ。

今回の怪人のミラクルハニーだ！

「あなたがミューたん？」

クリクリした瞳でミラクルハニーは尋ねた。

「違います！」

ミューはきつぱり断言した。

「そうなんだあ。なら子供には興味ないからバイバイ！」

ミラクルハニーはミューの前から立ち去り、近くにいた大人を襲いはじめた。

お尻についた針でぶっ刺す！

ぶっ刺されただけでも痛いのに、刺された大人が見る見るうちに子供になってしまった。

あれが元凶かーッ！

急にミューの頭の中で声がした。

《バイト君、ニュース映像に映ってるよ》

「え！？」

辺りを見渡すと、遠くでテレビクルーがこちらを撮影してた。

通信してきたのはアイン。ばっちりミューの姿をテレビで確認しているっばい。

《ふむ、どうやらあのハチ少女の毒液から抽出した成分で、あの若返りの薬は作られているらしいね、ボクには興味のないことだけど。それよりも早く、あの怪人をフィギュアにして持って帰って来たまえ》

「フィギュアならちゃんとここに……」

《ボクが見てないでも思ったのかかい。キミは24時間ボクの監視下にあるんだよ、それが親玉じゃないことくらい知ってるよ。でもコレクターとしては欠かせないアイテムだから、残りの7体もちやんと手に入れるんだよ》

「はっ？ 24時間ってお風呂やトイレまで!？」

「そんなことどうでもいいから、早くフィギュアを持ってこないとスイッチ押すよ?」

スイッチとはつまりミューの起爆スイッチである。

「どうでもよくないし! その話は今度じっくりするから、今はとにかくフィギュア持って帰ればいいんでしょ!」

やけくそ気味のミューの先では、ミラクルハニーが美女軍団にお説教していた。

「今度逃げたら容赦しないんだからねっ、ブンブン!」

ほっぺたを膨らませて怒る仕草は、確実に狙ってやっているに違いない。

上司に注意されてすんなりいくなあと思つたら、美女軍団のバイトともめているようだった。

「バイトの安い時給で命かけられませ〜ん」

そして正社員まで。

「それを言うなら、私だって安月給だし。女王様、給料上げてもらえませんか?」

ミラクルハニーは困った顔をした。

「アタシだって中間管理職だし、給料の相談はゲルたんにしてくれるっ?」

「だってゲロ大佐は入院したっていうじゃないですか!」

いつの間にかゲロ大佐の俗称で通ってしまっているらしい!

そんな会話に割って入るミュー。

「マジカルハンマー・フィギュアチェンジもどき!」

またの名は殴打。

ハンマーでミューは美女軍団のひとりを仕留めた。

メーターが溜まってないからフュギョア化はできないけど、ハンマーそれそのものにも十分な攻撃力がある。

フィギュア化は後からでもできる。今は一匹倒したから、あと7匹をどうにか片付けなければ。

ミューが闇討ちをしたせいで、敵のヤル気に火がついたようだ。

「この卑怯者！」

敵に言われてしまった。

ハチのように舞い、ハチのように刺す。

6匹のハチが次々と毒針で攻撃を仕掛けてくる。ミューから攻撃を仕掛けようものなら、その隙をい突かれて反撃されそうだ。

そして、嬢王蜂は頑張つて応援していた。

「がんばつてえ〜！　そう言えばミューを仕留めたら特別ボーナスが出るらしいよお」

俄然ヤル気の出た美女軍団。

ミューは蝶のようにひらりひらりと交わすのに必死だ。

萌えメーターもまだ貯まってくれない。

「もお、この萌えメーターシステムどうにかならないの！」

《萌えメーターなら簡単に貯まる方法があるよ》

戦いの最中に突然のアインからの通信。頭の中に声が響いて集中できない。

《萌えメーターはね、キミ自身が萌えの対象である必要性はないんだよ。バイト君の周りの萌えパワーを吸収蓄積して、エネルギーに変換して出力するシステムなのさ。テレビ中継されてるからね、すぐメーターは溜まると思うよ》

と、言っている間にもメーターは満タンになっていた。

ミューはハンマーを構えた。

「マジカルハンマー・フィギュア」

《そうだバイト君》

おっとと、ミューは見事にバランスを崩してコケそうになった。

「ちょ、途中で話しかけないでよ！」

《広範囲をフィギュア化する必殺技があるの教えたことがあったかな？》

「ないし！ 早く言え！」

《萌えメーターは表示が満タンになっても、エネルギーの蓄積自体は続いているんだ。きつと今ならマジカルハンマー・インパクトが使えるハズだよ》

「どうやって使うの！」

《そんなこともわからないのかい？ 必殺技の名前を叫びながら地面をハンマーで叩くに決まってるじゃないか》

わからないし！

ミューはアインに全力でたて突きたかったが、あれこれ話している間に、六方から美女軍団が飛び掛かってきていた。

アインが声をあげる。

《今だ、バイト君！》

ミューがハンマーを振り上げた。

「マジカルハンマー・インパクト！」

地面を激しく叩いたハンマーから閃光が爆発したようにドーム状に広がった。

ミューも美女軍団も、近くで応援していたミラクルハニーまでも、光はすべてを一瞬にして呑み込んだ。

やがて夜が再び舞い降り、次々とフィギュアが地面に転がった。

だが、フィギュアの数全部で7体。

冷や汗を垂らしながらミラクルハニーが地面から立ち上がった。

「危なかったあゝ」

どうやらミラクルハニーだけフィギュア化し損なったらしい。

一人残ったミラクルハニーはついに自らその毒針をミューに向けてようとしていた。

にも関わらず、ミューは地面にへばったまま動けなかった。

《そう言えば言い忘れたけど、その技を使うと全身が激しい筋肉痛になって、立ち上がることもままならなくなるから気をつけてね》

今さら遅いし！

てゆか、サイボークなのに筋肉痛って！

しかも、萌えメーターの残量はゼロ　　から徐々にまた上がりはじめていた。

テレビカメラに映し出されるミューのモロパン！

ミューが身動きできないことを良いことに、スカートの中を盗撮しまくりだった。

ミラクルハニーがミューに飛び掛かろうとして……コケた！

「いった〜い！」

この少女ズツコケでメーターがまた上がった。

さらにいつの間にかギャラリーの声援が飛び交っていた。そのギャラリーというのが、この界限で働く綺麗なお姉さん方。胸の開いたドレスでゆっさゆっさ応援してくれている。

またメーターが上がった。

そして、ミラクルハニーの毒針によって少女になってしまった夜の蝶がボソツと。

「おちっこ」

これが一部マニア層にバカウケだった！

メーターが一気に満タンまで振り切れてしまった。

今ならイケる、必殺技を繰り出すんだプリティミュー！

が、しかし！

ミューにはそんな余力は残されてしなかった。

それでもミューは最後の力を振り絞ってた！

「マジカルハンマー・フィギュアチェンジ………」

だが、ハンマーは持ち上がらない。

「バイバイ、ミューたん」

ミラクルハニーの毒針がすぐそこまで迫ったそのときだった！

急にミラクルハニーの体が輝きはじめ、見る見るうちに縮んでいくではないか！？

よく見ると、ミラクルハニーの羽の一部がハンマーに触れてい

た。

ドジっ子！！

「いやぁーん！」

甘えた声を出しながらミラクルハニーはフィギュアになった。どうにか戦いは終わった。

でも動けないミュー。

そのモロパンがいつまでもカメラに写された。

秘密結社ジョーカー帝都支部。

じゃなくって、都立帝都病院の個室。

ベッドの横たわり、まるで干からびた婆さんと化したゲル大佐。食事ものを通らず、点滴がポタポタと落ちる。

部屋の片隅に置かれた通信機から声がする。

《おい、誰かおらんのかー？》

返事がない、ただの屍のようだ。

心拍計の線がまつすぐになり、医師団が動き出した。

「電気ショックの用意！」

緊迫する病室の片隅では通信機から声がする。

《首領Xが呼びかけておるのだぞ、誰か返事せんか》

オバチャン看護師が通信機にツカツカと近付いてきた。

「首相だかなんか知らないけど、さっきからうるさいのよ！」

《首相ではなく首》

看護師の手によってブチッと通信機が切られた。

そんな間にもゲル大佐は電気ショックで息を吹き返していた。

だが、息を吹き返したと同時に吐血。

「ゲフッ！」

「緊急手術の用意だ！」

すぐさまゲル大佐は手術室へと運ばれた。

誰もいなくなった病室に、食欲をそそるカレーの匂いを連れてタバンの男がやって来た。

「ゲル大佐、わしのカレーを食べて元気に……いない」
残っているのは血痕のついたシート。知らない人が見たら殺人事件の現場だ。

だが、彼もまたジョーカー怪人であった。そんなことくらいでは慌てず騒がない。

ターバン男は部屋の片隅にあつた通信機のスイッチを入れた。
「スイッチを切っては大事通信があつたときに困るではないか」
ポチッとスイッチを入れた途端、大声をスピーカーから飛び出てきた。

《電源を落とすとは何事だ！ 看護婦の分際で血祭りにかけてくれ…… 伝説の男コブラではないか》

通信機の小型モニターに映るシルエット。向こうが見えていると言ふことは、向こうからも見えている。

相手がコブラということに気づいて、気を取り直す首領X。

《たしか新たな味を求めて世界を旅していたのではなかったのか？》
「ついにカレーの新レシピを作りました。近々帝都に店をオープンすることになりましたので、ぜひ首領X様にもおいでいただきとうございます」

《ならば行かせてもらうとしよう》

「今日中にも招待状にカレー無料券を添えてお手紙を届けますゆえ、楽しみにお待ちください」

《おお、楽しみにしておるぞ！》

なんだか声が弾んでいる首領X。謎に包まれた存在だが、もしかしてカレー好きの一面が！？

コブラはモニターの先にいる首領Xに会釈をした。

「それではわしは開店準備がありますゆえ、これにて失礼」
病室を立ち去るコブラ。

そして、スイッチを入れたまま放置された小型通信機。

《おゝい、誰かおらんのかー？》

虚しく首領Xの声だけが響き渡った。

ついに帝都の街に伝説の男コブラのカレー店がオープン！
果たして首領Xは本当に来店しちゃうのか！
そして、ゲル大佐の緊急オペの行方は！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9758d/>

科学少女プリティミュー

2010年10月8日22時22分発行